ゆうかり

第４回移住者子弟技術研修生
研　修　レ　ポ　ー　ト

1976年３月

国際協力事業団

RY

JICA LIBRARY
1067176[6]
17652
国際協力事業団
17652

巻頭言

移住者子弟技術研修制度も第６回生を受入れることとなった。現在研修中の第５回生を含め、迎えた研修生は７２名、そして研修科目は１７科目に亘っている。

これ迄必ずしもまとまった勉強の機会に恵まれずに成人し、今や家業の大黒柱として活躍を期待される青年にとって、１８ヶ月間の基礎理論の学習と実習は、個々の問題意識の解決を完全に行なうに充分な期間とはいえないかも知れない。

しかしながら、これまで、研修機関々係者の絶大なるご協力と研修先の諸先生の特別のご指導、並びに研修生諸君の「学ばんとする強い意欲」が協和した結果、この制度が高い評価を維持しているものとなっており、誠に喜ばしいことである。

そこで帰国後の活躍がより一層活発となることが期待されるのであるが、本小誌が帰国した研修生の活動の報告、技術交換の場となり、かつ相互の切磋琢磨のかけはしとしても活用され、自己の経営の向上を通じ、各国の地域開発の振興への地道な成果につながることを期待してやまない。

最後に移住者子弟技術研修制度を深くご理解下さり、研修生を温くご指導願った関係諸機関の皆様方に改めて感謝の意を表する次第です。

１９７６年３月

国際協力事業団

移住第二業務部長

国際協力事業団	
受入月日	
登録No.	

目　　次

巻頭言

来日 ― 日本の印象

高度成長、日本の姿をみて……中村　弘… 1

百聞は一見にしかず……渡辺一寛… 3

アマゾンと日本……高谷和夫… 5

目を見張る日本……米　慎也… 7

桜に富士と武士道(サムライ)と……原本　功… 9

狭い国土の中での日本人……藤井恒正…11

合同研修 ― 夏季日系留学生大会に参加して

原本　功…13

平良賢次…15

藤井恒正…17

福永正彦…19

中間研修報告 ― 一ヶ年を振り返って

群馬県に養蚕を学んで……中村　弘…21

養鶏研修……渡辺一寛…23

果樹研修……宮崎信輔…25

農協事務所の片隅から……原本　功…28

中間研修報告……渡辺保夫…30

農協研修にあたり……藤井恒正…33

研修レポート ― 研修機関での研修旅行

農業・家畜試験場を訪ねて……高谷和夫…35

農協視察で学んだこと……渡辺保夫…37

各地で学び得た研修旅行……堤田元克…39

第15回全国農村青少年技術交換大会に参加して

中村　弘…41

出田洋次…42

植松吉巻…43

渡辺保夫…44

堤田元克…46

幸地哲雄…48

最終研修報告 ― 日本での技術研修を終えて

すばらしかった一年半 …… 岡崎ソニアマリア… 49
ビニヤール移住地のリンゴ栽培のために…… 深沢裕夫… 51
農産加工の研修 …… 西山立美… 55
養蚕技術研修で学んだこと …… 中村弘… 57
多く学び得た研修体験 …… 渡辺一寛… 60
私の研修をささえたもの …… 出田洋次… 64
日本での技術研修を終えて…… 高谷和夫… 66
自動車整備の研修を終えて…… 細越卓美… 69
日本での研修で感じたこと …… 竹並明弘… 71
一ヶ年半の研修を終えて …… 神田晃… 73
研修中に得たもの …… 宮崎信輔… 75
国柄によるブドウ栽培 …… 米慎也… 79
農林省果樹試験場興津市場での研修を終えて…… 植松吉巻… 81
農協研修に学ぶ …… 原本功… 84
技術研修を終えて …… 渡辺保夫… 86
一ヶ年半を振返って …… 堤田元克… 88
日本での技術研修を終えて …… 幸地哲雄… 92
研修成果を活かし相互親善に貢献 …… 藤井恒正… 94
日本での技術研修を終えて …… 平良賢次… 97
日本での技術研修を終えて…… 福永正彦…101

先輩からの便り ― 帰国後の実践活動

帰国後の私 ……(第一回生)脇山昭治…103
帰国後の私 ……(第二回生)藤川求…105
日本での想い出を胸にいだきながら…(第三回生)千葉京子…107

子弟研修一覧表、移住者子弟技術研修生の会則

第1回生(昭和46年度)子弟研修生一覧表……109
第2回生(昭和47年度) 〃 〃 ……110
第3回生(昭和48年度) 〃 〃 ……111
第4回生(昭和49年度) 〃 〃 ……112
移住者子弟技術研修生の会々則 ……113
編修後記 ……116

第4回移住者子弟技術研修生

1975年10月1日見学研修
（キリンビール・横浜工場）

植松吉巻　藤井恒正　竹並明弘　渡辺保夫　西山立美　中村弘　宮崎信輔　深沢裕夫　出田洋次　高谷和夫　渡辺一寛　細越卓美　岡崎ソニアマリア　神田晃

平良賢次　福永正彦　（神田康子）　堤田元克　原本功　幸地哲雄　米慎也

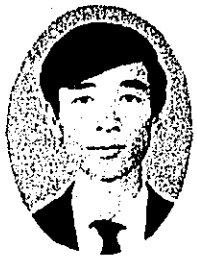
来　　日——日本の印象

(FLIGHT SCHEDULE)

Porto Alegre Asuncion	São Paul	Dep.: April 01,1974. 19:30	RG830
Recife	Rio de Janeiro	Dep.: April 01,1974. 21:00	
Buenos Aires Santa Cruz	Lima	Dep.: April 02,1974. 01:00	
Belém Santo Domingo	Los Angeles	Dep.: April 02,1974. 09:30	
	Tokyo	Arr.: April 03,1974. 15:00	

「高度成長，日本の姿をみて」

ブラジル国・パラナ州　日光移住地
中村　　弘



日本に来て一ケ月余り、着いた当時はいろいろと戸惑うことも多かったが、生活面でも馴れ精神的にも落ち着いてきた現在物事を見るゆとりが出てきたような気がする。

ピンク色の花をいっぱいつけた桜、大地にしっかりと根を下した松、昔から残る神社、そして古めかしい農家を見た時「日本へ来たんだ」と実感が湧いてきた。

文化の発達は自分が想像していたよりも遙かに進んでおり、物質の豊かさは素晴しい文化生活、特に交通機関が進歩しており、時間の正確さはのんびりしたブラジルとは好対象である。資源の少ない小さな国ながらここまで成長したのは、不屈な根性と勤勉な日本人魂があってのことと嬉しく思う。

しかし高度な工業発達の反面、失なわれたものも大きいようだ。

先日連休を利用して関西の伯父の家へ行ってきた。幼少の頃遊んだ川が忘れられなくて１６年ぶりに見に行ったが汚いのに驚いた。川底の石や泳いでいる魚が見えたその川が、水が減りゴミだらけで嫌な臭いが立ちこめ、昔の面影はどこえやら…。何んだか夢が一つ壊れたようで淋しく感じる。

ブラジルでも最近は異常な値上りを見せています。資材、地価、人件費等は驚くばかりで、我々農業者にしても、如何にして生産費を下げ、省略化を図り、また生産量を伸ばすかが大きな問題となっております。

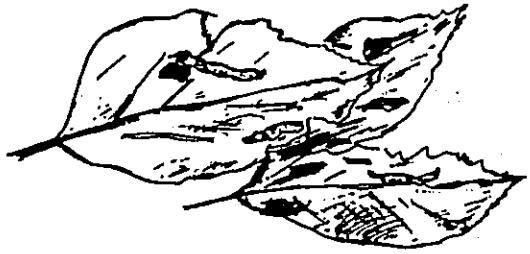
今までの略奪農業の時代は過ぎ、これからは小面積で多くの収穫量をあげる世の中になり、それには秀れた農業技術、農業の機械化、品種の改良と思い、大きく発展した日本の農業技術を学び少しでもブラジルの養蚕業の発展に役立てばと、今回の研修に参加させて頂きました。

私が配属された群馬県立農業大学蚕業試験場は日本でも優秀な設備を持ち、原蚕飼育法、蚕の病害と防除、土壌の検査、桑園の管理と栽桑法、桑の接木法、桑の病害虫の防除、凍霜害防除と処理、人工飼料等蚕業界進展のため日夜先生方が研究を重ねておられ、そこに入所できたことを嬉しく思っています。狭い土地を合理的に生かし無駄なく利用しているのには感心しました。

気候条件の全く違うブラジルで日本式農業がそのまま通用するとは思いませんが学ぶべきことが多く、その技術を基礎に生かし伸ばしていくのが我々研修生の義務だと考えます。与えられた１年６カ月を有意義に過し、視野を拡め、恥ずかしくな

いよう一生懸命勉強したいと思います。

海外農業発展のため日夜努力されている関係者の皆様に深く感謝し、この制度が何時までも続くことを希望します。



「百聞は一見にしかず」

ブラジル国・サンパウロ州　グァタパラ移住地
渡　辺　一　寛

１９７４年４月３日母国日本の地に足を降しましたのは私が移住して丁度１０年目でありました。しかしその時は「今自分が日本にいるのだ」という実感というものがありませんでした。

我々が移住していった時は、皆一ケ月以上の船旅でありましたが、今度日本に帰ってきたのは飛行機で３５時間の旅でした。こういったことが大分影響しているのではないでしょうか。

羽田から移住センターまでバスで行きましたが、車中より外を見て家が密集し、所狭しと建ち並んでいるのには驚きました。これは私がブラジルに移住して行く当時も変らずそうだったのかもしれませんが、何分にも都会の生活には縁がなかったので非常に驚きました。

翌日から４日間の合同研修の期間に日本の事情等の話しを聞き、また東京都内の見学をさせて頂きましたが人間の多いのと自動車の多いのには驚かされました。

特にラッシュ時間の電車の混み合いなどには目を見はらされました。見るもの聞くこと等がまだめずらしいという感じがとれぬうちに４日間の合同研修が終り、各々の研修目的地に散って行きました。

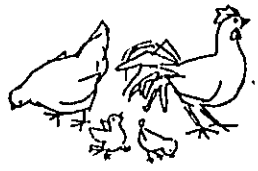
私が今お世話になっている茨城県の養鶏試験場では、場長さんはじめ各技師さん、現場で働いておられる方々等非常に好意的に向い入れてくれております。ブラジルを出発する前に「今の日本の人は非常に第三者に対しては冷たいですよ。」と言われたので、私はその様なものであると思っておりました。しかし「聞くと見るとは大違い」という言葉の如く、全然違っているというのが現状です。

私が滞日して５０日の間に感じたことは、物価が非常に高いということと反比例して農作物の値段が安いということです。この問題はブラジルでも日本でも変らないことだなぁと感じました。それとお金の価値が下った様にも感じます。

今の養鶏界を見て思ったことは、９０％以上を輸入によってまかなっておる飼料原料の不足による高騰、それに反して卵価の低迷といった様な状態のもとで、このままでは今後日本の養鶏家が無に近いものになるのではなかろうかと感じております。

こういった不安定な時期に丁度私が訪日し勉強をしておりますが、これをどう切り抜けるかというような点も、私が今後営農もしくは経営していく上に見逃せない非常に大事なことだと思っております。

なお、現在は講義を受け実習をしているといった毎日ですが、試験場では充分なる基礎知識を学び、且つまた応用出来得るものは自分の身につけて完全なるものにし、帰日後我が経営に役立たせ、一日も早く研修の効果を出してみたいと考えております。



「アマゾンと日本」

ブラジル国・パラ州　モンテアレグレ
高　谷　和　夫

私は移住者子弟技術研修生として海外移住事業団ベレン支部より推せんされ日本に来ました。

４月３日私達研修生２０名は引率の事業団職員の方と共に東京・羽田空港に到着し、２時間後に横浜・海外移住センターへと向いました。その時は冬の名残りがあって４℃という寒さでした。アマゾンから来た私には、この凍りつくような寒さに、これから始まる日本での研修に生活が出来るだろうかと不安を感じました。

１９年振りに踏んだ祖国の土ですが、余りにも小さい時に日本を離れたせいか、祖国に来ているという実感がなく外国に来ているような感じでした。

移住センターではこれから始まる研修に必要な指導を受け、海外移住事業団本部を始めに各関係機関に挨拶に行きました。多くの方々の激励の言葉にこれから始まる研修生活に対し身の引き締まる思いがしました。

一生見ることの出来ないと思っていた日本、そして首都東京の見学までさせて頂き感謝しました。

隙間なく建ち並ぶ近代的な建物、行き通う大勢の人々、車の列、世界一と云われるだけに見事な大都市。アマゾンの奥地から出て来た私はこの文明の発展に驚くばかりでした。

移住センターでの合同研修は貴重なもので一生忘れることのできない思い出です。

４月８日午後研修先の福岡に向って研修同期生７名と引率の事業団高内職員と共に出発しましたが国鉄ストのために予定より５～６時間遅れて博多駅に着きました。ブラジルでは交通機関はまともに動くことはありませんが、まさか日本でこういうめに合うとは想像していませんでした。駅には事業団福岡支部の方々が迎えに来てくれており、あいにくの天気のなか事務所に行き打ち合せをしました。

各関係機関へ挨拶回りした後、研修生は各々の目的地に出発しました。今までは一緒でしたが、これから離れ離れになるのかと感慨深かった。

私がこれから１ケ年余りを過ごす。福岡県種畜場には高内、木村職員に連れて行って頂いた。場内の方々に挨拶を済ました後、寮に落ち着きました。

寮には農高卒研修生が先に３人入っておりました。３人共まだ２０才前ですが、環境の違う私ともうまく合せてくれます。寮の賄い彼のおばさんも大変良い方で安心して生活できます。また種畜場の先生も良い方々ばかりです。

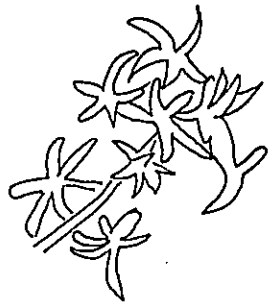
この間休みを利用して生れ故郷長崎へ親戚を訪ねてきました。伯父、伯母に再会した時には何とも云えない心持ちになり、やっと祖国に来た実感を味わいました。公害日本と云われるだけあって、記憶に残る浦上川も今ではドブ川と成り果しており、公害の恐ろしさをヒシヒシと感じました。

現在の研修は肉用牛の飼育管理法、人工授精等の技術実習を続けています。この他飼料作物、酪農経営、搾乳技術等の勉強もしようと意欲を燃しています。

日本で肥育されている肉用牛は生れて２ヶ月で肥育が開始され、１８ヶ月間で体重が５５０から６００Kgにもなり、しかも美味しい肉質です。

人工授精用の精液は一回の採取で８０頭から１００頭分に種付が出来る方法や品種改良等も経済的に出来るようです。

ブラジル、アマゾンではこのような集約的な技術は導入されておらず、きわめて原始的方法で行なわれています。ですから牛の増体力も低く６０ヶ月間でやっと５００～６００Kgになる状態ですので、この日本の進んだ技術を十分修得して帰る決意であります。



「目を見張る大都会」

アルゼンチン国・メンドサ州　アンデス移住地
米　　慎　也

アルゼンチン出発4月1日、ボーイング707に乗って日本に向って飛び立ちました。初めて飛行機に乗ったので少し恐かったが無事日本に着きました。羽田には事業団の職員が迎えに来ており、そこからバスに乗って横浜まで行きました。
横浜には僕の叔父さんと叔母さんで来ており、大変嬉しかった。

はとバスで東京都内を見物した時に一番印象を受けたのは、自動車が沢山でまた皆新しい車なこと、道を走っているのを見ると、運転がアルゼンチンに比べてすごくていねいなこと、又仕事が終った時の大勢の足早やな人達です。それからお婆さん達が靴磨きをしているのを見て、こんなにまでしなければ暮らしていけないのかとも思いました。

東京タワーに登ることは夢にも思っていなかったので、エレベーターで上る時、胸がどきどきしました。しかし何と云っても一番楽しかったことは5日間研修生皆でいたことです。いろいろな話しをしたり、とても楽しくアルゼンチンのことを忘れてしまいました。丁度ストの時山梨県に来たので汽車がのろくくたびれました。汽車でトンネルを通るのは15年振りでした。

山梨は東京から比べるととても良い所です。静かで、空気がきれいで、囲りは緑の山に囲まれています。ここのブドウ栽培はアルゼンチンに比べて大変違うので、一から勉強を始めなければなりません。

ハウス栽培にはびっくりしました。こんなのがあるとは知りませんでした。それと山の傾斜にブドウを作っているのを見ると、土地を大切に使っていることは素晴しいと思いました。

日本は道が狭いので気を付けて歩かなければ自動車にひかれそうな感じがします。それと畳の上に座ることがとてもくたびれます。

現在果樹試験場にお世話になっておりますが、職員、他の研修生皆が面倒を見てくれますので、おかげさまで非常にたすかります。試験場から山の方を見るとブドウ園が沢山並んでいます。また南の方を見ると富士山が大きく見え、まるで夢を見ているようです。

山梨に来てからもう少しで2ヶ月になりますが、この2ヶ月間でいろいろなことを覚えました。来た時にはまだブドウの木は芽をふいていませんでしたが、今は芽がふき、蔓が伸び、花も咲き始めました。この期間にはブドウのゆういん、ジベレ

リン処理、房の作り方といろいろな技術を覚えました。この近くの醸造用のブドウを見ましたがやはりアルゼンチンとは違います。ここの作り方は食用ブドウと同じです。これからも試験場でブドウ栽培技術をしっかり勉強し、アンデス移住地のために働きたいと思っております。

「桜に富士と武士道と」—日本の印象と研修にのぞむ私の決意—

パラグアイ国・アマンバイ県 ペドロ・ファン・カバリエロ

原本　　功

私の東京における（海外移住センターで過ごした4日間を含めた）日本の印象は、春に日本を訪れる外国人と同じではなかろうか。

桜が美しく咲いていたのと飛行機から垣間見た富士山とで、ああ……日本へ帰って(?)来たのだなと思ったことである。

ビルディングの林立した都会、人の多いことも、又新幹線にも特別驚きはしなかった。余りにも日本の国の素晴しさを本や新聞、ラジオ等で知り過ぎていた不幸かも知れない。4月8日には国鉄ストがあるということなども、パラグアイを出発する時に知っていたし……。

が、そうした中で、あれっ！　？ふうん？！と思うことがあった。

道行く人々の顔が皆んな同じように見えたこと、特に女の人が……、化粧をしていたためだろうか。（移住地では化粧をした顔を見なれないせいか。）

そして又、道行く人のせかせか歩いていることにも。

生まれ故郷の大方町の農協で研修が出来ることになり、大方の田舎へ帰り、元自分が住んでいた所まで行き、すぐ近くの海を見た時浜にかけおりて、海水に手をふれ初めて何だか目頭がジィーンと熱くなるのをおぼえ、ああ……本当に日本へ帰って来たんだな、と思った次第である。

又隣り近所の人達に挨拶に行くとお婆さん達が涙を流して懐しがってくれた。（あるお婆さんは「まあ功かよ、婆やんはネェー、今はもう目が見えんなったが、われらが行った時のことはよう覚えちょる。」と手さぐりで私の体に触れて、「大きくなったねェ」と、見えぬ目に涙を浮べてくれた時も。）

この私の住んでいた所の道などまできれいに舗装され、家々は新しくなり、どこにもテレビや自動車があり、新ためて日本という国に驚いた様な始末。その反面、こんな狭いところなのに知らない人だとぜんぜん挨拶もしないで行く人々。昔も（16年前）こんなだったかなと考える。

もう二つあった、少し驚いたことが……。

高知の県庁も大方の町役場も半分以上地方弁であったこと。勿論農協も同じであるが、これは農業者である組合員と密接につながっているからいたしかたない。

県庁も役場も農協と同じ様に気軽に人々が来られる様、配慮してのことかも知れない。

二つ目、日本に居る多くの人々は外国を、特に南米を知らない様に思う。知っていても３０年も４０年も前のブラジル移民のことの様である。ましてやパラグアイなんてとんでもない未開地だと思っている。だから研修期間中に出来るだけ正確にパラグアイの現状を多くの人に解ってもらう様努める。

武士道（サムライ）、私の決意。

戦場に出て勝ち抜くために、生きるために、日夜鍛練を怠たらなかった武士の様に。「武士は食わねど高楊枝」何時も選ばれたという誇りを持ち、命をかけても使命は全うする、そんな心意気。

やがてはパラグアイの戦場で勝ち抜くため、何か一つをやりとげ、我が城、城下の人達のために頑張っていきたい。

「狭い国土の中での日本人」

ボリビア国・サンタクルス州　サンファン移住地
藤　井　恒　正

十年一昔と云われますが私が家族共々南米に移住したのが、１１年前の１９６３年で当時１５才でした。

この度、幸に研修生として農協経理関係等の研修のため１１年振りに母国日本の地を踏むことができたわけですが、何ともいえない感無量の気持で一杯でした。

戦後、短期間で飛躍的な経済成長を遂げ世界の注目の的である日本は、内面的にはまだまだいろいろな問題を抱えていることでしょうが、私が受けた日本の印象は、第一に、日本人、人に対してでした。それは客観的にみて非常に個性美の強い知的な風貌で何となく人間的に冷たく、気早で、機械的だという感じを強く受けました。第二に、１１年振りに地にする日本が、人、車、建物とひしめき合い、道路幅が狭く渋滞状態という関係か非常に狭く窮屈で見苦しいといった感じが、大陸の広大さに比べて印象的だったこと。

第三に、都市の近代化につれ、農村にも近代化の波がおしよせていますが、古風な伝統的な日本美や素朴さというのはまだ農村にみられ、空気も新鮮だし静穏で心安らぐといった感じが、窮屈でゴミゴミした人為的な都市と対比して、非常に印象的でした。

また、田園的でのんびりムードのボリビアは、人口僅か５００万足らず、日本の四倍の国土と豊富な地下資源を有しながらも、あらゆる分野をみても比較にならない後進国で、黄金のイスに座った乞食だと云われています。最近では国際商品である綿花や大豆の栽培の開発で、農業面では少し希望の光が差し始めています。その点日本は、資源不足のハンディキャップを乗り越え、今日の日本を築き上げたことは、ただ「スゴイ」の一言に尽きます。これは日本人の勤勉と努力の賜物であり、万人が認めていることであります。

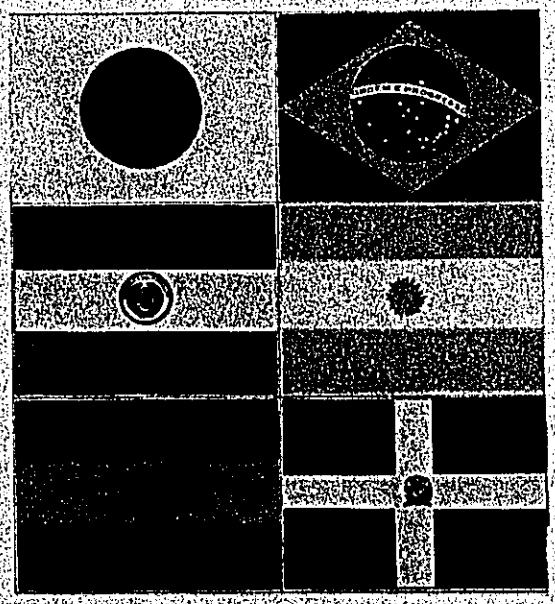
私の研修課題は農協経理を中心に経営面や農協の在り方を学んでいくことです。通算して９ヶ年勤めた農協生活の中で、自分なりに協同組合というものについて少しなりとも理解していたつもりでしたが、それを理論づけることは不可能でした。それは協同組合の起りや協同組合の原則というものを全く知らなかったためでしょう。またそれを知らずして協同組合人と言えないことをよく知らされました。

こと農協講習所において農協関係全般の学問的基礎を学び、日本の農協組合の利

点や問題点を探究し、また世界の協同組合を勉強することによって、深く協同組合を理解できると思いますし、それと共に経済・経営面も平行して学んでいきます。

その学習の結果を応用する意味と、日本の農協の実態を身をもって体験することによって、農協の在り方・経営・経理面・その他を、1ケ年半の短期間ではありますが、できるだけ熟知し、その成果を帰国後、サンファン農協組合の改革・改善に役立たせるよう努め、学習した知識を後輩や組合員或いは役職員と共に再勉強して、協同組合員という誇りと認識をしっかり理解し、組合員の生活や経済の向上、また農協組合の発展に少しでも貢献し得ることを思い望んでおります。

合同研修　夏季日系留学生大会に参加して



「日系留学生交歓のひととき」

パラグアイ国・アマンバイ県　ペドロファンカバリエロ
原　本　　功

留学生大会とはどんなものだろうかと、かすかな不安と期待が交錯しながらの参加でしたが、その中味は意外であった。

７月２４日午後、日系人協会理事長岩動氏の挨拶で始まった。参加者は総勢、７０名位。次に文部省教科調査官榊原氏の日本の地理と歴史の講義があった。日本は何につけても和洋折衷だといわれたが、これはその通りだと思った。物はおろか人間までがそんな感じである。

また、富士の見方について－これは見る方向により随分印象が違ってくるとのこと、私の富士山は絵葉書などに出てくる表富士というのか、あれ一つである。

最後に映画、日本の四季などを見せてもらって２４日が終った。

その夜の泊りは横浜の海外移住センターであった。ここは我々研修生のホームグランドの様なものである。だから何となく留学生大会という気がしなかった。

また我ら研修生以外の参加者は、私から見ると、余りにも外国人(?)であってとけこめなかった。

２５日、センターからバス２台でＮＥＣ・日本電気横浜工場を見学。まずスライドで工場概要の説明を受け、映画「つながりを求めて」を見てから工場内を見学した。さすがに広くてきれいで工場というような気がしなかった。ここの食堂を借りて弁当を食べたが、その時留学生の中にお茶を入れてくれる女の子がいたので、すくなからずホッとした。

午後は鎌倉へ、僅か１５分で大仏、その胎内などを見た。ここの大仏はさすがに有名らしく外人も数人いた。その昔、何の力に動かされこの大きな仏像ができたか。またこの伏し目の大仏はその期待に答えたか。などとガイドの名調子の合い間合い間に考えていると、バスは由比ゲ浜、七里ゲ浜、江ノ島を通って（このあたりから雨に）箱根に到着した。雨にもかかわらず関所跡へ降りてみた。「通行手形を見せい！」といわれた所をこの目で確かめるために。

その夜、河口湖畔の山岸旅館で第１５回海外日系人大会記念メダルをもらった。グッドデザインのメダルだ……。

２６日朝、河口湖を数人でモーターボートで一周。この湖からの富士はどうもイメージにあわない。運転手の話しによると湖に映る富士もまたきれいだそうである。

今度は本物の富士山へ、五合目まで登ったんだそうであるが道は良いし、おまけにバスだったので全然登っただなんて感じはない。やはり歩かなければ……。

メダルとか絵葉書等を買ってわずかに富士の気分を……。
帰途読売ランドに－多摩丘陵の大自然を生かした総合レジャーランド－この宣伝文句の一角を見せてもらった。まず水中ショー（竜宮城）から。これは水深6mの所でのショーだった。

それから日本一と云われる時代劇のオープンセット、生田スタジオを見学。昔こうであったろう気分、江戸の街を味わうために、人より遅れて一人ゆっくり歩いてみた。

次に水族館。ここでは生きた化石シーラカンスやアマゾンのマナティー、他の熱帯魚を見て、ちょっぴり第2の故郷を思い出した。

こうして2日半の余りおもしろくもなく、格別楽しくもなかった大会が終った。

この大会(?)で自分は日本人なんだなと痛切に感じた。

おもしろい、楽しい集いにこしたことはないが、こうした催しでいろいろなものを見て、「見た」という足跡を日本中に残していきたい私である。

「日系留学生中央研修会に参加して」

ボリビア国・サンタクルス州 オキナワ移住地

平 良 賢 次

折好く研修先の夏季実習中に４９年度、夏季日系留学生中央研修会の開催通知を受け、上京したのが７月２１日の午後である。

久し振りに訪ねる横浜・海外移住センター内では、再会を喜こびあう留学生達のなごやかな交歓ムードが漂っていた。

ポルトゲス、エスパニョル、日本語等の話し声が交りあって聞えるロビー内は、意外と女性が目立ち、先着の同期生達もその場に加わり、楽しそうに語り合っていた。

各々の体験談や失敗談を語り合うその表情たっぷりな仕草は日本人ばなれしている。日本人の顔立ちだが話す言葉は異なるその様子は、一見変った人達の集りだと周囲の人達にみられてもいたしかたないものである。ほとんどが父母の国について間もない南米生れの南米育ちの者ばかりだ。各種の留学制度の恩恵を受けて来日している日系人留学生の人数がいかに多いかを、今度の研修会を通じて知り得ることとができた。留学制度は多種多様であるが、特に南米在住日系人の子弟を招き、各々の専門の分野において研修させる制度は、他に類のないものと思う。

研修会の初日を迎えることになったが、相変らず東京の空はスモッグで曇っていた。公害問題の絶えない日本、その高度成長に伴なう速度で公害も進んでいるといわれる。毎日社会問題として取り上げられる公害問題は実感として受けとめにくいが、スモッグにおおわれた東京の空を見ていると、いかに工場や交通機関がはき出す悪ガスが公害の一つである大気汚染しているかがわかる。

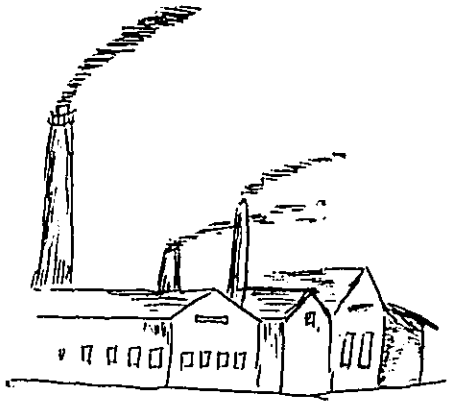
研修日程には工場視察や観光地巡りも組み入れられており、思い出に残る数日を過ごすことができた。

ＮＥＣの工場設備視察は説明や工場内見学で、その規模の大きさ、日本の電子工学の水準の高さをはかりえることができた。

鎌倉の史跡廻りも印象に残る一つである。再び鎌倉を訪れる機会があったら、ゆっくりと国宝・重要文化財が数多く存在する市内の史跡廻りをしたいと思う。

自然に保護された地域と自然が保護された地域があるとすれば、富士山付近は自然に保護された地域だと思う。その観光コースの風景は自然美にあふれ、印象に残る絶景であった。「自然を保護しましょう」と書かれた標識をかなり見受けたが、保護されるのは人間ではないだろうか。

いろいろな思い出を残して解散の日を迎えることになったが、今度の研修会は、視察旅行などを通じて、お互いの融和をはかり、今後のつながりを深めることに役立つ、意義ある研修会であった。



「夏季日系留学生大会に参加して」

ボリビア国・サンタクルス州　サンファン移住地
藤　井　恒　正

合同研修会が東京において開催されることになり、７月２１日午後、特急「みずほ」にて博多を出発した。この「みずほ」は我々が４月に来日して研修先の福岡に向う際に乗った汽車で、なんとなく「なつかしい」という感じがしないでもなかった。また、方々の研修先に散っていった研修生達に会えるという、「楽しさ」というか、「なつかしい」というのか、何となく浮々した気持で東京に向け出発したのだった。

翌朝、根岸の移住センターに着いたが、ここも「なつかしい」という気がしてならなかった。方々に散っていった研修生達が集り、にぎやかになり、研修先の話しに花盛りだった。我輩も多いに語った。

私は農業に対する知識が全くないといってもよいのだが、農林省の平塚園芸試験場を見学に行き、果物類の品種改良等の話しを聞き、いかに消費者の味覚にあった品種を作り出し、生産者・消費者の期待に答えようと、各国から各種の果物を取り寄せ、研究しているのには感心しました。

さて、中央研修会の第一日目であるが、南米各国からの留学生・研修生達が集まり、日本の地理・歴史、日本の文化と社会の説明を聞き、その後出席者達から日本についての感想等を聞いていたが、特に日本の学生達に対する批判めいたことが多かった。

それを総括すると、日本の学生達は心の視野が狭いということだった。小生も同感！、日本の若い人達は親の過保護で育てられているせいか、なんとなく無責任で、苦労知らずの意志薄弱な若者が多いようである。

次は工場見学で日本電気会社の横浜工場を見学したが、ここでは日本電気の概要説明聴取と場内視察をしましたが、非常なる感銘を受けました。世界に誇るＮＥＣとして、その技術は世界が認めているし、世界各国から受注があり、その生産に追われている状態であった。また技術の開発にも余念がなく、未来に向って前進し、社会の発展に応えようと努力しているとのことだった。

その後、名所・旧跡廻りの観光コース、昔の歴史や美しい地形を見ることができ、日本の広い意味での社会勉強ができたことは意義深いものだった。

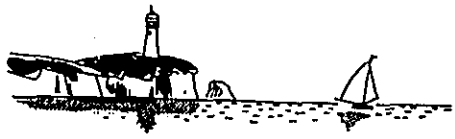
鎌倉をはじめ美しい海岸線を通り、関所のあった険しい山の箱根をぬけると、これまた美しい風景が目に入ってくる芦の湖畔、また宿泊した河口湖畔の美景には目を見張るほどでした。また日本の山の象徴である富士山には、これまたその美しさ

にただぼう然と見ているのみだった。

都市のゴミゴミしたところを離れ、公害のない美しい風景の見えるところでの憩いは、たとえようのない最高の気分だった。

狭い日本では地域開発がどんどん進んでいるが、こういう名所・旧跡をいつまでも保存し、管理していくことを切望する。

またこのような会により、留学生と研修生は日本の若い青年達と親睦を深め、もっともっと日本を理解したいと思っています。



「研修旅行メモ」

ドミニカ国・ラベーガ州　ハウバコア
福　永　正　彦

7月21日に博多駅を出発し、翌日神奈川県平塚の果樹試験場を見学に行きました。

この試験場ではモモ・ナシ・ブドウなどの栽培を主におこなっており、果樹の先生より剪定や摘果についての話を聞き、いろいろと勉強になりました。それから同じ県下にある浜田バラ園に見学に行きました。バラはハウスで栽培されており、ハウスの沢山のバラは主に東京へと出荷しているそうです。浜田さんは過去アメリカまでバラ園の視察に分かれ、栽培方法・販売ルートの研究をされて帰られたそうです。

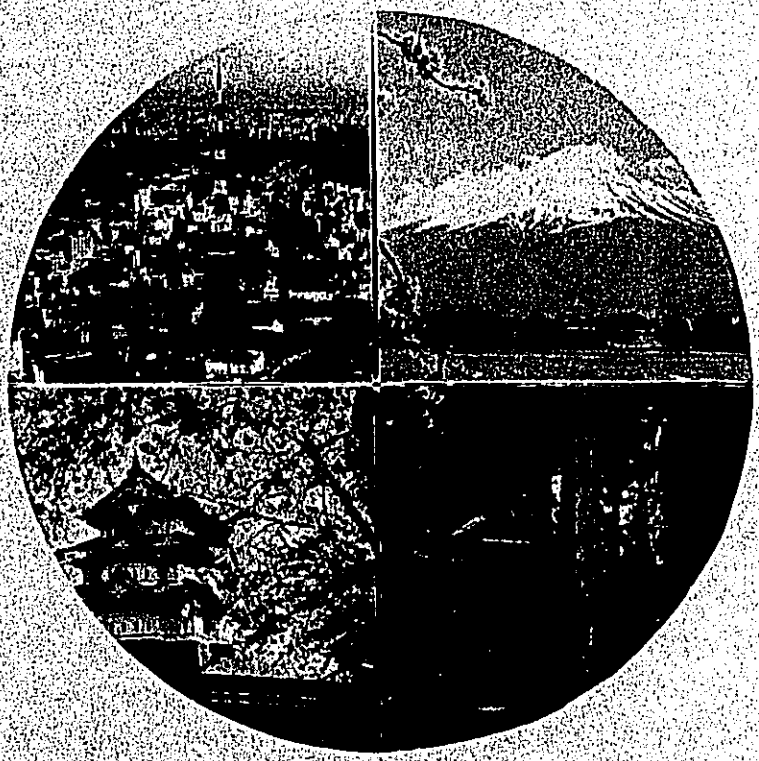
23日は留学生の人達と一緒に、砂防会館で日本の事情についての話しを聞き現在の日本についての知識を得ました。またブラジルの留学生よりいろいろとブラジルの事を聞いたり、僕もドミニカのことを話したりして、有意義な一日を過ごしました。沢山の友達もでき大変楽しかった。

24日にはNECを訪れ、いろいろな電気製品を見ました。いろいろ沢山の製品を見て僕はびっくりしました。コンピューターが沢山あり、人間はまるでコンピューターに使われているような気がしました。NECでは人工ロケットを空中に打ち上げ、世界のニュース放送に貢献しているとのことです。

午後から鎌倉を訪れ、その後一路山梨県の河口湖へと向った。途中バスの中ではバスガールをはじめ留学生も歌を歌ったりして大変にぎやかで楽しい一時を過ごしました。

翌日富士山を見学した後帰途につきました。途中読売ランドによって水中バレエを、また生田スタジオを見学し、大変楽しかった大会を終えました。

中間研修報告　一ヶ年を振り返って



「群馬県に養蚕を学んで」

ブラジル国・サンパウロ　日光移住地
中　村　　弘

桜、私はこの花が好きであり又、懐しい想い出がある。今こうして満開の花を見ていると、１７年前の事が想い出される。

当時小学校４年生であった私は、両親よりブラジルへ渡ると聞かされたが、それが何を意味するのかもわからず、大きな船に乗れると喜んでいたのを覚えている。４月上旬で今はないという神戸の海外移住斡旋所の庭の桜が満開で美しかったことが、不思議と鮮明に頭に残っていた。

２度と日本で桜が見られるとは思ってもみなかった昨年の４月３日、幸運にも研修生として、日本の土を踏み丁度満開であった桜を見た感激は忘れられない。

研修目的である養蚕技術を日本で最高の設備と技術を誇る群馬県立蚕業試験場で学べたことも恵まれていました。

ブラジルも近年、資材・人件費が年々高騰し、今までの農業経営では難しくなって来ており、これからの農業は機械化に依る規模拡大と省力化、それにともなう技術面での増産又、如何にして土地を有効に利用し、反当りの収量を増すかが問題になっています。蚕を知らず蚕を飼っていた私にとって、春蚕期より晩秋蚕期まで、掃立前の消毒と準備、産卵から孵化までの生理と生成状態、数多い蚕病とその診断法と対策、稚蚕期と壮蚕期の飼育湿温度、又、桑の生理と桑園の管理、害虫の防除法と薬剤等、基本から詳しく指導して頂き、全蚕期を通じて得た知識と技術は貴重なものでした。

冬期間中は、育蚕・蚕種・蚕体病理・栽桑・桑樹病理・土壌・肥料等の講義があり、日本とブラジルの気候条件が異っていても、根本的には変らず、応用出来る面も多くあり、良い勉強になりました。

日本の稚蚕共同飼育所の設備は近代的で能率も良し素晴しいものですが、五令盛食期に労動力が集中する採桑の問題、特にブラジルの場合、日中は暑く桑を刈っても葉が萎れる為、涼しい朝夕に限られ、短時間で採桑せねばならず、忙しさは大変でそれを解消する桑刈機が日本で開発されているのではないかと、期待していましたが、現在では試験段階で実用的にはまだ時間が要する様で少し残念に思いました。

ブラジルの広い農業のみ知らない私にとって日本の農地面積の狭いのに驚き、そこへもって農村の都市化が進み、狭い農地がますます狭くなって行くような感じがした。又、土地の価格が高く、農業の規模拡大は難しく農業に対する意欲も夢も少なく、後継者が減るのも無理はないように思う。それに農業の人手不足を補う農機

具を購入し、機械化を図っても面積が狭い為、機械能力を充分発揮出来ないまま倉庫に入れてあるのを見る度惜しいと思う。

最近群馬県でも農地の構造改善が進み、農地の一筆が広く区分けされているのを見ますが、もっと早くからやるべきではなかったでしょうか。現在試験場に来ている学生は農家の長男ですが卒業後農業を志ざす青年は少く、ほとんどが勤めに出るという事。この状態で行けば１０年・１５年後の日本農業はどうなるのかと心配になりました。

それに比べてブラジル農業は如何に恵まれて、将来性があり、夢がある事を改めて知りました。

実習を通して一年を振り返って見ますと、蚕の幼蚕期の設備は素晴しく、温湿度も自動調整になって合理化されていますが、壮蚕期の自動飼育機は桑を細かく切って給桑する為、桑の葉が立体的に減らず重なり、蚕の食下が悪くなり繭質に影響するようであり、又、価格的にも問題があるようです。

ブラジルの桑園も品種や仕立方等、改良する必要がある事が分りこれが実現すれば大きく増収が望めそうです。

試験場の冬休みを利用し、農業を離れて東京でアルバイトをし朝夕のラッシュで身動き出来ないような満員電車で通勤し、日本のサラリーマンの生活の一面を見たのも貴重な体験でした。

今年も桜の季節となり一年が過ぎた今、残る研修期間、最後の締めくくりとして一層努力したいと思います。

「養鶏研修」

ブラジル国・サンパウロ州　グァタパラ移住地
渡辺一寛

昭和49年4月に茨城県養鶏試験場に入所以来、光陰矢のごとく1年が過ぎ去り、その間に研修した事をまとめてみます。

初めの内は当場に慣れる意味で各部を回り実習を致しました。初めが管理指導部で主に成鶏の管理でしたが、給餌、除糞、集卵の繰り返しの毎日で約1ケ月を過ごし、次の1ケ月間は経営部にて、平飼い方式による育雛を体験致しました。自分では今まで立体のみでしか育雛を行なった事がなく、この時点では手間があまりかからないので大羽数育雛にはこの方式が良いのではないかと考えました。

しかし其の内に時期的にも、気候的にも平飼い飼育にはつきものの様になって来ている原虫病「コクシジウム」が出はじめて、投薬投薬の毎日になって、労力の面だけの問題では済まされない様な問題をかかえている事が解かり、1ケ月後に経営部を去る時には平飼い育雛器導入の夢も、大分薄らいでしまいました。当場の獣医さん、研究員の方々もこの問題に関しては非常に頭を痛めておられ、なんとか改善を早急にしなければならないと言っておられました。

3ケ月目には育種部に回り、立体育雛の実習をさせて頂きました。育雛器においても、我々がブラジルで現在使用している様な物ではなく、全部電気でサーモスタットを使用しているので、使用するには非常に便利でありました。

どこの部でも同じでしたが、衛生プログラム、ワクチネーションプログラム等は入雛前に良く検討をし作成してあり且つ一目見てすぐ解かる位置にはっていました。試験場なので当然であるかもしれませんが、自分の今までの経営を振り返って見て、こういう小さな且つ又、非常に大切な事がなされていなかったことで、この面に関し非常に危ない橋を気にもせずに渡って来たのだなぁと反省をし、今後はすぐ実行しなければならないことを痛感した。

この3ケ月間の現場実習外の時間は、講義と自習とに当て過ごしました。講義は一冊の本「養鶏アニュマル」を中心に1週間の内4時間が組まれ受講致しました。後半においては経営分析、簿記等の講義も少ない時間ではありましたが受けさせてもらいました。自習時間には講義の復習と予習、それに図書室内での読書にとあてました。

一通り各部を回った翌月からは自分の希望で病理研究室に入り、鶏の病気を解剖しながら学びました。はずかしながら今まで一度もメスとかハサミ．ピンセットなどは手にした事がなく、ましてや解剖などは無知の人間でした。しかし何事におい

ても同じであると思いますがやる意欲さえあれば直ぐ、マスター出来るのだとつくづく思いました。最初の内は手を取られながらやったのが、日が立つにつれて何んとか一人ででも出来る様になりました。しかしいざ解剖をしてみても、何んの原因で死んだのか、何んの為に淘汰されてきたのか解らない様な有様でした。もちろん予備知識をマスターする為に書物は読みましたが、それでも解らない事がしばしばあり、同室にはいつも獣医さんがいましたので、「聞くは一時の恥」と思い毎回聞きながら自分の身につけてきました。今ではマレック病、コクシジウム病が症状をどの様に示すのかなどと問われても迷わず答えられる様になりました。今までは病気の名前すら知らなかった様な事で質問も出来なかったと言うのが実情でありましたが、これからは人に質問されてもまよわずに正しく答えられる様に、より一層勉強をして行きたいと考えております。今ふり返ってみれば、この期間３ヶ月が自分にはいちばん勉強になったと思っております。

病理の部門を一通り学んでから、実際に一人で今まで学んだ事を元にして育雛を行なってみては、とのあたたかい心差しがあり、丁度管理指導部に６００羽程の入雛があったので、育雛プログラム．ワクチネーションプログラム作成から始めて、自分でまかされた形で育雛の体験をさせてもらいました。育雛期間中には色々と考えてもいなかった様な事にも出くわして、いかに難しい物かと痛切に考えさせられました。この様な事で必ずしも満足がいく育雛成績はおさめられませんでしたが、これも育雛の時期．初生雛の状態等色々と理論とは必ずしもマッチしないことについても自分なりに応用の頭を働かせ、これからの自分の経営上に大きなプラスになる貴重な体験であったと思っております。

又、ワクチン等は色々な物が開発されている今日の日本ですので帰伯後は、こういう物の導入についても考えて行きたいと思っております。

「果樹研修」

ブラジル国・リオ・グランデ・ドスール州
イタチ移住地　宮崎信輔

昭和49年の4月3日、羽田空港に着き横浜の移住センターで1週間の合同研修を受けて後、研修先である熊本県果樹試験場へ行きました。

ブラジルと日本の気候が変わったせいか、風邪をひき一週間遅れて入所しました。

ここの試験場は柑橘を主体に落葉果樹を少々栽培しています。柑橘栽培も幾つかの部に分れており、一年間を午前は他の生徒と一緒に講義を受ける事にして、午後は実習と決めました。

午後の実習は各部配当で最初の3ヶ月間を病虫部で研修する事になり、丁度病虫部に入った時期が5月でヤノネカイガラムシが発生する頃で、この害虫について学びました。この害虫はミカン栽培の中で被害の最も大きいカイガラムシで、年に2～3回発生し寄生虫所は主として葉の裏で雄は群集、雌は分散して寄生します。又この害虫が果実に寄生すると品質を落し、売物にならなくなってしまうのです。

防除法は12月～1月に機械油乳剤（油分3％）を散布すれば、越冬成虫の駆除に有効です。

その他の害虫にルビーロウムシ・イセリヤカイガラムシ・ミカンマルカイガラムシなど幾種のカイガラムシがいます。又、クロアブラムシはウィルス病の要因とも言われています。又、ミカンバエは年一回発生して地下部で越冬し、7月ごろから8月下旬にかけて朝、又は夕方に活動し、ミカンの袋の中や果皮と袋の間などに産卵して、卵は8月下旬から9月下旬にかえり、果肉を食べて大きくなり被害が進むにつれて、果実の表面が黄色になり落果したりします。

最もブラジルに多くいて防除法は成虫が土中から現われても、すぐ産卵しないので、その間にBHC粉剤がDDT水和剤を散布します。時期としては大体7月が適当です。病害の方は、日本で柑橘の3大病と言われているカイヨウ病・黒点病・ソウカ病があり、日本及び米国などでは特にカイヨウ病が恐れられています。温州みかんは比較的害が少ないが、現在日本で数多く栽培されている甘夏柑・ネーブル・タンゼロ類などの雑柑類によく発病するそうです。この病気は雨の多い場合に発生するもので、特に8月～9月の台風期に最も激しく、果実には7月頃から発病します。病原菌は細菌で枝や葉の病斑又は組織内で越年し、翌年の4月末から風雨によって伝染します。

黒点病は枯枝から胞子が雨水に溶け、伝播します。伝染は５～６月が最も激しく潜伏期間は３～４日から一週間位です。尚ミカンサビダニの被害果か、この黒点病と似ています。又、炭疽病もこれに似ています。薬剤防除は、ダイホルタン1,000倍液ダイセン５００倍液などを２～３回散布します。特に枯枝は伝染原になるので徹底的にとり除く事です。

その他に黒班病、虎班病など沢山あります。又害虫防除に薬剤を使用せず、天敵の活用があります。この天敵とは害虫を食べる肉食の虫で、一例をあげると、アブラムシの天敵としてテントウムシ・ルビーロームシに、ルビーアカヤドリコバナ、特にテントウ虫類が天敵として最も活用できます。

病虫部に７月まで研修して、８月は夏休みで天草のポンカン栽培者の所へ１０日間の実習に行き、とても有意義な実習でした。

９月からは常緑果樹部へ移り、芽接の勉強をしました。ブラジルでは芽接を主にやっていましたので、かなりの自信がありました。

その他に除草剤について学びました。ブラジルなど広大な土地で栽培する限り、人力で草刈をする事は手間がかかり不経済と思う。この除草剤を散布すると人手は少なく早くできるので経済的です。

除草剤にも４つの種類があり、接触剤にグラモキソン・ワイダックス乳剤等があります。その他に土壌処理剤、これは雑草の種子の発芽をおさえる型、移行型は草に散布されて体中を移動し枯死させる薬です。

それとホルモン剤、これは生理的に活性があって、草の体内の生理機能を狂わせて、枯らす薬です。それから摘果剤についてもこの部で勉強しました。

日本では温州みかんにこの摘果剤を使用しています。ネーブルなどは成らせるのに一生懸命で摘果剤どころではありません。温州みかんの場合一果当り２０～２５枚の葉が必要だそうで、これをいちいち手でやっていては計どらないし、又、玉そろいも悪くなり、隔年結果をする事になりかねません。

大面積で栽培する場合絶対に使用したいものです。薬名はナフサック粉末、トルベス・テッカス、等があります。この常緑果樹部に１１月末までいて、１２月から２月末までの３ケ月間を化学部で研修しました。この部は果実分析と肥料学、土壌学、植物生理が主となっています。

日本では現在、新聞などに有機農業とか、土つくりなどと農業欄に書かれています。現にこの化学部では各区別に試験を行っています。

無肥料区、多肥料区、標準区等があり、長期間に渡って試験をやっています。リン酸分、カリ分は適量は必要ですけど多くの施用したからと言って、それだけ効果

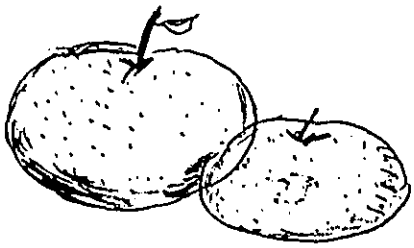
があるかと言うとそうでなく、少なくやったから品質が落ちるかと言うとそうでないそうで、施肥の場合一番大事なのはチッソ肥料の施用が大事だそうです。

熊本県下の基準チッソ肥料は１０アール当り成分量で２０Kg～３０Kgの間だそうです。ですから僕の住んでいるイタチ移住地では１０Kg～５Kgでよいのでないかと思っています。

又、この部に入ってから、始めて剪定をやり、最初はむずかしく自信がなかったけど、現在の育種部や土曜～日曜日、先生のミカン園へいって剪定実習をやったおかげで、かなりの自信がもてました。

まだ育種部にきてから１ヶ月たらずですので、あまり書く事がありませんが、４月からは高接法を学ぶことになっています。

最後に１年間を振り返って見てブラジルを出る時は柑橘を栽培しているだけで何一つ知らなかったのに、今では色々な事を知る事ができました。あと半年、今まで以上に頑張って行こうと思っています。



「農協事務所の片隅から」

パラグアイ国・アマンバイ県　ペトロ・ファン・カバリエロ
原本　功

桜の花が咲き、散った。早いものです。来日後一年過ぎた。

私は生れ故郷の町の農協に実習と決まり、複雑な心境のまま（与えられたチャンスの中で出来得るかぎり、色々な事を吸収してやろう、等々……）実習生活に入った。一般常識程度は知っていたつもりだが、農協という所はとにかく初めてなのです。

先ず専務より農業協同組合の機構及び組合法の概要を説明してもらった。次に農協管内の視察、今さら何を、と云われるかもしれないが、なんともなく見ていた。段々畠や、小さく区切った田んぼ、この辺は昔血と汗とで築いたが、少しずつ荒れたまま放置されている。それは泣いているか、怒っているのかに見えるのである。

そして配属された所はまず、組合員と一番密接につながっている、営農指導課ここで一番目についたという感じた事は、組合員が勉強していてさらに念を押しているのか、知らないのか、とにかくなんでも電話がかかってくるのである。こうなると型にはまった営業になるように思った。こういう中で私は"日本の農業者はずいぶん保護されているんだな"と、やれ休耕、やれ作れと、奨励金、作物が災害にあえばなんとか金、値段が安くなれば買いささえ保証、等々。

要求米価大会に出席ドンドン上る物価の中での米価、日本人が何百年の昔から主食としてきた米。茶わん一ぱいの米の値段が１３円、コピー一ぱい１５０円、どうなんです？この差。

これは大会の受け売りですが、本当にその通りです。安ければおろそかになる。その報いが来なければ良いがと、わからないなりに考えさせられる。

ラッキョウの荷受け、これは組合員の持ってくる１Kgづめの小袋を検査、時々計量、等級付けの仕事、この主任はかなり年配なのだが、まったく良く働く。若い私でさえどうしようかと思う事でも考える事なくドンドンやってしまう。合理的とは言いがたいが、（私達、若いものの合理性は骨をおるのをきらって働かない合理性(?)になりがち。）「ともかく手をつける」、「働く事をおしむな」、「人を使うには、まず自から」合理性とは別に大いに学ばなくてはならない。

今度は肉体労働の方から頭の方へ。ラッキョウの精算がある。それぞれの市場から送られて来た価格をもとに１日分だけのプール計算、昨年は１０日毎のプールだったのだが、収穫期間が１ヶ月と短かい上に値段が初、中、終とひどい差。たとえ

マイナス になろうとも、今売った方が得すると思ったら人を雇ってでも売る。この投機性(?)が良いらしく1日となった由、これは見方によれば生産意欲をわかせる1つの方法かも知れない。

日本では農協の上部組織が県、全国と出来ていて、たとえばラッキョウ1つ売るにしても、農協は園芸連に連絡して、その指示に従って売り先が決まる。分担、専業で能率的かも知れないが、作る者の苦労が段階を経る度に薄れるようでなんだか考えさせられる。

9月から総務に移る。伝票仕訳から始まって月々の試算表作成、アマンバイでの記帳会計のようだ。農協が大きくなるにつれ、やはり伝票会計にしなければならないだろう。１２月から決算事務の取引例題をやる。

１７年ぶりの日本の正月、昔とは比べくもないが、それでもなんとなく気分が出る。私でさえこうだから年老いた両親などさぞかしと思う。1度は味あわせてやりたいと思う。

1月決算、農協の本決算を手伝いも受けず、1通り用紙をもらって、1人でやらせてくれた。2月２５日組合総会、1,５００名の内来る人は３００名ぐらいあとは委任状で会が開ける程度。たいした質疑もなく、無事終了。意外だが軌道にのった組合だから組合員の関心が割合うすいのかも知れない。

3月より支所勤務、今まで自分で伝票切った事がなく集計ばかりだったが、今度は切る方に回った。農薬、肥料も取り扱う。

何事も研修だ。だからやる事、なす事、すべてが勉強と思って頑張っている。

「中間研修報告」

パラグアイ国・イタプア県　フラム移住地
渡　辺　保　夫

祖国、日本に帰国して早や、二度目の春を迎えました。

私は、国際協力事業団事業の移住者子弟技術研修を第4期生の一員として、パラグアイ国イタプア県フラム地区より推せんされ、去年の4月3日に父母の国、ＪＡＰＯＮに参りました。

日本の近況をラジオ、新聞、雑誌等で知り、夢、希望、期待を脳裡に抱き、ある面では不安を抱きながら、農協簿記を取得する決意をして帰国いたしました。

日本の表玄関、羽田国際空港に到着した時の第一印象は、年配の方達より話しに聞いていた以上に人の多かった事。そして自然に恵まれ、空気の澄んだ雄大な南米とは違って時間的余裕の取れないのと環境が異なるせいか速断は勿論、危険だが住みにくく眼に写りました。

羽田空港には事業団の担当者方々の出迎を受け、横浜の移住センターに午後7時頃に無事到着いたしました。

翌日より日本の経済、社会状況や、今後の研修先の説明、注意等を受けた。生活環境の変化が激しいのには少し不安を覚える。

大蔵省・外務省等関係機関へ挨拶に行く。共にハトバスに乗車して東京タワー、国立競技場、ＮＨＫ放送施設、日劇、銀座通り、等の東京見学を行ない、物価の高いのには驚くばかりだった。研修生の中には旅の疲れが出たのか、環境の変化に慣れない為か体の調子を壊した者も居たので、自分は人並以上に体が貧弱なので健康には充分に気をつけなければと思った。

なぜなら健康な体だけが自分の資本で有り、頼りにしなくてはならないからだ!!

私の研修先が広島市と聞いた一瞬には帰郷できる嬉しさがこみ上げて来た。研修機関は広島県農業協同組合中央会主催の農協研修センターで期間6ヶ月間だ。名目は中堅職員長期研修で参加人員は、県下の現役の農協職員で参加者のほとんどが大学卒業者なので、初対面の時は圧倒された。だが私自身成績順はどうであれ、やれる範囲内努力しようと決心した。

研修科目は、法学概論・経済学・経営学・流通学・農協経営学・協同組合論・農協法制・指導事業論・経営分析・税務会計・農業簿記・計算実務・コンピューター概論・協同組合論・監査論、その他多数で全科目は２８科目も有る。

講師は広島大学教授が5名、九州大学教授1名の他、農協関係機関の担当者達

で、主として基礎的な学習を目的とした講義が多かった。たとえば組合論では農業協同組合の生みの親、ドイツのロッチデールの理想とした農協経営は利益を追求せず組合員の為に硝子張りの運営が必要と強く主張した。

協同の必要と協同組合原則を中心とした運動論、法学概論では慣習法から成分法への講義から始まり、法の体系、社会法、生成の歴史的背景、経営学では経営学の研究対象が、個体経済としての経営経済、監査論では監査の意義として会計監査を通じて、経営活動そのものの批判検証をする手続、農業簿記では、簿記は事業の経済活動を簿記特有の方法で記録・計算・整理するものである。

計算実務では最近、経済界の発展は目覚しく、それに伴って企業などで扱う計算事務の内容が複雑になり、計数も非常に膨大なものとなったが従って、経済活動を合理的、能率的に営む為には正確性と迅速性が要求される等々。

6月より雨期に入って毎日の雨量には、いささかうんざりしました。夏の気候は南米の暑さとは異って蒸し暑く、蒸れそうな感じで悪条件の日また日。だが研修には真剣に励もうと、自分に言い聞かせる。他の研修生達の近況がいやに気にかかる。

研修センターでは良い友人も出来ました。昔の格言に「水は方円の器に従がい、人は善悪の友による」と有りますが私の友人関係では恵まれて居た様に思います。

インフレ、と不況の2重苦の折りに事業団から支給される手当では、とっても生活を営むには難かしく、金銭的には非常に悩みました。6ヶ月間の研修期間終了真近には毎日連続でテストの繰返しで、生まれて始めての試験地獄の味を体験し、いささかノイローゼ気味となって頭痛のする始末だった。将来この体験は何時迄も脳裡にやきついて居て忘れる事の出来ない、日本での「思い出」となるでしょう。良い経験をしました。

10月からは広島市高陽町小河原の小河原農業協同組合へ実習生として頑張ってきました。

小河原農協は養鶏事業が専業で県下の鶏卵産地として有名な農協でもあります。一戸早期共済推進額、貯金保有額では全国でもベスト5に入る程の優秀さであります。最初は若い職員の多い鶏卵消費センターで研修をしました。組合員の出荷される鶏卵を受取り、それを看貫する作業も一応は担当しました。選卵場で仕上った製品を市内のマーケットへ配達するのも手伝い、夕方には一日の入出庫量を確認する事務仕事も経験しました。何事も見聞を広める為には体験するのが第一と考え、どんな作業にも積極的に活動する様に努めました。

2ヶ月後には事務所に移り普通貯金の振替作業、諸貸付金利息の計上、養鶏農家の経営成績を把握する為、経営分析表を作成しそれを基にして年度末には各農家単

位に決算書を作成しました。

その他に小河原農協経営方針の真価を得るにも、経営等を研究する為にも全神経を集中させて職員の行動、組合長の客に対する応対の方法を観察しました。

組合長は小河原地域の組合員の為に約３０年間一生懸命に努力されてこられました。人望も厚く仕事に関しては徹底した面が有り、農協運営には誰れも負けない実力の持ち主でもあります。

農協の活動は組合員の生活安定と向上を目指して努力の継続であり、より良い成果を上げる為の展開との話でした。

私も近い将来は農協の中堅職員、経営者として進んで行く為に経営能力を少しでも取得しておきたいと思っております。経営者は組織の将来を常に考え、先見力、洞察力を身に付け経営の原則を知り、経営活動を社会に流動的に結合させるプロの経営者となる事を目標において頑張りたいと思います。

この研修機会を利用して人間としての貴重な体験を多くして見たいと思います。最後まで資格を取得する為に最善の努力をして行きます。

「農協研修にあたり」

ボリビア国・サンタクルス州　サンファン移住地
藤　井　恒　正

昭和５０年度も早いもので４月を迎え３分の１、年を過ぎ去ろうとしている。１ヶ年前の４月３日、ボリビア国から事業団費研修生として、１１年ぶりに母国日本を地にすることができ感無量の気持ちでいっぱいだった。

当時を振返ってみると、その感無量の気持も感激や不安・期待などのいろいろな感が入りまじり複雑な心境であったようにも思われる。

こうして１２年を過してみて学校の内外でいろんなことを体験し、また学んだことは、貴重なものでその価値は大きいし、それが私の進むべき人生の道しるべとなり、よりよい道標となることと信じて疑わない。ではこの１ヶ年の研修で得た感想なりをのべてみたいと思います。

私は現地で日本人が組織する農協に勤務する１職員である関係上、今回の日本研修でも農協の経理事務と経営面を研修課題としてあげ、日本農協の歴史的なものや活動振り、組合員の社会的、経済的向上や発展に対する役割その他農協に関する全般を知ることであった。

とは云うものの、私は農協に通算９ヶ年勤めておりましたけど、はずかしながら農協の元祖であるロッチデール消費協同組合の起り・役割・原則やその後の発展過程などの歴史的なものは全く知らなかったばかりか現存する、Ｉ．Ｃ．Ａ．（国際協同組合）の原則すらもしらなかった。それらを知らずして何にが協同組合運動者であろうか、又農協職員と言えようかと、その無知ぶりがはずかしくてならなかったし、勉強不足をつくづく後悔した。

それらをふまえ、この１ヶ年間福岡県農協講習所において、ロッチデール消費協同組合の歴史的なものや、協同組合に関する学問的知識を高名な大学の先生方や各専門分野の講師の方々から学び得たことは、私にとっていやサンファン農協にとっても大きな利益といえるでしょう。

１年間という短期間で数多い科目を学ぶというハードな時間割で、その１時間、１時間に非常なる重みを感じてならなかった。学ぶどれもが私にとって未知のものばかりであり、当初はその教科内容が理解できるかどうかが心配でもあった。また１１年のブランクがある私が、この急経済成長した日本社会や人間関係にうまく溶け込むことができるかが不安でもあった。

しかし、それらは全く私の杞憂にすぎず、人間その気になればできるものであるし、それも努力次第だと、つくづく思いしらされた。やればできる。できるんだという根性を強くもって積極的に前向きに進むよう努力することだ。

「努力は成功のもとなり」とは、昔の人はよくいったものである。でも人間、勉強ばかりでは身体に悪いし、そういう意味での学校での体育祭や県内外への研修旅行は、よい気分転換にもなったし見聞を広めることもでき、よい社会勉強ができた。個人的にも暇と金をみつけては旅行をし、日本社会を自分の目で見ることに努めた。又いろいろな催しにも出席し、そこで多くの人々を知り、語り合い親交を深めることができ、よい人間関係の絆が結ばれたことは心うれしいことであった。このようよい人間関係をつくることも１つの研修課題であることを認識した。

それは、学校の若き学友達も同様であった。彼等とはこの１年間学校生活を共にし同じ協同組合運動を志す者同志として切っても切れない絆で結ばれているし、その友情はなお一層強力である。

この一年間、私自身有意義に過ごせたと思っているし、学校で学んだ学問的知識とその内外で多くの人々を知り語り合い、その中から知った人間関係（１部）又そこから得たいろんな知識は大きな収穫でしょう。

今後も残された半年の研修期間を有効的に今まで学んだことを実践し活用していきたいと思っています。

日本農協の実情を知り、身をもって実務体験し組織、経営、事業、経理事務システム等や職員の在り方、組合員奉仕の実態を勉強してみたいと思っている。又、日本は情報機械が発達しているとはいえ、南米に対する認識は薄く偏見的な狭い視野で見ている面が大にしてあるように思われるので、現在の南米、世界の注目の的である南米をもっともっと理解していただく為に、なお一層多くの人達を知り語り合い南米移住へのかけ橋になりたいとも思っている。それも広い意味で研修の一貫ではないかと思っています。

研修レポート

研修機関での研修旅行

「農業・家畜試験場を訪ねて」

ブラジル国・パラ州　モンテアレグレ
高　谷　和　夫

福岡県種畜場での研修旅行に参加させて頂き、１０月１４日から１８日まで４泊５日の見学旅行を行ないました。

研修地として島根県、鳥取県、滋賀県、大阪を見学しました。最初に島根県の中国農業試験場畜産部内の肉用牛の肥育、繁殖牛（牛の品種は黒毛和種）家畜人工授精用精液採取場の設備等を見学しました。

見学中色々と案内の人に聞いた中で特に勉強になったことは雄子牛の去勢の時期である。試験場での今までの結果としては生後３ヶ月から６ヶ月の間が最も良い成績であったと云われました。その去勢の方法として、無血去勢器を用いた方法とゴムヒモを用いた方法を行っているそうです。どちらが良いかと云うと、ゴムヒモを用いてしばる方法は簡単でだれでも出来るが、長いあいだ子牛に苦痛を与えるのと放牧牛の場合はその役目を果たす前にヒモが切れて落ちる事があるのでやはり、無血去勢器による方法が良いと云われています。

鳥取県では、中小家畜試験場を訪ね、養豚、養鶏の試験的飼育管理も見学しました。

場長自からの案内で見学並びに色々な話を聞いた中で、現在放牧養豚について試験研究がされており、しかも牧草を飼料の１部とした方法です。

その結果として草を利用するので濃厚飼料の３０％の節約が出来ると云われています。こうした濃厚飼料の節約、又放牧するので自然な条件で運動、日光浴等自由に出来るので繁殖率の向上耐病性の効果、更に飼料効率も高くなるのではないかと思いました。

この他に場長の話で、同じ放牧地に牛を交えて放牧する方法を研究していると云われていました。私の考えでは不可能ではないかと思います。と云うのは豚の性質として牧草地を掘り起す性質を持っているので、草地を傷めるのではないかと思うのですが、もしこれが可能となれば、ある面積から多額的な収益を上げる事が出来るので、経営方法の一つとして勉強する必要があるように思いました。

その放牧地を見学したかったのですが、残念ながら場から離れた所でまた時間の都合も悪かったので見学する事が出来ませんでした。

滋賀県では、大中の湖農業協同組合が経営する肉用牛の肥育場です。ここでは主に乳雄牛の肥育がはっきりした頭数は今の時点では思い出しませんが、確か千数百頭ほど肥育されていました。

飼料の給与方法として普通よりも１歩変わったやり方が行なわれていました。

飼料を牛に与え体内で消化させ糞となって排出された糞を一度乾燥機で乾燥して、いわゆる飼料の再生化です。これを牛に飼料として濃厚飼料に混ぜ合せて与えられていました。

大体一般に飼料中の養分は牛の体内でその７０％が消化利用され、残りの３０％は排出されて糞中に残留すると云われています。ですから、この残りの３０％をもう一度牛の体内に通し利用させ、現在日本で問題となっている畜産公害の糞尿処理を兼ねた合理的な方法と云うのでしょうか。

しかしながら私が感じたのは確かに飼料費の経済性や畜産公害等は防ぐ事が出来ますが、糞を飼料に変えるまでの段階に要する機械設備、糞を採取するに最もやり易いような畜舎の構造、糞と尿を分離する脱水機、火力による乾燥機と燃料等々、こうした莫大な金額による設備費、これではいくら飼料が節約出来ても利益はなく、その維持管理だけでも大変だと思いました。

こう云った面で一歩進んだ牧畜経営を見学する事が出来ましたが、これだけの設備費をかけ飼料化しなくとも、その糞尿を別の面で利用し処理する方法、例えば土地に還元するとか、又飼料の節約面では牛自体の飼料効率を伸ばすように考え、行なえば更に利益を高める事が出来るのではないかとも思いました。

以上の畜産に関しての見学研修を終えて帰りに大阪に寄り大阪城を見学しました。想像以上に立派な建物で、その中には昔使われた武器等が保管されており、写真が映画等でしか見た事のない戦国時代の品物を実感として見学出来ました。

又、天守閣に上り大阪の町を一望に見下した時の感激は言葉に言い現わす事の出来ない思いでした。

こうした見学、体験の一つ一つが私達の日本での研修生活の幅を広げ、ブラジルに帰ってからの良い思い出となる事でしょう。

最後に、このレポート作成に当り各研修地では色々な資料を頂きましたが、研修地移動の際、荷物が多くなった為に荷作りしてブラジルに送る手はずにしていますので、このレポートを書くにあたり、試験データー等をあげ、詳しく書く事が出来ませんでした。

「農協視察で学んだこと」

パラグアイ国・イタプア県　フラム移住地
渡　辺　保　夫

初夏の風が匂う５月中旬に待望が適って、高陽町農協職員一同と共に共済推進研究旅行として先進地である四国の高知県窪川町農協を視察致しました。

参加人数は４４名で若者は２０名程でその他は理事、常務、課長等の老年の人が多数でした。

１５日、１９時３０分高陽町を出発し、翌日午前４時３０分頃に目的地へ到着し民宿で８時間３０分の旅の疲れを取る為に一時仮眠をした。午前８時予定通り定時に窪川町農協へ着いた。

専務と共済課長の出迎えを受けて、早速うと講堂へ案内され延々と４時間３０分余りの講演が開催された。主として共済事業について、実情や体験談と推進の方法について課長より報告が有った。

この農協は私が実習している小河原農協と比較しても貯金の保有高と共済の契約額は少ないが誇りと信念と自信を持って、事業推進の目標達成に最善の努力を惜しまない役職員の態度は立派と思った。組合の概要は次の通りで、経済地帯は海抜260ｍの所にあり、組合員数は、正が3,０００名、準が1,０００名で総数4,０００名の組合員から組織されており、貯金の保有高は５３億円、今年の共済契約額は、１００億円だそうです。

販売事業としては、米の生産量は最も多量の産地と知られており、年間１０万俵の（３０Kg入）出荷との事だった。昭和３４年には、乳牛を動入し、養豚などの畜産が２０億円の供給高、ビニールハウスでイチゴの栽培が真剣に将来の中心作物として研究されているそうです。

流通面では、６日、１６日、２６日の月に３回、西日本の業者が参加して、セリ市が催されるそうです。

共済推進の目的は、個々の組合員に人間的な生活を営むのと将来の安心感を得るのに共済に是非加入して戴きたいと思う。

又、役職員の願いとしては、協同の力を発揮して組合員の社会的な地位を保ち、豊かな生活を営む為に努力し、経済変化の多様な中で創造性の高い知識を取得して、チームワークを組んで優秀な職員を育成して行きたいとの事だった。そして協同組合運動の原点を忘れてはならないと強く主張されていた。

農協固有の経営原則を一般の人達は知っているだろうか？

第一に「経済的弱者が目的を同じくし、かつ資本的結合でなく人格的結合体としての組織を目的とする」、第二に「組合員の相互扶助による独立自助ー自主的協同活動を行なう」、第三は「組合員要求の最優先事業化ないし行動化」、第四は「目的同質性にもとづく組織活動によって組合員の経済的利益の実現を計る」真の民主的運営と、「1人は万人のために、万人は1人のために」という人道主義は、これらの原点を支える。

将来の農村構想を実現するには、危険を防ぎ保証され、安心感を与える「共済」に一名でも多く加入して戴いて欲しいとの事だった。

農協使命の目標を達成する為にも、将来の原動力となる、後継者には共済事業は欠かせない重要な事業であるとの事でした。

4時間余りの講義を終えて、窪川町を後にして午後から帰路について松山市に向った。

途中は緑の山々に囲まれた国道58号線を走った。車中ではクイズやゲームを楽しんで時間を過した。宿泊予定地の松山市道後温泉に午後5時頃到着した。神代の昔から名高い日本最古の温泉地で老人達に喜ばれてる所だそうです。翌日は市内見学となり、石手寺、正宗寺、松山城へまわり、特に印象に残ったのは正宗寺、子規堂に展示されていた夏目瀬石の多数の作品でした。

"子規が乗り、瀬石が乗りて、三津に行き、道後に行きし、汽車かこの汽車"

機会を作って是非行って見たいと思います。

共済推進には若さの特権「闘志」を持って頑張ります。

「各地で学び得た研修旅行」

パラグアイ国　アスンシオン市
堤　田　元　光

８月５日から１０日まで長野、京都、鳥取、岡山に研修旅行し、意義のある充実した日々を送りました。

まず、長野では、農業試験場に於いて果樹の品種や処理方法について説明を聞きました。

ブドウの品種は多く研究していたのがデラウェア、巨峰、ステュベン・オリンピア・ベリーＡ・ナイヤガラ・キャンベル等でした。デラウェアでは、ジベレリン処理に力を入れており、その処理はＳＳ、ドウフン、ミクストの方法で行なわれ、ジベレリンの濃度は１００ＰＰＭでした。

巨峰はふくろやかさの色の試験、又かんすい試験等も行っていました。ブドウの他には梨、モモ、スモモ、リンゴを試験的に作っており、果樹以外ではトマト、ピーマン、ナス、ダイコン、トーモロコシ、ダイズ等がありました。

鳥取では倉吉の農協や近郊の農家と鳥取大学の研究場を見学し、農協では選果場の案内や説明などをしてもらいました。ここの大きさは１万㎡あり、この中には、８本のベルトコンベアーシステムで果実を選び、分けるのはコンピュータにて大きさと重さが計られ、箱づめにされる仕組みとなっていました。又時期によってブドウや梨、メロンなど選果しています。

農家では、ほとんど若木でしたが、あるところでは巨峰の木が１０年から１５年のがあり、栽培方法は木と木の間にせまくうえてありました。

大学の研究場での一番の研究課題は、砂丘に作物を作る方法で、現在試験的にブドウ・メロン・ナガイモ・チューリップを作っていました。

岡山県果樹試験場では、ブドウの品種としては巨峰、ネオマスカット、デラウェア、スチュウベンを作っており、ここでの栽培は、トンネルと云うのはブドウの枝の上に、針金で丸るく作って（直径８０～１００㎝）ビニールをかぶせる方法です。

以上、いろいろと各地を回り、新しいことを多く学びましたので今後の研修に大いに役立たせたいと思っています。

第15回全国農村青少年
技術交換大会に参加して

開催期日

昭和５０年７月２９日(火)から３１日(木)まで（２泊３日）

開催場所

西蒲原郡巻町　　県農業教育センター

佐渡郡相川町　　二見地域

両津市　　両津市民会館

１９７５年７月３１日

「おとめ丸」にて新潟港へ

「全国農村青少年技術交換大会に参加して」

ブラジル国・パラナ州日光移住地
中村　弘

7月29日より3日間新潟県で開催された全技交に参加し、全国より集まった一千数百人の農業青年達と交換できたことは嬉しく、学ぶ面も多く有意義な大会でした。

稲と土の香りのする農業教育センターでの開会式、それぞれのアイデアを生かした演示発表、青い美しい海に囲まれた佐渡でのクラブ訪問競技、暑い日射しての中で流れる汗をふきながら共に語り共に考えた農業問題、若者が敬遠し、後継者が少ないと云われ何かと厳しい現状ですが、作物を育て、動物を育て、大地という大きなキャンバスに作品を描く農業こそ素晴しい芸術であり、やりがいのある仕事であると私は信じています。

昔の様にただ働くだけでなく、時代と経営に適した農業機械と新しい進んだ生産技術をどしどし取り入れ、百姓でなく考える農業としてより生産性を高めることによって、農業・夢と希望のある農業なるのではないでしょうか。

大勢の仲間達と長手岬で遊んだ美しい日本海の波の音を聞きながら、沈みゆく夕陽を眺め、トランペットの音が流れ、沖にはイカ釣り舟の漁り火が点々と見えた感傷的な一刻。

晴天に恵まれ夜空に北斗七星が輝やき、キャンプファイヤーの炎が照らす中でのエール合戦、天にもとどく程の大合唱、身体の中が熱くなり言葉で表わせないものが走るのを感じながら、一つ一つが日本での私の青春の喜びの想い出として、いつまでも心に残るものと思います。

たとえ住む国は異なっていても、農業に対する熱意と意欲は変ることなく、真剣に将来を考え、農業に取り組んでいる青年達が多くいるのには心強い気がしました。

農業を通じて多くの友ができ、また皆が協力すれば何でも出来ることも教えられ、この大会で得た収穫は大きなものでありました。

この大会をいつまでも続けて、農村青年がもっと密接により大きく輪を広げて欲しいと祈りながら、私達のためにお骨折り下さった関係者の皆様に心より感謝致します。

「全国農村青少年技術交換大会に参加して」

ブラジル国・アマゾナス州 マナウス
出田洋次

7月29日暑い最中、第15回全国農村青少年技術交換大会が開催された。"農業、その語る友を得よう。土に生きよう、世界の仲間"をスローガンとして、新潟県農業教育センターにて開会式が行なわれた。行進の先頭の10台のトラクターの力強いエンジンの音に続いて、海外代表を前に北海道から沖縄まで千数百人の力強い行進が続いた。

いかにも明日を担う若人の大会に合った開会式であった。

次々に各代表の方の挨拶があり、その中で特に言われることは、農業の重要性と食糧を安定的に供給するために農村青年はお互いに話し合い、技術を交換し合い、各国に帰ってからもそのことを思い出し頑張って欲しいということであった。

この大会がどんなものか知らず出席した私は、大会の内容・目的が理解出来、とても良かった。

一番印象の強かったことは、キャンプファイヤーでお互いに思いのままに話し合ったこと、そして多くの友を得、僅か3日間でも中には涙まで浮かべて別れを惜しむ若者の友情であった。

自分もあと僅かで日本での勉強も終りブラジルへ帰るのですが、日本の良い面を吸収し、これからの長い人生に役立てたいと思っています。

「第１５回全国農村青少年技術交換大会に参加して」

アルゼンチン国・ミショーネス州　ガルアペー移住地

植　松　吉　巻

雪国で知られている新潟に於て、私達海外から集まった者や全国の都道府県より集まった４Ｈクラブの代表者千余名に、あの南米と同じような真夏の太陽が強く照りつけていました。

施設の整ったスキー場だけでも６５ヶ所とか、シーズン中のスキー客は６００万人とも聞いています。しかし、一旦夏になるとこんなにも変ってしまうのだろうか。

何はともあれ、第１５回全国農村青少年技術交換大会は予定通り開催されて、いままで知らなかった者同士が同じ農業という一つの目的を持って、この緑の草木に囲まれた自然の中で寝食を共にしました。

２泊３日間、ちょっと厳しいと云う声も聞かされたスケジュールの中で、若い情熱と友情の輪で各地から参加した日本農業青年のことを知り、また私達のことも少なからず知ってもらえたことは非常に良かった。

本大会はアルゼンチン国では全く見られないほど盛大なものであり、７班をもって１村４２人とし、さらに４村をもって郷とし、この郷は果樹・花卉・生活・作物野菜・畜産等の部門により、いろいろな行事が予定通り行なわれました。

佐度・長手岬、ここは日本海の荒波によって作られた岬で、月面の原でのキャンプファイヤーは印象深いものでした。おりしも夏の空が赤く焼けて夕日が澄みきった日本海の水平線に沈む頃、遠く長崎からやって来ているというイカ釣り船の漁り火が遠くに八つ、九つと海面に輝き出し、次第に迫って来る闇の中に長手岬の波音と共にトランペットの音が響き渡ってきました。

潮風も心地好く吹いた月面の原でのキャンプファイヤーは、焼けつくような炎天下の中で行なわれたクラブ訪問競技やその他の行事での疲れを忘れさせてくれるものでした。

このようなロマンチックなムードの中で行なわれた交換大会の行事の数々は、忘れることのできない想い出として、心の底まで刻んでくれました。

大ダイコ乱れ打ち、郷歌、エール合戦、或いはふるさと探訪とこの３日間はあっという間に幕を閉じてしまいました。

「全国農村青少年技術交換大会に参加して」

パラグアイ国・イタプア県 フラム移住地
渡 辺 保 夫

緑の稲田が展開するここ日本の米所、新潟県の県立農業後継者教育センターは若人の熱気に満ちて、ここに集う千余名の若者達。「農業、その語る友を得よう。土に生きよう、世界の仲間。」をスローガンに、農業の将来に期待を持ち語り合う友を求めて、若い情熱を土に託し、未来を築く大きく重要な原動力と期待される若人の集い。

第１５回全国農村青少年技術交換大会の開会式は江藤農村政務次官をはじめ、多数の来賓の臨席のもと盛大に行なわれた。

私達海外代表を先頭に、北海道から沖縄までの1,４００名の青少年のキビキビした行進が続き、大会に相応しい全技交開会式の盛り上がり、力強い歩調と若者らしい声高らかな４Ｈの歌。

今、世界をあげて農業の重要性が再確認され、食糧を安定的に供給するため、農村青年の役割は大きい。

３０度を超す炎天下、七会場で繰り広げられた演示発表はどこでも満員の盛況。

全体的に応用面が充実したものが多く、地域農業の発展にいかに真剣に取り組んがいるかが立証される。

４７都道府県の若者の腕・胸にくっきりと浮ぶおいらが県の象徴を表現したワッペンコンクールは参加者の人気の的だった。投票用紙を手に掲示板とにらめっこしている姿はほほえましい限りだ。

旅館での夕食後、自己紹介と郷土の民芸品のプレゼント交換を行なった。親睦を深める絶好の場であり、膝を交じえて話し合った楽しみは忘れられない。

第２日目はクラブ訪問競技、午前４時３０分起床なのでビックリ……。それに長袖シャツと軍手を着用。

競技出発前、自信のほどは……。マイペースで楽しく行こうと全員で一致団結。競技内容は農業技術とマップリーディングの併用問題となっており、農業技術問題２０問ポイント数１０。休憩コーナーは牛乳・昼食・球根等四コーナー、最高に趣向をこらした競技だった。

第２コースの私達のグループはチームワークがとれていて、協力的な結果、一位に輝き、個々人が県知事より金メダルを受賞した。

全技交の花形、キャンプファイヤーが７月３０日佐渡の名勝、長手岬（月面の原）で厳粛のうちに盛大に催された。日本海に沈む夕日の美しさと潮風の心地好さはク

ラブ訪問競技での疲れをいやし、ファイヤーを囲んで友と語った最後の夜の感動は、忘れ得ぬ想い出として胸に刻まれた。

トランペット、大太鼓の乱れ打ち、4Hの誓い、郷歌、大会スローガン、エール代表出演等が行なわれた。

燃えろよ燃えろ、炎の如く、ロマンチックな中に仲間の心が一つに結ばれて身が引締まる。この感動……。遠く日本海に浮かぶ漁り火がこの感激を包んでくれた。

楽しかった3日間も今日で幕が下がる。暑くきつかった。そして数多くの想い出を残し、新しい友を得て故郷に帰る。

全国大会に参加して、私達研修生はかけがえのない多くの良い想い出をもつことができました。

「第１５回全国農村青少年技術交換大会に参加して」

パラグアイ国　アスンシオン市
堤　田　元　克

７月２９日から３１日まで新潟県でおこなわれた全国農村青少年技術交換大会に参加しました。行く前は、新潟県は熊本県より北にあるので、涼しくて、この３日間でも九州の暑さを忘れると思いながら行きましたが、残念ながら暑い毎日を過ごしました。

新潟県は美味しい米の産地として知られ、平地では広い水田が目に止まりました。土地は砂地で海抜０ｍの所もあり、又畑では丁度スイカの収穫の時期であり、トラックやテーラーに乗せ出荷中でした。

本大会には全国から千余名の素晴しい日本の農村青年達が参加し、私も皆と楽しく日本のこれからの農業に対する意見などの交換をしたり、又パラグアイの青年や農業のことを語り合いました。

７月２９日午前１１時３０分、暑い日中の太陽の直射日光に汗かきながら、開会式が行なわれました。皆、農村青年らしく暑さに負けずに元気よく開会の言葉を聞き、その後は全員郷別に別れて、また郷の中でも村と班に別れ、いろいろとオリエンテーションがありました。その後、農村青年の体験・研究・アイディアなどの発表があり、それを聞きながら私もこれからはブドウ栽培についての研究をして、良い品質のブドウをパラグアイで作り、又作業方法のアイディアも考えなければならないことなどを考えました。この後は班に別れて行動することになり、事業団の研修生とも別れ、新潟県（女）・千葉県・岐阜県・福岡県の６名の皆明るくて素晴しい青年達とのグループ行動に入りました。

その夜は新潟市の宿舎で、八珍村の１～７班全員顔を合わせ自己紹介を行ないましたが、皆それぞれ自分の家で農業をしており、女性の方も家で手伝ったり、あるいは責任を持ってやっている人ばかりでした。

その後の各県の農業の話し合いの中で私はパラグアイのことをいろいろ話しました。翌朝４時半に起きて５時には宿舎を出発し、新潟港からフェリーに乗り佐渡ケ島へ向いました。フェリーではこの大会参加者全員がお互いにお国自慢を語り合い、親交を深め、美しい日本海を眺めながら、この２時間の船旅を楽しみました。

佐渡到着後の相川町までのバスの中では早起きと疲れで眠ってしまい、残念ながら佐渡の農業を見ることができませんでした。

相川町ではクラブ訪問競技に班と共に参加、私達は１コースを行くことになり、

暑い日中汗を流しながらいろいろな農業に関する問題を答えながら、6kmのコースを2時間半で歩きました。

日本の農業については余り詳しく知らない私は少し心配していましたが、班で行動したので解らないことはお互いに手伝いあって、最後の問題まで頑張りました。

夜、長手岬にきれいな夕陽が水平線に沈むのが見られ、かわりに薄暗くなった空に星が輝き始め、海には遠くに鳥賊釣船の強い光が印象的で、まるで、私達農村青年の明日の道を照らしているように思えました。

キャンプファイヤーが始まり、千余名の農村青年の目の前にファイヤーが大きく燃え上り、全員が兄弟のように賑やかに歌を歌ったり、又はある県の民謡を踊ったりしている間に、燃え続けていたファイヤーもしずかに小さくなり、この日の日程がそろそろ終りに近づいてきたことを知らされました。

最後に、全員このファイヤーを一人一人のローソクに移して、空に向け上げながら「今日の日はさようなら」という歌を歌い、キャンプファイヤーを終えました。

7月31日朝5時半バスに乗って佐渡の農業への旅を始めました。

ここで一番目に映ったのはやはり米でした。水田が青々と見え、所々にカキやブドウも目につきました。

佐渡金山を見、大佐渡スカイラインを通り広々と青い平地を良く眺めながら、両津市民会館に着き閉会式が行なわれ大会を終えました。

この大会で一番良かったと思うのは参加者全員が農業関係者で話しや気持を通じあえたことです。また日本全国の青年達と友達になれてこれからどの県へ行っても兄弟のような友達がいること。それと全国の農業の状態を見聞き出来たことが最大の成果だったと思います。

「農村青年の結束の場」―全国農村青少年技術交換大会に参加して―

ボリビア国・サンタクルス州 オキナワ移住地
幸地哲雄

「農業、その語る友を得よう。」というタイトルのもとに7月29日から31日まで新潟県に於て開催された第15回全国農村青少年技術交換大会に、私達研修生も参加することの出来たことを国際協力事業団及び主催者の方々に深く感謝する次第であります。

本大会は、「農業、その語る友を得よう。」を旗じるしに、農業経営や農家生活の改善等についての研究実践を相互に交換し、当面する農業の問題とその解決方向を見出すとともに、同じ目標を持った若者達が友情の輪を深める、といった広範囲の意義を有する大会であったと私は思いました。

工業化が著しい発展を遂げている今日の日本において、農業という一次産業は同一成長を成し遂げず、日々その差は拡大する現在、この歴史的必然性に伴って若者は農村から流出し、新たな職業を求めて大都市にあこがれ、農村で農業を営む過半数が老年であり、又は兼業的従事者が日本農民人口の約半分以上を占める実情の中、暑さ寒さに耐え、自然に左右されながらの農業、農業に従事する若者達にとって日頃の実践又は問題等についての意見交換の場を持ち、さらに多くの友を得られることは真に意義深く、またこういった大会はなくてはならないと私は感じました。

最終研修報告　日本での技術研修を終えて

1975年9月30日技術研修々了式
（修了証書の授与）

「すばらしかった一年半」

ブラジル国・リオ・デ・ジャネイロ州イタグァイ
岡　崎　ソニア　マリア

私はブラジル生れの日系二世ですが，リオ・デ・ジャネイロ市郊外のイタグァイより花卉栽培についての技術研修を目的とし，国際協力事業団の移住者子弟技術研修生として夢にまで見た両親の生れた日本に来ることができました。

「日本に一度は行ってみたい。」これは日系人であれば誰もが持つ子供の頃からの夢です。

１９７４年４月３日羽田空港に着いてからこれまでの間，本で読んだり聞かされていたように，日本人は私達に非常に親切にしてくれ，１年半を気持ち良く過ごすことができましたことを心から感謝しています。

花卉の研修に入る前，日本の社会・経済など現在の日本の事情を教えてもらいましたが，大変良い勉強になりました。他の南米各地から来た同じ研修生１９名とも友達になれ心強くも思いました。

研修先は三重県津市にある赤塚植物園。若い時のアメリカでの実習の経験から花卉の大規模合理化経営に成功した方である赤塚さんのお宅に寝食を共にさせていただき，研修面でも又生活面でも非常に親切にお世話下さいました。この赤塚植物園では津市の二ケ所の農場でラン・鉢物の花，そして花木を栽培しているほか，ハワイと私の国ブラジルのアチバイヤにも農場を持っています。

ここでの研修はランを中心とした花の栽培で，培養で作られた苗の植付・植かえ・かん水・液肥による施肥・芽かきから花切り，出荷のための花の抱きかたまで１年間を楽しく過ごしました。

ブラジルでは父が前に花造りをしていましたし，今ではおじさんが花造りをしています。

私はこれまであまり花造りをしたことはありませんでしたが，いろいろと進んだ技術など良い方法を見たり経験することが出来，日本に来て本当に良かったと思いました。また花の包装紙一つにしても気をくばっているのには本当に驚きました。

その後１９７５年４月からは神奈川県茅ケ崎市の横田茂一さんの東山園芸でバラとカーネーションについて勉強しました。

ここでも苗作りから出荷までの仕事のお手伝いをしながら，いろいろと勉強させ

ていただきました。

赤塚植物園も東山園芸も私の他に何人も研修生が来ていて勉強をしていることは，日本でも代表的な花卉栽培の方だと思い，良いところで研修の出来たことは，本当に嬉しかった。勉強出来たものをブラジルに帰ったら皆に教えてあげたいと思っています。

日本にいた1年半には，研修の他に日本のいろいろな所に旅行することも出来ました。日本に来ている留学生の人達との関東地方の研修旅行。工場・試験場の見学の他に富士山にも行きました。富士山に行った日は良く晴れた日だったので，とても素晴しい景色でまるで夢をみているようでした。また読売ランドの水中の踊り。人魚のように人が水中で芝居をしたり踊りをするのは今まで見たこともないし，考えたこともなかったので大変感心しました。

また他に京都・奈良・九州などを旅行しました。

日本に来たばかりの頃の桜の花の美しさ，九州の阿蘇の景色の雄大さ，秋の紅葉のあざやかな色，初めて見る冬の雪のすてきな白さなど……日本はすばらしい国です，また訪れてみたいです。

このように1年半もの長い間，病気にもかからず，多くの勉強ができ，そのうえ日本国内を旅行することの出来る機会を与えて下さり，又お世話下さいました皆様に深く感謝いたします。

「ピニャル移住地のリンゴ栽培のために」

ブラジル国・サンパウロ州ピニャール移住地
深　沢　裕　夫

私は一年間山梨でブドウの勉強をしました。

その時期信州のリンゴを食べ，その見かけ味共に良い果実だと驚き，研修の後期は長野県須坂の試験場でお世話になることになりました。

リンゴの勉強をどうしてもしたいと考えた理由は私達の移住地では，リンゴを植えてからこれまで9年にもなりますが，満足に収穫したことがありません。これは栽培管理に問題があるからだと思います。

私はリンゴの輸入国であるブラジルの移住地で良いリンゴを栽培したいと思い，須坂の園芸試験場で勉強することになりました。

試験場では8時30分より17時まで昼食時間を除きすべて実習です。

私が6ケ月間に渡って学んだことは次のとおりです。

<u>リンゴの整枝，剪定の基本的考え方</u>

① リンゴの葉は受光度が直射日光の30％以上の有効樹冠容積を多くするよう心掛けるべきである。

② 「葉と枝幹部の重量化」を高くする。つまり骨格枝をできるだけ少なくして葉を多くつけることが多収量につながる。

③ 樹を一日でも早く最適繁茂度の状態に導き，おそ伸を除くことが良い品種・多収量につながる。そのためには剪定はできるだけ弱い方が良い。

リンゴは幼木時代は主幹形をとり，その後変則主幹形時代を経て，完成樹形は自然開心形をとるのが最適と思われる。

主幹長は出来るだけ短くし1.5 m程度，樹高は作業の便から4.5 m以下にした方が良。枝の構成，主枝，亜主枝及び側枝をはっきり区別して整枝する必要がある。そうすることによって樹形の維持が容易になり，剪定を簡易化することができる。

① 主枝分岐角度に注意し出来るだけ真直ぐに頑丈に育成する。本数を2～4本とする第1主枝の分岐点は地上60～90 cmとし亜枝にならぬように30 cm以上の間隔をおいて第2第3主枝を発出させる。

② 亜主枝は横への骨格枝で一主枝当り2～4本出す。これも出来るだけ真直ぐに育成させる。

③ 側枝は亜主枝及び主枝の先端部から直上及び直下を除いて日照に支障をきた

さない範囲で出来るだけ多く着生させる。主枝・亜主枝と異なって適宜更新する。

結果習性

リンゴは枝の生長が停止した後その先端に花芽が分化する。品種によっては葉えきにも花芽分化する。えき花芽はまた樹勢の旺盛過ぎる樹及び衰弱樹にできやすい。

一般にえき花芽になった果実は小さくて商品値が劣るので摘花してしまうが，紅玉では時に成らせることもある。

リンゴの花芽の中には4～6個の花を含んでおり，また枝葉の生長点も存在するいわゆる混合花芽である。そのうち中心花が最も早く咲き果実も大きくなる。

整枝剪定の実際（幼木時代から5～6年生まで）

まず1年生の苗は植付後60～80cmの高さで切り返す。

2年目には先端の枝を主幹の延長枝として50～60cmに切り返す。その次の強勢枝は残すと主幹が2本できるおそれがあるから基部から切り落す。
弱勢枝はできるだけ多く残して軽く切り返す。

3～4年目も2年目と同じ要領で行い毎年1～2本ずつの主枝候補枝を育成していく。

5～6年目には最終主枝本数の約2倍の主枝候補を決定し，その他の枝をしだいに間引いていく。主枝候補枝の分岐角度を広く維持するために枝の誘引などを行う。

人工受粉

花粉量の多い品種を選び風船状に含らんだ蕾から開花直後までの花を受粉予定の2～3日前に採集する。採集量は受粉目的花数の約1/20 程度あれば良い。（10a当り2万花に受粉するとして1000～1500花程度）。

花粉採取は個人的に小規模に行う場合は5mmの金網の上で花を手のひらでこすればよい。大規模に行う場合は稲の脱穀機を利用するのが便利である。この場合は爽雑物が多いので5mm目のふるいで粗ぶるいをした後，さらに2.5mm目のふるいにかけるのが良い。

開やくやくを紙に広げて箱内又は室内で加温する。温度は20～25℃，湿度は20～70%に保つ。高温多湿は禁物で場合によっては乾燥剤を使用する。

花粉の貯蔵の仕方はできるだけ低温乾燥状態で貯蔵するのがよい。特に湿度には注意が必要である。乾燥剤を入れて密封し，冷蔵庫に入れておけば1年間

は優に発芽力を維持させることができます。

綿棒，羽毛などで受粉する場合は希釈しないことが多いが，受粉器を使用する場合は石松子・脱脂粉乳・でん粉などの増量剤で薄めて使用する。

希釈倍数はやく穀付花粉の場合，その約4倍の増量剤を加える。両者を混合した後，0.2㎜目ふるいでふるって使用する。

摘果の時期について

リンゴの摘果の遅れは果実の発育に支障をきたすだけでなく，花芽形成を不良にして隔年結果の原因になる。各品種とも遅くても落花後25日頃迄に摘果を完了させるべきである。

摘果の強さは中玉品種は3～4頂芽に1果，大玉品種は5～6頂芽に1果あて成らせるのが標準である。ただし光線に恵まれた枝ではやや密に成らせてもよいし，その反対に光線不足の部位では思い切って強く摘果する必要がある。

摘果についての注意点は，リンゴは原則として3～4年枝の長果枝に成らせ，何度も成った古い短果枝や腋花芽に成らせない。

花数及び葉数の多い強い果そうに果実を残し，果叢内でも発育の良い中心果を残す。

摘花は開花期に幅をもたせるために一輪摘花の方が良い。

病虫害についての防除

一般消毒に3月中旬，発芽10日前に石灰硫黄合剤を散布する。

うどんこ病，ハマキムシ類，ソンゴコブアブラムシに水和硫黄剤・有機リン剤スミチオン・アジノン水和剤を芽出し2週間後に散布する。

開花直前及び落花直後に腐らん病・うどんこ病・赤星病・ハダニ類・ハマキムシ・アブラムシなどの防除のためトップジンM・ベンレート・殺ダニ剤を散布する。

5月中旬にうどんこ病・黒点病・斑点落葉病の防除のためアブルサン75％水和剤を散布する。

6月上旬から6月中旬にかけてうどんこ病・黒点病・斑点落葉病・すす点病・すす斑病・クワコナガイガラムシ・ケムシ類・アブラムシ・リンゴワタムシなどの防除のために有機リン剤加用有機硫黄剤「ダイボルト80％水和剤」，ダイアジノン34％水和剤，サイアノックス40％水和剤などを散布する。

6月下旬前回散布より10日後，7月上中旬，7月中下旬殺ダニ剤・有機リン剤4－12式ボルドー液を黒点病・斑点落葉病・ナシヒメシンクイ・ハマキムシ・ハダニ類などの防除のため散布する。

8月上中旬，前回散布より2週間後及びその2週間後の8月下旬より9月上旬に有機リン剤，スプラサイド36%水和剤，有機銅水和剤，ポリオキシンAL10%水和剤などを斑点落葉病・すす斑病・すす点病・ナシヒメシンクイ・モモメシンクイガ・ハダニ類・ハマキムシ類・クワナカイグラムシ・ケムシ類などの防除のため散布する。

最後に12月上～中旬に腐らん病のために石灰硫黄合剤を散布する。この防除は重要であるので少し詳しく述べておく。

腐らん病の対策について

腐らん病は主幹の傷口から感染する。被害部の樹皮は初めはかつ色で多少ふくれ上がって弾力性があり，削るとアルコール臭がする。

5～6月になるとこの部分はやや陥没して黒色斑点が密生するようになる。病斑が枝主幹を一周するようになるとそれから上部の枝葉がしおれて枯死する。盛夏には病勢が一時停滞するが，秋になって再び広がる。

寒冷地で発生が多い。

防除の要点については，枝主幹部に凍害や日焼けを起こさぬようにする。剪定や風雪によって生じた大きな傷口にはユゴ剤バルコードの保護剤を塗布して癒合を促す。

日焼け防止には油脂加用石灰乳や白ペンキなどを塗布する。被害部は発見次第切取るか削り取り，切口には上記保護剤を塗布する。

落葉後及び発芽前に石灰硫黄合剤10倍液を樹体に洗うようにていねいに散布する。

落花直後及び10日後にチオファネートメチル剤又はベノミル剤を散布する。

私はこの18ケ月間日本で生活し改めて自分の国ブラジルを見なおしました。日本がブラジルのように広大な農地があれば良いのにとつくづく思いました。私達のブラジルは広大な農地がありますので，農業をやるならやはりブラジルだと思います。

私はこれから日本で学んだ技術を広いブラジルで大いに生かして頑張りたいと決意を新たにしました。

私は国際協力事業団のおかげで良い勉強が出来たことを心から感謝しております。本当にありがとうございました。

「農産加工の研修」

ブラジル国・マットグロッソ州バルゼアアレゴン
移住地　　西　山　立　美

1974年4月3日，研修のために羽田空港に立って以来1ケ年半の研修期間が過ぎた。今思えば何とこの1年半の短かったことか。しかし来日当初は生活や社会環境，あるいは又研修先でのあらゆる面において不馴れなため，そして友人・知人のない生活に，その日，その日が実に長く感じたものでした。

農産加工が研修目的であった僕は国際協力事業団のお世話で，出身県である山口県の農業協同組合連合会農産加工場で研修することになった。

そして一年間は山口加工場を中心として山口県農業試験場，山口市商工指導センター，農協連萩工場等研修先を移動しながら，各種果物の罐詰加工，ジャム加工，ジュース加工の他試験室における糖度分析，ビタミン含有量検査分析，更に食パン，うどん，甘酒，栗，しいたけ等の食品加工の実習をした。

また農産加工機械の整備点検，時には修理にもたずさわり，一応一通りの研修を受けることができました。

この間僕と同様に農産加工の勉強するための日本国内各地からの研修生もおり，年代も比較的近かったこともあり，いろいろな意味で良き友達となれたことは心強い限りでした。

これら研修生同志が土曜の夜から翌日の明け方まで飲み，語り，現代の日本の青年の考えや意見を聞き，僕のことやブラジルの話等をし，技術研修とは違った意味の良い経験と収穫を得たものです。

現代の日本の青年の合理的というか余りにも割り切った考えについていけないような気持，あるいは僕自身が余りにも旧い考え方なのかととまどう気持が入り混り，何とも変な気もしたものです。

しかし農村青年には本当に真面目で，現在の日本の農業問題，自己の経営等に真剣な考えを持ち，努力している仲間も多くおり，学ぶこともたくさんありました。この他研修のあいまをみて楽しんだスポーツを通じ，あるいは研修先移動ごとに招いて下さった歓送迎会等を通じ，1人で国外から来た僕に対しての心使いは，忘れることなく心に残ることでしょう。

この1年半学び，教えられたさまざまなことをいつの日か役立て，親身になって

下さった方々に対してお返しをしなくてはならないと心に決め，長いようで短かった研修を思えば思う程ど幸せであったことを感じます。

お世話下さった多くの皆様方のご健康，ご活躍を祈ると共に，私に対しての種々のご厚意を厚く御礼申し上げる次第です。

「養蚕技術研修で学んだこと」

ブラジル国・パラナ州日光移住地
中村　弘

日本へ来て二度目の夏も朝夕涼しくなって，秋の気配を感じられるようになり，一年半が過ぎようとしている。

昨年の4月3日，待望の日本へ着いた嬉しさと限られた期間であるが新しく始まる生活に，ブラジル研修生として恥しくない行動をしたいと心を引締め，高なる胸を押えながら羽田空港の土を踏んだ日が，つい先日のような気がする。月日の過ぎるのが驚くほど早い一年半でした。

私が特に養蚕を選んだのは他の作物と異なり，比較的天候に左右されず短期間で収穫が出来，気候的にも恵まれたブラジルでは年間8～10回と多回飼育が可能だからである。

また桑の条を40cm程度に切って30cmほど地下に打込んでおけば，90～100%活着し7～8ケ月で収穫出来るほど成育するので，桑園造成も極めて容易であり，有望な産業と信じたからです。省力化及び規模拡大と蚕作安定を目標にする私にとって，古い歴史と伝統を持つ養蚕国日本でも，最も養蚕技術の進んでいる群馬県の蚕業試験場で勉強出来たことは恵まれていました。

この一年半の研修を振り返り，養蚕知識が皆無に等しい私にとって，実習と講義を通して得た技術と知識は，たとえ気候条件の異なるブラジルにおいても大きく活用出来，蚕作安定と増産の基になると思います。

育蚕課において蚕作安定の基本である蚕室蚕具，特に稚蚕室の消毒の重要さから学び，飼育標準表を基に稚蚕の飼育法・稚蚕各令期の適切な桑の採り方と温湿度の調整，眠期の取り扱いと蚕体消毒の方法等を実習と講義で学びました。

壮蚕期は多段循環式自動飼育機で飼います。

この機械は蚕室有効利用と省力面では優れているが，条桑を細かく切断するので桑と桑の空間が少なく，蚕が桑葉の上にあがり踏みつけるため，食下量が落ち蚕も小さい。また経済性からみても価格に問題があるようです。

蚕種課では矮小枝桑給与と蚕品種の繭質への影響を調査した。

蚕品種別に不良桑で飼育した結果，不良桑は採桑作業能率も悪く，桑葉も薄い上，萎れ易く蛋白質含量も少ないので繭質が低下していた。

いずれにしても良い桑を栽培することによって採桑能率も繭質も向上するのでは

ないだろうか。

晩秋蚕期は病害虫課で蚕病の診断法と診断に必要な薬品の作り方を学びました。特に大きな被害の出ているウイルス性軟化病については発病状態と経過をみるためウイルスを稚蚕に添食し発病経過を調査した。

同条件で春蚕期と晩秋蚕期の発病を比較してみると，2令起蚕で添食した結果，春蚕では添食後13日目で発病しているのに対し，晩秋蚕では7日目に発病していることがわかった。またいずれも眠期頃に発病しており，この時期は脱皮等のため蚕の抵抗力が弱くなっているためかと思われる。春蚕と晩秋蚕は発病が早く被害も大きくなるのではないだろうか。

また晩秋は葉質も低下し多回育で病源が蓄積されるので，これが大きく関係しているのではないかと考えられる。いずれにしても蚕作安定の第一は徹底した消毒であると痛感した。

ウイルス性軟化病の診断法として，病蚕を解剖し中腸の一片を取りスライドグラスになすりつけ，固定液をつけて固定し，軽く水洗いしてピロニンメチルグリーン染色液を滴下し，数分後カバーグラスをかけて顕微鏡で観察する。封入体を確認する方法で簡便性が特徴である。

もう一つの方法として螢光抗体法があり，紫外線を当てると螢光を放つ物質で，抗原・抗体反応という特異性の高い反応を利用したもので，病源検出感度が良好で，病徴を示さない感染2日目頃の病蚕でも認知できるすぐれた特徴がある。

この他に蚕種製造及び人工孵化と蚕卵の保護，桑園管理と稚蚕用桑園の造成法，土　改良及び施肥時期と桑園に必要な肥料，堆肥の作り方，桑園害虫の防除法等巾広く実習と講義を通して養蚕経営に必要な知識を学ぶことが出来た。

私が日本に来た最大の目的は養蚕規模が拡大される程労働力が集中する5令盛食期の採桑と上簇後の残条片ずけの問題，特にブラジルの場合日中は温度が高く桑葉の萎れが激しいため，朝夕の涼しい短時間で採らぬばならず，人手に頼るには限界があり，また年々高騰する人件費に今後増々難しくなりつつあることから，日本の進んだ機械技術の利用に大きく期待していた桑刈機であるが，現在の桑刈機では実用にほど遠く大きく期待していただけに残念に思った。

広く粗雑な仕立のブラジル桑園と異なり，短期間に出来るだけ多収を考えての仕立法と土地事情で分散している桑園等からみて，桑樹を傷つけず性能の良い桑刈機の開発は難しいようである。

もう一つの問題である上簇後の残条片ずけは，日本で最多収繭養蚕家，長野県の吉田氏宅へ視察に行き，大いに参考になり，この問題は解決できそうである。方法

は，壮蚕室の床はコンクリートで，蚕座は側面に約２ｍ間隔に高さ約５０cm直径１cmの鉄棒を支柱として立てるが，その鉄棒の基は固定せず位置を定めるための浅い穴があり，それに鉄棒を立て上端を連ねて押さえるように一本のワイヤーロープを張る。

ワイヤーの両端は床面の鍵輪に固定し，このワイヤーに寒冷沙を２つ折りにして掛けワイヤーを張ると側面ができる。

片ずけにはワイヤーロープをゆるめると支柱の鉄棒は簡単に取り除くことが出来る。支柱と側幕を片ずけ，シャベルローダ（フォークリフトでも良い）で蚕座の一端からすくってはダンプトラックに積み上げ，堆積場へ運ぶ。人手ですれば１０人で一日かかった作業が一人で３０分あれば片ずくという驚くほどの省力化であり，すぐにでも取り入れたいと思っている。

給桑は一定の長さに切断機で切り揃え横に並べる給桑法で，台車を利用すれば能率も上り，給桑作業はさほど問題ではない。

実習と見学等を通して可能な限り多くの養蚕農家の方々と接し，試験場とは異なった面や，長年の経験から得た貴重な話しを聞かせて頂いたり，また山間部の傾斜地を耕やし，肥料を施して現在の桑園に成るまでの苦労が感じられ頭の下がる思いがした。

決して恵まれていると云えない立地条件で，これだけの成績を上げているのを見て，土地と気候条件に恵まれているブラジルを改めて見直すと同時に，もっともっとやれるのではないかと自信がついたことは確かである。

この一年半を振り返り養蚕関係は勿論，いろいろな面での知識を広めることが出来，多くの友も得て，私の青春の大きな良き思い出として，一生忘れることなく心に残ると思います。

この期間に修得した技術を最大に活用し，ブラジル養蚕発展のため，努力するつもりです。いろいろと条件の異なるブラジルで，すぐその効果が出るとは思いませんが，数年後には成果が上ると信じています。

最後になりましたが，詳しくご指導して下さいました蚕業試験場の諸先生方に心より厚く御礼申し上げます。

又この機会を与えて下さった国際協力事業団の皆様に心より感謝致します。

「多く学び得た研修体験」

ブラジル国・サンパウロ州グアタパラ移住地
渡　辺　一　寛

光陰矢のごとく過ぎ去った1年6ケ月でしたが，今ふり返ってみれば，あれも，これもやればよかったと欲が出て来た今日を過しております。

しかし短かい期間であれもこれもとはあまりにも欲張りすぎる様な気も致し，最少限に絞って研修を致しました。

茨城においての養鶏の研修では，今までの無知さをしみじみと反省させられ，時間の許す範囲で諸技師さん達に種々と教えてもらいました。特に病理関係については自分の意見を聞いてもらい，研究室に4ケ月間程入り浸りで教えてもらう事が出来ました事は，これからの経営上非常に役立つものと考えております。

気象条件等も違う日本のやり方ではありますが共通した病気等も多々あり治療予防方面においては，そのまま取り入れられる物もいくつかありました。

幸いその中に自分達の所でも問題になっている物があり，帰ったらすぐにでもやらなければと考えております。

日進月歩の今日，こういう病気等もそれなりにしつこくなって来ており，薬品等はすぐに効かなくなって来ております。こういう点からもいかに薬品等をつかわずに丈夫な鶏を飼うかが一番の課題であると試験場の技師さん達も言っておられたが，自分でもその様にならないものかと考えさせられました。

それには，自分では第一に鶏に対して愛着心を持って接する事が不可欠ではなかろうかと思いつきました。今までは要するに生産物を産んでくれればというような甘い考え方が非常に強かった様にも感じました。人間生活においても町の真中で日夜車の騒音，排ガスが多くある所よりも田舎で空気のきれいな所での生活の方がはるかに住み良いのと同じ様に，動物にも同じ事が言えるだろうとつくづく考えさせられた。しかし何事においても考える事は安易であり，いざ実行しようとすれば色々な問題にぶつかりうまく行かない事が今までの自分で歩んで来た道でもありましたので，そこを打開する様な考えで実行に移して行きたいと考えております。

鶏の病気の解明一つを取ってみても，今まではみな組合の指導員任せの考えで進んでまいりました。しかしこれからはこの研修において収得した技術を取り入れて，自分である程度の事は行なっていき，尚かつ難問に出あった時には指導員の方々の力をかりてやって行く方針でなければと考えております。幸いこの期間には手を取

られながらではありましたが，解剖等も教わり，自分一人でも行なえるだけの自信もつきましたし，ある程度の処方も身につけたつもりです。

何時も良く言われた言葉は初歩をしっかりマスターしておれば，少し位の事にはくじけずに出来るはずであると言う事でした。又それと同様にある程度の自信を持って行なうべきであるとも言っておられた。

自分で経験をしてみてなる程と感じさせられた事も大きな収穫でありました。

その他には育雛の行ない方などにおいて，給温の大切さなども身を持って体験させていただき，この点についても今までのやり方を改善する余地が沢山ある事に気がつきました。こうして書いていても最初に書いた如くあまりにも無知でありすぎた事を痛切に感じ，この研修においてはかりしれない程の収穫が出来ました。

経営形態をそのまま取り入れる事は最初から思ってもおりませんが，こういう点さえしっかり学んでおれば，いかなる飼育方法が良いかという事は必然的に解ってくるものと思っております。

しかし研究機関等ではいざ農家に指導をして取り入れさせようとしてもなかなか思う様に行かない点もあると現場の技師さん達は言っておりましたがその通りかもしれません。

例えば外部からの出入口にはふみ込み槽を作っても完全に病原菌の浸入を予防するには，3日に一度はその薬液を取り替えないと薬効がなくなりますと指導してもなかなかその事が守られておらなかったりと言うのが一般の様でありました。

これは薬に対しての知識がないが為に一週間になり10日になって初めて取り替えるのが一般の農家の様でありました。

自分でも見学をしてまいりましたが，こんな物ならない方が良いだろうと思われる所が多々見うけられました。しかし自分の経営を振り返って見えば，やっぱり見て回った農家とあまり変りがないと言う事に気がつき小さな事の様ですが大きな落し穴になる危険性を持っていたのだなあと感じ，こういう事は第一に実行する心で帰ってまいりました。そしてこういう感じ方が出来たのもある程度基礎の勉強を出来たからだとつくづく思った。

試験場生活において前書した通り，深く追求する所は自分なりに行なってきましたが，これはあくまでも初歩という考えでこれからが，本当の意味での出発と思い頑張る覚悟でおります。

今年の4月からは静岡県清水市興津にある農林省果樹試験場においてみかん栽培について研修を6ケ月間受けた。

予備知識等何もないままに入ったので最初のうちは一般の研修生達（2年間）と

同様に講義・実習等を受けていたが，自分の研修期間の事を考え，３ケ月が過ぎた頃より，研究室の室長さん等に相談をし，最少限自分で学び帰りたい項目をかかげ，それに沿った様に取り計らってもらう様お願い致しました。

その内で第一に行なったのが平塚にある本場においての土壌肥料の研修であった。ここでは，家畜糞尿の果樹への利用限度等今までの試験成績のデータを基にした講話を受けて来た。自分の経営である養鶏においては鶏糞は自給出来るが，どれ位の範囲でどの様な施用によって果樹に対して利用出来るものなのか，ある程度の線で頭の中に焼きつかせておきたかったのが目的であった。

しかし短かい期間でもあり又本場の技官さん達も各々仕事を持っておられるので充分とまでは話し等も出来なかったのが残念であった。

平塚から帰ってすぐ今度は浜松のみかん農家へ研修に行って，大型機械化によるみかん栽培等を見せてもらった。

時間的に実際には行なってもらえなかったが，どの程度までの機械化が出来るものかと言う事は話しを聞いて理解する事が出来，又みかん栽培ではどの様な機械が一番能率良く動かす事が出来るかという点も，自分の目で見て感じ取れたのが大きな収穫でありました。

もう一ケ所は試験場の近くの篤農家での実習でありましたが，ここでは主に接ぎ木をと，思って行ったのでしたが，丁度摘果の時期であり結局摘果が主の様になった実習に終った。

しかしこの実習期間中に摘果の重要性をまざまざと感じ取る事ができ，又うまいミカンを作るには必須の事であると言う事を理論と体験によって学び取る事ができたと思った。

こうした外部研修により始めて知る事が出来たのはその地域等によって栽培者・経営者の考えが各々違うと言う事でありました。

おいしく品質の良いみかんをより多く生産し，より高く売るかと言う事はだれしも同じ考えでありましたが，一つの品種を沢山作るか又は何品種も取り入れて労働配分を良くして行くかという同じ専業農家でありながら２つのやり方に直面し，その各々の人が考えを聞いてどちらも，うなずける点があったので，自分の今後を考えてみても浅はかに結論を出せるものなのだろうかと言う迷いが生じた次第でありました。

しかし我経営においては今の所一つの品種を沢山作るという方向で行きたいと考えております。

６ケ月という短かい研修期間において，みかん栽培を１から１０まで覚えるなど

は到底不可能に近い事と自分では感じ，主として苗作り，肥培管理等を重点において研修を致しました。

病害などにおいても当試験場には権威者がおりましたので，ある程度の事は教えてもらう事が出来ましたが，まだまだ自分一人で一本立ちをして行くまでには程遠く，これからより一層の勉強をしていかなければと感じております。

又，この研修期間を利用致して，日本各地の見聞を広める事が出来ました事は，我人生において一生忘れ得ぬ事となるでしょう。

去年は茨城県の国民体育大会を県職員の計らいにより，夏・秋の大会とも観覧させて頂きましたし，今年は事業団の計らいにより新潟においての合同農村青少年技術交換大会にも参加させてもらいました。

この大会の期間中に始めて色々な農業分野の青年男女と接する事が出来，又話しあえました事は，非常に有意義でありました。

この様な事が我々にはもつともつと必要であったのではなかろうかとつくづく感じており，これからの我々の地域社会作りにも非常に役立つ物が多分にあった様に思いました。

又この大会に参加したおかげで佐渡ケ島の観光も出来ました事は，非常に想い出深い事でもありました。

研修期間が終ろうとしている今，1年6ケ月を振り返って見て，何も悔いを残す事なく研修生活が出来たのだろうかと考えていますが，国で首を長くして待っている家族・地域の人達の事を思うと，もう少しがむしゃらに学んでおけば良かったと後悔をしているのが本心であります。しかしこの研修期間中には色々な分野の人と接する事ができ，いつでも便り一つで力になっていただける道が開けた事はこれからの自分の茨らの道を考えた時に非常に心強い気持ちでいっぱいです。

最後になりましたが，この研修期間中我々の面倒を終始見て下さった事業団職員の皆様，又我々の研修をお受け下さった関係機関に対して厚くお礼を申し上げて私の報告と致します。

「私の研修をささえたもの」

ブラジル国・アマゾナス州マナウス
出　田　洋　次

私は幼い時から機械が好きで自動車工場につとめ，人生を機械の中で暮すつもりで自宅にある自動車の構造や部分品などを父に習い何んとか専門的に勉強をしてみたいと考え，研修生として希望しました。

去年3月に熊本の専修職業訓練所に入学し，ここで一年間じっくりと勉強をしようと心に決めました。でも実際に学校に入り勉強を始めてみると自分の考えや，思っていたのと大分ちがっていました。

先づ入校して感じた事は，先生はじめ学校の人達が皆仲良く，学校のきまりを良く守り，そしてきびしい中にも楽しさあふれる学校でした。

この様なきびしい学校で勉強を受けたならばきっと自分はもちろんの事，誰しも良い技術の修得が出来るのではないかと思いました。

自分が力いっぱい勉強した時のうれしさ又，言葉のわからない時や友達が出来る迄の淋しさ，今でも忘れる事は出来ません。そんな時，一番力になって下さったのが先生方です。そして自分をここまで頑張り続けられたことも，諸先生方のはげましだと深く感謝している所です。

お陰様で，無事に僕も学校を卒業する事が出来ました。

後期の6ヶ月は希望どおり，本田技研という会社に入社する事になりました。今迄は友達といっしょに寮での生活でしたが，入社後は下宿での生活と変りました。下宿先も会社の近くに決まり普通の生活にもどる事が出来又，家族の人達とのいろいろな会話も出来るし，この半年間を種々な意味で有効に過ごしたいと思いました。

入社して会社の内容など教えてもらい，ここで実際に自動車に取り組んで仕事が出来るのかと思うと，うれしさと一つでも多く機械について知りたい気持ちでした。

技研にはいった時は丁度一般車の定期点検の時期でした。連日残業の仕事が続き大変でした。その内に会社の人達とも友達になれて，わからない時はたずねながら一応自分一人で点検も出来る様になりました。

やっと一つの勉強が出来たかと思えば，次の新しい勉強が待っており，エンジンのオーバーホール，クーラー取付け，それに単車と種々の車種及び構造部分の勉強しました。特に単車については自分なりに勉強に力を入れたつもりです。

仕事の暇をみては友達とブラジルの話に花を咲かせたり，又熊本の話を聞いたり

して楽しい毎日をすごしました。今この一年半をふり返ってみればどれもこれもが勉強になり，僕の一生の中できっと忘れられない思い出になる事と思います。つい先日には会社の人達で盛大に送別会を市内でして下さいました。

こんな時，友達はいいなあと思い，自分もブラジルへ帰ってからもこのはげましに負けない様頑張りたい気持です。

又7月末日から8月の始めにかけて，新潟県で行なわれた第15回全国農村青少年技術交換大会に参加し，"語る友を得よう，土に生きょう世界の仲間"をスローガンのもとで，全国から千数百人の若人が集り，日本の農村青年が一生懸命，農業問題を研究し且つ議論する姿に感激もし，日本農業の中での農村青年の役割の大きさに改めて驚きました。こんな中に自分を置きかえてみると，研修期間も残り少なくなった現在まだまだ勉強がたりなかった様に思えます。

でも自分ではせいいっぱいの努力はして来た事だし，今後，ブラジルへ帰ってからこの一年半の勉強をどう生かしていくかにあると思います。

自分もここまでにして下さった先生方，そして訓練校，会社の友達の方，決して御恩は忘れないつもりです。

日本の良い所を大いに生かし今から先の長い人生の為に頑張りたいと思います。

短かい文で終りましたけど思っている事は書いたつもりです。事業団の方々にもこれから先もよろしく御指導お願いしたいと思っています。

「日本での技術研修を終えて」

ブラジル国・パラ州 モンテアングレ
高　谷　和　夫

昭和４９年４月３日午後６時羽田国際空港に到着して以来の１年６ケ月の日本での研修生活は，これからの私の人生に大きな役割を果たすことと思います。

今から２０年前，当時８才だった私は両親と共に日本を離れ，しかも船で３０数日をかけて，目的地ブラジルへ向かいましたが，その時日本とブラジルはまるで別世界なのだと強く感じました。そして日本の土を二度と踏むことはないと思いました。ところが今回子弟研修生に推せんされ，飛行機でありましたが僅か３日足らずで，しかも二度とないと思っていた母国の土を踏んだ時の感激と喜びは大きく，言葉に言い表わすことの出きない思いでした。

来日しての当初１０日間はいろいろと忙しく気をゆるめる間がありませんでしたが，一段落すると，私が現実に日本で生活しているのが不思議に思えてなりませんでした。良い夢をみているのではないかと何度も疑うことがありましたが，これは現実なのだと自分に強く言いきかせ，自分なりに目的と責任を果たすため努力する決心をしました。

１年６ケ月に渡っての牧畜に関しての研修で，どれだけのものを収穫出来たか実感としてわかりませんが，ただ一ついえるのは，日本に来る前の私と今の私を比べると，物事についての考え方や実行力が多分にして変ったということです。又牧畜に関してもただ漠然とした知識しかなかったが，今では一部分にすぎませんが，多少なりとも解るようになりました。

最初の一年間は福岡県立種畜場で畜産の基礎知識を，午前中の実習，午後の学科により修得しました。ここでは指導員の人達が非常に良く，私には特別にといってよいほど，肉用牛の飼育管理についておしえて下さいました。

この他に人工授精の技術の中で採精，保存等の方法を実際に手をとっておしえて頂き，お陰様で授精師の資格も修得できました。

１年が過ぎ，残り６ケ月間を３ケ所に分け実習を行ないました。

最初の２ケ月間を熊本県西原公共牧場でおこないました。ここでは乳牛の育成，和牛あか牛・ヘレホード種の繁植・育成肥育を行なっており，頭数も約８００頭という多頭飼育でしたので，実習地として申し分のない所でした。しかし肥育牛を除いては全頭放牧されていました。

実習期間中は繁植牛の分娩時期と雄子牛の去勢の時期でもありましたので，分娩

時の助産や無四去勢器による去勢の方法，放牧地での授精，また８００頭の牛のうち約４００頭がピロプラズマ病にかかったので，その病原虫の性状や，この病気のため死亡した牛を解剖して内臓の状態を見ることが出来，またその治療方法等の実習が出来たことが大きな収穫でした。

またここでは牧場長はじめ全員良い人達で，場内の行事の時など職員と同様に扱って頂きました。実習期間が過ぎて離れなければならない日が来た時，実習地を変えるのを止めようかと思ったくらいです。私達の後輩の実習地としてぜひ進めたい所です。

次の２ケ月は群馬県浅間家畜育成牧場で実習しました。ここでは約６００頭の乳牛が放牧育成されており，毎日牛追いが主で，広い面積で山坂の多い所を徒歩でもって牛に合わせ追いました。

ここでの生活では職員・獣医師・元海外協力隊員だった人そして同じ実習生といろいろと交流を深めることが出来ました。特に獣医師の人には牛の病気の治療法等ていねいに教えて頂きました。

次の２ケ月間は北海道十勝種畜牧場で実習しました。ここでは主に種牛の飼育管理，品種改良としての種雄牛の直接検定繁殖牛の放牧管理の実習を行ないました。また余暇を利用して道内の畜産農家を訪ね見聞しました。

実習生活の中で毎土・日曜日にインスタント・ラーメンを自分で作り食べたことは楽しい思い出です。またここには１２名の研修生が居り，彼らには入所時に歓迎会，退場時に送別会をやって頂き大変嬉しかった。

こうして１年半に渡っていろいろとお世話して下さった人達や，知り合った友達がいつかブラジルに来る日があるならば，お礼として牛肉でも充分食べられるようにしておきたいと思っています。

１年半の研修期間中実習地での体験以外に，「見てやろう」「聞いてやろう」の精神で九州から北海道まで牧畜の状況を見，又観光地を訪れ見聞を広めましたが，まだまだ「見たい」「聞きたい」「覚えたい」ものがたくさんあります。しかしながら，こうした時間の不足を感じながらも私の夢である大牧場経営に一歩近ずいた様な思いがします。

帰伯後日本で体験して得た技術と知識を基礎として，実にブラジルの牧畜を勉強し続けながら，大牧場完成へ一歩一歩前進していきたいと思っております。

最後に心残りになるのはこの研修の機会に得た１９名の第４期生の同期の桜である親友達と別れ別れになることです。先に帰っていく友を見送りやがては私も日本を離れなければならない日が来ると思うと，何ともいえない気持です。この１年半

に渡っての私達の技術修得，見聞，親類の人達との再会等数多くの貴重な機会とご援援助を与えて下さった国際協力事業団の方々，温い心を持って御指導下さった各支部の皆様，そして各研修先の先生方に心から感謝申し上げます。

「自動車整備の研修を終えて」

ブラジル国・パラ州アカラ移住地
細　越　卓　美

生れ故郷の日本への技術研修生の一員として選ばれましたことを深く感謝致します。

日本は国は小さくともいろいろな面でブラジルと比較すると，50数年も進んでいる国と聞いており，これを機会に自分の人生を決める足取りをつかもうと，大きな望みをかけて来日しました。

研修目的は自動車整備です。私は小さい頃から機械をいじることが大好きで，いつも技術者になりたいと思っていました。

日本へ着いたのは4月の初めでした。4月といえば暖かい時期と聞いていましたが，アマゾンから来た私には大変寒く感じ，これでは冬になれば凍え死んでしまうのではないかとも心配したものでした。

研修第一歩として都立江戸川職業訓練校へ入校，住いは練馬区の力行会というところに決まりました。通学に片道2時間もかかり，また電車を3回も乗継がなければなりませんでした。通学途中人の多さ，そのセカセカした様子には本当に驚きました。また不慣れなため電車を乗り間違えたこともしばしばありました。訓練校には大・高・中卒者，失業者など様々な人がいましたが，皆自動車が好きで来ている人ばかりでした。皆さんと比べて読み書きが達者でない私に研修生ということで，解らないところをかみくだいて教えて下さり大変感謝しています。

自動車整備士3級の国家試験にパスすることを目標に，自分なりに精一杯頑張りました。やがて1年間の終りも間近にせまり，試験にパスするために昼夜のくべつなく練習問題をやった結果，幸いにも辛うじて3級整備士三項目のうちガソリン部門が受かりました。

国家試験にパスする率は毎年50％と厳しいものだそうで，これに受かっただけでも日本の技術研修の大きな収穫と思います。

こうして一年間実地訓練生活を終えて，講師と相談した結果，目黒区の東京トヨタジーゼルで，後半，半年間実地訓練を受けることになりました。

ここは大きな会社ですので道具が豊富に揃っていましたし，又良き先輩達に自動車というものはこういうものと解るまで徹底的に教えられました。

一年間の訓練，半年間の実地研修のおかげで何とか一人立出来るような実感がわいてきました。

この一年半病気一つせず，自分の思い通りの研修を出来たことを深く感謝いたします。長いようで短かかった研修の日々を生涯忘れることがないでしょう。

これから先，体で学んだこの技術を僕の人生に大きく役立て，お世話になった皆様の気持と期待に応えて精一杯やっていき，「日本へ行かせて良かった。」といってもらえるようにしたいと思います。

いつの日か機会があるなら是再び来日したい気持で一杯です。

「日本での研修で感じたこと」

ブラジル国・バイヤ州 クビチェック移住地
竹　並　明　弘

私の故郷である日本に一度訪れて，日本の農業経営について勉強したいと思っていましたが，幸いにしてこの度の一年半の研修に参加出来ましたことを御礼申し上げます。一年半の期間の研修は長いようで短かい期間でした。返りみますと最初の一ケ年は福岡園芸試験場で，日本の同年輩の人達と一緒に，果樹の講義実習を受け，柑橘栽培で必要な肥培管理・薬剤・除草剤・剪定・接木などの勉強をし，また個人農家への視察旅行にも参加した。日本の農業はブラジルの農業経営と違って，小面積での多肥・多くの農薬を使い，多収穫で良質の農産物でなければ販売において価格差があるという条件の中で，今日の日本の農業経営の難しさなど考えさせられることばかりでした。にもかかわらず「豊作貧乏」という言葉につくされる矛盾を感じました。

試験場での勉強において，第一に，私のいるブラジル東北部と気候・雨量などの条件が全然違います。したがって剪定管理の違いなどはありますが，接木・除草剤・病虫害の薬剤などにおいてはブラジルにも適応するし，これだけでも研修に来て良かったと思います。

残りの半年はブラジルの農業に必要な農業機械について大きな農機具店で勉強しました。

大農機械から小農機具まで多種の分解・組立・塗装・熔接の個人指導を受けました。自分でも多少の修理が出来るようになってから，個人農家の農業機械修理点検にも毎日の様に行きましたが，びっくりすることばかりでした。

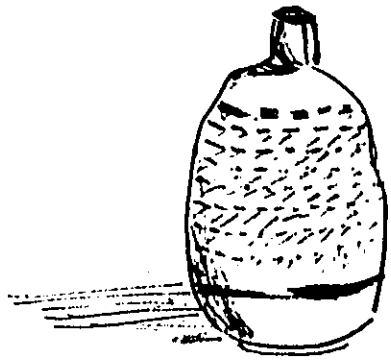
なぜなら小面積の農家でも農業機械を持っており，一年間の内で一週間も使用しない百万円以上もする機械を使って，果たして経営がなりたつのだろうかと思う。農業機械は経営規模に応じた農業機械を購入すべきではなかろうか。又は共同購入でもして個人農家の負担を少くしていかない限り，これから先の日本の農家の経営，そして大きくは日本の農業はいきづまるのではなかろうか。

いや私はこの研修の期間に日本の進んだ技術を学ぶと同時に，日本の農業問題の難しさを通じ，自分の経営上の反省にするつもりだ。

以上感じたままの一部を書いてみたが，最後に国際協力事業団の方々始め関係当局者の皆々様方の暖かいご指導，ご協力で少しは大人になれたようにも感じ，本当

に有難とうございました。

長い様で短かかった一年半のこの研修は，私の一生の思い出として，又ブラジルでの農業経営に役立て頑張っていく覚悟です。



「1カ年半の研修を終えて」

ブラジル国・バイヤ州クビチェック移住地
神田　晃

1973年11月30日第4回移住者子弟研修生の募集があった。かねてより私は果樹について研修してみたいと思っておりましたので，良い機会だと早速申し込みましたところ，幸いに合格し，4月1日ブラジルを出発，3日羽田空港着，初めて東京に第一歩を踏みました。ブラジルと違って東京の空はどんより曇り太陽は見えず，これがスモッグというんだろうと驚きました。都内見学で，道路は人と車の波で大変混雑しており，これが日本の東京かと思いました。

4月10日福岡県果樹試験場に入所し，翌日より福岡県下の青年と試験場での研修に入りました。

その他県内研修では篤農家・農協の果樹選果場などにて研修し，8月には留学生などと共に県外研修として，日本の近代工場，或いは観光地，農業試験場，篤農家の見学を神奈川県内で行なうほか，静岡県まで足を延ばし，みかん園，茶畑或いは石垣いちご等ブラジルでは考えられないような山岳地農業の様子を見，日本の農家の方々の偉大な努力の結果に感心したものです。しかも農産物は見事に実っており素晴しい出来様でした。

観光ではやはり富士山の風景が印象的でした。

また別の機会に長野県果樹試験場をも訪ね，果樹の改良の状況を見学，ブラジルでは経験しなかった果樹の品種改良に対する大きな関心が湧き，帰国してからの営農について新たな興味と目的に向って研究を続けてみたい気持が大きくふくらんだことは，言い方をかえてみれば，知らない恐ろしさをつくづく考えさせられる思いでした。帰国したらぜひ果樹を研究してみたいと思います。

名古屋・大阪などを見物し，日本の都市の発展の素晴しさも強く印象に残るものです。ただ私が福岡県果樹試験場に居る頃，カメラの盗難に合い，ついに帰国まで発見出来なかったことは大きなショックでした。

福岡にての一ケ年の研修を終り，後の6ケ月は長崎県大村に移ることになり，昭和50年4月7日より私の出身地の長崎県大村果樹試験場に入りました。

大村試験場においては，私の一番希望している果樹の接木・剪定・さし木・農薬散布について，ひわを主力に勉強しました。帰国したら必ず必要な大切な技術です

ので，特に力も入りました。

また実習の合い間には，各篤農家を回り，経営上からのびわ栽培についても研修しました。長崎ではまた佐世保の青少年達といろいろな機会に語り合うことの出きましたことも大変勉強になりました。

それぱかりでなく昭和５０年７月全国農村青少年技術交換大会に参加し，同じ農業に生きる青年と語り，諸先生方の講習を受けたことは，自分にとって大いに勇気づけられる良い機会でした。佐渡ケ島の金山，新潟市内見学，また整然と完備され近代機械設備を使用する広々とした農業地帯を見学することも出来ました。

最後に，このように自分の眼を大きく開かせることの出来たこの一ケ年半の研修の間，お世話して頂きました国際協力事業団の方々，試験場の諸先生，農家の皆様に心より厚く御礼申し上げます。

私も帰国後はおよばずながら地域社会の発展のために，増々研究，努力致します。本当に有難とうございました。

「研修中に得たもの」

ブラジル国・リオグランデドスール州
イタチ移住地　宮崎信輔

月日の経つのは早いもので今月（９月）の３０日で１８ケ月間の研修生活を終ろうとしています。今，一年半の研修生活を振り返ってみると，楽しかったこと，また辛かったことがつい先日のことのように思われます。

昨年の４月に２０名の研修生の一人として，期待と不安とが入り混った気持で来日した私です。私はこの歳になって始めて両親の元を離れて，見知らぬ人達の中での生活をやってみて，つくづく親の有難さが身にしみました。

試験場では団体生活の楽しさ又難しさを知り，農家での実習生活では農家の人達の親切さ又素朴さを身近に感じると同時に，人に雇われる者でなく使う者にならなければと強く思いました。それとこの一年半の研修中に，短気だった私もどんな辛いことや口惜しいことにも立腹せぬようになり，どんなことにも耐えていく自身が出来ました。

来日してからの研修先は私の出身地である熊本県果樹試験場で，柑橘類の栽培管理を主たる研修目的とし，約１年３ケ月間の研修生活を送りました。この試験場は建設されてからまだ日が浅く，場内に植付けてあるミカンの木も三年生樹位で，まだ結果期に入っていません。私の考えとしては開花から収穫までを当試験場で学びとるつもりでしたけど，残念ながら幼木でしたので，これは果たせませんでした。

また試験場は柑橘を主体に落葉果樹も栽培しています。

試験場内には各研究部門があり，私は最初の３ケ月間を病理及び害虫を調査している病虫部で研修を受けることにしました。なお午前中は毎日講義になっています。

ところでこの病虫部では黒点病，ソウカ病，カイヨウ病（ミカンの三大病気）また害虫マノネカイザラムシ及びミカンハダニ等の発生予察調査を行ないました。
この発生予察とは，病害虫の発生様相は年や場所によってかなり変動し，この病害虫の発生を早期に発見したり，あらかじめその発生時期や発生程度を知ろうとすることです。この発生予察で病害虫の発生状況を知り，それによって適期に無駄のない防除を実施することができます。

またヘリコプターによるミカン園の空中薬剤散布も見学しましたが，とうてい私達移住地での実用化は無理なようです。金銭的なこともありますが，それ以上に近所に伯人が馬や牛などを放牧していますので。

その他天敵の種類と実用化などを学んだ後，常緑果樹部で研修を受けることにしました。

常緑果樹部では年々不足している労働力の対応策としての除草剤と摘果剤の利用について学びました。

除草剤には接触剤，土壌処理剤，移行剤，ホルモン剤等があり，ほとんどの農家ではグラモキリン（接触剤）とハイバーメ（土壌処理剤）の混合で散布します。これにより一般の草と種子は枯死することになります。

また摘果剤は現在実用化しつつありますが，この摘果剤は微量で効果を表わし，又温度の高低で落果したりしなかったり，またひどい時には落葉さえ起こしますので，使用する場合はよほど考えて使用しなければなりません。日本での摘果剤利用は現在のところ温州みかんだけで，雑柑類つまりネーブル，ポンカン，甘夏などには効果が余りないようです。

日本での雑柑類は実を成らせることに一生懸命で，摘果剤などを使用していません。しかしブラジルとなると雑柑類が主体となり，結実も良くするので，ぜひ雑柑類に効果のある摘果剤の必要性が望まれます。特に栽培面積の広いブラジルでは今後省力化するため，除草剤及摘果剤の利用を大いにやっていかねばならないと思います。

次いで化学部では，時期的にミカンの収穫時であったことから，毎日が果実の分析で明けくれました。一番高い糖度はネーブルオレンジで１３～１４度近くもあり，さすがミカンの王様という気がします。

この化学部の先生方はとっても理解のある方々で，私が必要とする資料を沢山集めて下さり，又剪定等管理技術の方法も教えて頂きました。

その他ミカンの施肥法で，年間のチッソ肥料の必要量とか，またチッソとリン酸およびカリの配合の割合は１０：７：７が一般的であるなど，今まで理解していなかったことが植物生理上からも理解できるようになった。

育種部では接木と剪定，それに果実物析などいろいろのことを学びました。

接木にも切接，根接，芽接，高接木更新などがあります。この高接木更新とは，長年月育ててきたミカンが結果期に入り品種系統が悪いため，生産品質が劣る樹や結果量の少ない樹がある場合，このような樹をそのままにしておけば経済的に不利になるため，早めに優良な品種系統に接ぎ直す必要があります。

そのために高接木法を利用し，新しい苗を植え変える必要もなく，中間台の樹勢が強ければ１年で元に戻す効果のあるものです。現に自分の目で見て驚きました。

しかしこの高接ぎにも中間台と接ぎ穂との不親和性を生じることがありますので

注意が必要です。

一つ例を書きますと，ネーブルが中間台の場合，接ぎ穂が早生温州だと成績不良です。しかし普通温州とネーブルそれにトロビタ種は成績良好です。

私も帰伯後自分の園内を見て，品種系統の悪いものはこの高接き更新法を使用してみる計画です。

試験場での研修修了後，6月から日本でミカンの銘柄産地として知られている河内町白浜の西山氏園にて実習を積むことにしました。

この西山ミカン園は6ha近くあり，園内にはスプリンクラーを設置していて，多目的利用をやっています。薬剤散布もスプリンクラーでするので，4haの園も1時間余りで終り，また園内には草一本もなく，西山氏曰く「草を見ずして草を取る」そうです。その上園内には各段毎に農道を設けて収穫時の持ち運びはすごく簡単にでき，無駄な時間を費やさないようにしています。

そして毎日のように佐賀，長崎，静岡，和歌山，愛媛県から視察団が絶えません。それにこの西山氏は日本に来ている韓国人と共同で，韓国の済州島に1年の内2～3回位技術指導に行っています。

現在日本のミカン栽培は生産過剰から暴落の一途をたどっていますが，ここ白浜地区は後継者として長男は勿論のこと次男までもミカン栽培に従事しています。れはそれだけ一般的な生産調整の中でも，この地域のミカン作りに魅力をもっているからでしょう。

私はこの西山園に参りまして試験場とは別にまた貴重なものを学びました。簡単に西山氏の栽培法を述べますと

① 最初土作りに専念したそうで開墾の際の山草下草の大量鋤込み

② 植付時の措置（ヘドロ，きゆう肥，石灰等の投入）

③ そして優良苗（自家苗）の厳選と植付け

④ 幼木育成期間の周到な管理

⑤ そして実質的な結実を4年目からにしたそうです

また西山氏は栽培管理上のポイントをつかむのがすごく上手で，私によく無駄なことはするなと教えてくれました。

1年半の研修を終ってみて，自分としては，試験場より農家での研修が，より農業者として生きた技術を修得出来たように思います。

西山氏がよく言いますが，「ミカンを作るよりもミカンを作る人を作れ，それから土作りをしろ」というふうに土台からしっかりしていかなければだめだということを教えられました。このことは私達も知らないことはありませんが，今までを振

り返ってみると，やはり先走りをして土台がしっかりできていなかったように思います。

帰伯したならば西山園を手本として，イタチ移住地を州のミカンの特産地とする意気込みで頑張りますが，立地条件などの違いから修得した技術をすぐに生かすことは出来ないかもしれませんが，いかに応用するか私達研修生の課題となりましょう。特に果樹は永年作物ゆえ，あせらず一歩一歩階段を登るつもりでやっていきたいと思います。

この研修制度により得た貴重な体験は，技術修得上以外にも人間関係を深くする面でも又良い機会でありました。帰伯後も試験場の先生方とできる限りの文通をとおし，資料などを送って頂く計画です。

最後になりましたが今回の研修期間中に結婚することができ，事業団の皆様のお力添えで一緒に帰ることが出来ましたことは何と御礼をいってよいかわかりません。1年と6ケ月未熟な私達を親切にご指導下さって，本当に有難とうございました。

「国柄によるブドウ栽培」

アルゼンチン国・メンドサ州 アンデス移住地
米　　慎　也

日本にブドウ栽培の技術を学びに来てから1年6ケ月が経ちました。

この間，種々技術を勉強し，或いはいろいろな方からたくさんのことを聞いたり，又見学視察によつて見たりし，大いに参考になりました。

私は初めの1ケ年は山梨県果樹試験場で研修し，後の6ケ月は山梨県の農家で実習をしながら勉強してきました。これらのことは自分にとってはほとんどが新しいものでした。

しかし，これをすぐにアルゼンチンに帰って活かせるかになると少々無理だと思います。それは同じブドウ栽培であっても，気候・土壌・市場目的によって栽培品種が異なるためです。

しかしながらブドウ栽培する場合の管理上の点，経営上の点など大いに参考となるものがありました。

日本のブドウ栽培は少面積で如何に収量を多く，良い品質のブドウを生産させるかに最大の努力をしています。これには種々の高度な技術が使われています。品種によってそれにあった剪定と枝の誘引，摘心，単位当りの収穫予想に基づき計算された摘房，房作り，笠かけと一つ一つが計算づくの栽培管理が行なわれています。これは一つには，日本の農家の土地所有面積が狭く，その上条件も最適でないための必然性とも思いました。

私の住んでいるアルゼンチン国メンドサのブドウ栽培は一農家で10～20ha栽培していますが，雨量が少くかん水栽培であるし，市場としてはほとんどがワイン醸造に向けられますので，栽培管理は日本に比べて簡単です。

これはメンドサの場合，ブドウ栽培の最適気候であることと，かん水が必要となり，栽培管理作業の3分の1以上がかん水作業にとられてしまうからです。このためブドウの品質は日本のように良質ではありません。日本の場合はほとんどが生食用であるため，品質には農家も一番気を配りますが，メンドサではワイン用のため，余り気にせずにすむわけです。

このように気候・土壌・市場が大きく異なった日本で学んだ技術をどのようにアルゼンチンで生かすかについて考えてみると，今これといって自信のある答は出来そうにありません。

しかしブドウの仕立方，主枝の誘引，剪定について学んだ技術をためしてみたいと思います。これが成功した段階で他の技術を更に勉強しながら生かしていきたいと思います。勿論この場合は，生食用として市場に出すための試みですが，メンドサのブドウはワイン用ですから，すべてに適用することは難しいことでしょう。

とにかく日本の研修で感じたことは，日本はブドウ栽培のしにくい国であるにもかかわらず，この悪条件の中で，あらゆる努力と研究を重ねて，山梨でも立派なブドウが生産されていることに驚きました。

山梨のブドウ栽培に比べれば，メンドサでの栽培は楽であるし，それだけにもっと栽培管理と経営の合理化に努力する必要があると思いました。

私は日本の技術もそうですが，日本の試験場の方々や農家の皆さんのたゆまぬ前進への努力の姿を見，そしてそれらの方々から勉強することが出来たことが一番の研修成果であったと思います。

山梨県果樹試験場の先生方はじめ，いろいろとお世話下さった多くの方々，本当に有難とうございました。

「農林省果樹試験場興津支場での研修を終えて」

アルゼンチン国・ミシオネス州
ガルアペー移住地　植　松　吉　巻

１９７４年,桜もまだ咲き始めたばかりのまだ肌寒い風が吹いていた４月から１８ヶ月間，深みゆく秋の気配を感じさせる今日まで長い様で短かかった技術研修。

午前７時３０分起床，８時４５分点呼，次に各班ごとにそれぞれの実習に分れる。１２時より１時までの昼食時間を除いて５時まで続く。火・木曜日の講義，内容は違っても繰り返しの続いた毎日・毎週。農林省果樹試験場興津支場に於て過ごして来た研修期間にももう終止符がうたれました。

そうだ！今はもう研修も終って再び第二の故郷ともいうべきアルゼンチン国へ帰らなければいけないのだ。

今までやってきた研修成果はどうだろうか？反省はしてみるものの果して地域社会発展にどの程度まで貢献することが出来るだろうか？

１０月２５日と決った私の帰国日までは本当にもう指折り数える程の日数となってしまいました。

これまで見たり聞いたりした数多くの出来事，視察或いは研修旅行。北は東北・北海道，南は九州地方まで，地元静岡県内は南部・中部・東部と三回に渡る産業視察。果樹試験場の研修生と最後に行った９月の信州方面への研修旅行，その外数々の思い出を残すことが出来ました。

限りなく自分の意志と情熱を燃やし，青春を過ごした日本。このことは一生の思い出となって消えぬだろう。又ここで身につけたものはすぐに役立たなくても，何時かはきっと芽を出し実を成らせるものだと信じています。

柑橘とは永年作物であるばかりでなく１年を１周期とする作物でありますが，１年間の生態をミシオネスとは気候・風土も異なった日本で見てみました。

苗木の移植，接木，育種交雑，土壌消毒，花数葉数調査，ダニ調査，施肥，薬散，除草，摘果，果　分析，成熟生理試験，導入品種調査，剪定，貯蔵及び腐敗果点検などとおよそ柑橘栽培に必要と思われるこれらの一般作業を，５０名の研修生と共に１年間を育種研究室においてやってきました。

１９７５年２度目の春を迎えた４月，私達と同じように母国へ地球の裏側からはるばる燃えるような熱意を持って来日した若人，第５回生を出迎えました。

そして私は育種研究室から病害研究室へと移り，研修目的である病害について研

修日までいろいろと教えて頂きました。

普通病害という場合には病気と障害の二つを意味するものではなく，これは虫害と一対になった言葉だとも云われ，理論的になってしまいますが病気による被害という意味に使われているようです。

しかし植物が病気にかかるには先ず病原がなければならず，さらに植物の方では病気にかかりやすい性質を持ち，病気の起こりやすい環境条件であった場合初めてその力を表わします。このように植物にはある病気をいくらくっつけても絶対につかないものと，反対にかかりやすい性質に区別することが出来ます。これらの性質のことを耐病性，罹病性と呼んでいます。

現在問題になっている柑橘ウイルス病の検定法の一つにこの性質を利用したものがあります。

例えば現在世界中で知られている柑橘ウイルス病には fristeza（ＣＴＶ），Exocortis, Xyloporosis など，さらにマイコプラズマ病も含めると２０数種のものがあると云われていますが，中でも先にあげたＣＴＶは最近日本の柑橘栽培でも問題になってきたようです。それというのも温州の生産過剰によるその対応策のうちの一つの方法として，オレンジやその他の晩柑橘類に品種更新することがあります。しかし温州ミカンの場合は，ＣＴＶを保毒していてもほとんど病徴を示しませんが，もしビールスを保毒している樹に罹病性であるオレンジや晩柑類を高接して更新すれば，被害がでるものとされています。

そこで保毒していても全く病徴を示さないような場合は，メキシカンライムやグレープフルーツのような罹病樹に接木接種してみます。このことを接木検定と呼びます。これは一つの例ですが，柑橘だけでなく他の植物にもいろいろな方法がとられているようです。

病害研究室ではこのようなＣＴＶの接木検定法，緑枝を切り取り全体を剝皮してピッテイングの発生状況を調査する方法，そして温州ミカンだけに見られる温州萎縮病（ Satsuma dwarf ）に対する汁液接種によるゴマ検定などをやってきました。

今振り返ってみるとビールスを保毒しているか否かを検定することばかりでしたが，これらのビールスに対してもいろいろな対策が考えられていることがわかりました。無病母樹の育成保存，弱毒系統の利用などがそれです。

しかし前者の方法はＣＴＶが分布していて媒介昆虫であるミカンクロアブラムシ（ Toxoptera citricidus ）の生息している地帯ではまったく無意味に近いものです。

又後者は強毒・弱毒系統との間の交叉免疫といわれる現象を利用した対策法です

が，試験場ならともかく一般農家がやる場合どうだろうかという疑問があります。すなわち試験・研究の面でもまだまだ多くの問題が残されていて，明確な対策はまだないということでした。

又，研修期間中にはこれらの柑橘ウイルス病以外にもCanker（Xantomohas－citri）Melauose（Diaporthe－citri）Citrusscab（Elsihoe fawcetti）のような細菌や菌類による病気の薬剤試験というように，様々な試験研究についても心暖まる教えを受けました。しかし技術や知識をもっと自分のものとするためには，まだ1年も2年も勉強を続けていかなければならないと思いました。

最後にこの18ケ月間，自分の計画或いは目的を果すことができましたのは，皆様のご好意とご協力があったからだと思います。国際協力事業団の皆様や，私を受け入れていただきました農林省果樹試験場の皆様方に心から厚く御礼申し上げます。本当に有難とうございました。

「農協研修に学ぶ」

パラグァイ国・アマンバイ県 ペドロファン
カバリエロ　　原本　　功

何かしらホッとした感じだ。長かったような短かかったような1年半の研修期間が終ったかと思うと…。しかしホッとする一方では早くも帰国後のことが頭の中で交錯している。そんな心境である。

研修先であった高知県大方町農業協同組合での農協経営，これが私の研修課題であった。

今1ケ年半を振り返ってみて本当に経営というものを勉強したかどうか疑問である。ただ一つはっきりしていることは，1ケ年半農協で直接組合員に接しながらの毎日であったということである。（何時も経営ということが頭の中にあった毎日であった。）農協では試算表，精算表，決算，部門別損益，経営分析等技術的なことを主体に学んだ。

その他…ヒューマン・リレーションズ等。いやこう言うといかにも経営学的に聞えるが，そんな学問的なことでなく，組合長，専務の職員への接し方，また組合員へ。そして課長から職員へ，職員と組合員，これらを目の当たりに見てきた。こうしたことが私の研修課題にもっとも役に立ちそうに思える。

少し自分の研修方法を反省してみたいと思う。

私は1ケ年半の研修期間全てを実習で終った。農協での実習といえば大抵雑役かもしくは一つの単純な仕事の反復の様であるが，私は多分な配慮のおかげでそれぞれの部署に配属され（総務管理課－経理を含む－に約10ケ月いた），余り農協現場自体の手伝いをせず，教えてもらいながら独自に試算表，決算，法人税申告書までもやらせてもらった。

独自にこんなにまでやらせてくれる農協なんて他にはないと思う。本当に組合長，専務をはじめ職員の方々には大変お世話になり深く感謝している次第である。実習の良さは即，実戦に使える者が育つといったところだと思う。しかし実習だけでは専門であるはずの簿記すら，ある程度しか修得できず，検定試験の合格は無理であることがわかった。（といってもこれは私だけかも知れないが）マクレガーのX理論　Y理論のX理論のように，人間楽な方へ楽な方へと行きたがるように思う。だから自分のように意志が若干弱いと，強制とはいかないまでも，どうしてもやらなければいけない環境におかれる必要がある。だからある一定の期間は講習所とか学

校へ行った方が良いように思う。（私の場合，実習から帰って一人でやっていて，難しいのにぶつかるとサジを投げ出したくなった。）

今さら要望でもないかもしれないが，1年半の研修中で気になったことを書いてみる。

一つに国民健康保険である。これの掛金は乏しい給料から出してもたいしたことではないが，問題は病気になった場合の自己負担の3割である。医者に行く時懐と相談しなくてはならないのは考える必要があると思う。

もう一つ残念だと思ったことは研修先引上げの件である。預けられる時は支部のひとが一緒に来てくれたが，引上げの時は『×月×日に本部に於て修了式があるので必ず出席されたい』との通知だけで，引上げについては何も言ってこない。だが旅費は片道だけだ。ということはそのまま帰国せねばならないってことなのに，預け放しのような何ともすっきりしない引上げであった。（もっとも後で研修先にお礼をしてくれるものと思うが。）

なにはともあれ日本で学んだことが移住地発展のために少しでも役立てば幸いです。微力ながらコロニア発展のために頑張りたいと思います。

最後にまたとないであろうこうした機会を与えて下さった事業団その他関係機関の皆様に心より御礼申し上げます。

「技術研修を終えて」

パラグァイ国・イタプア県フラム移住地
渡　辺　保　夫

柿も色ずいて初秋を感じさせる季節になりましたが，こうしてペンを執ると，18ヶ月の研修を修了するんだと，ヒシヒシと身体に感じてきます。同時に体験した数々の想い出が脳裏に浮んできます。

幼い頃両親に連られて移住し早18年の月日が去りました。母国日本とはどんな国だろう？関心と期待感を持っており，日本の雑誌…ラジオのニュース等より得た知識である程度想像しておりましたが，自分の眼で確かめた日本は別の印象を受けました。

私が子弟研修生に推せんされた時，農協経理と農業機械を重点に勉強していきたいと簡単に考えました。しかし来日して良く検討してみますと，農業機械は精密な小型なものはありますが，大型機械は耕地の関係上取り入れられていないように思いました。雄大な広地を持つ南米の農業経営規模には役に立たないようだったので，断念し，農業協同組合の組織，経営合理化及び事務能率化などを重点に学ぼうと決心した。

しかし農業協同組合で使われる農業簿記は商業簿記・工業簿記・銀行簿記よりも複雑で難しいことが，広島県農業協同組合研修センターで農協簿記・計算実務・算盤・農業経営学・協同組合論・農協法制・法学概論・経済学・経営学・流通学・指導事業論・経営分析・税務会計・会計学等多科目を学ぶことによって解ってきました。信用・購売・開発・加工・運送・共済・指導等部門別に仕訳て合理的に経営処置され，他の簿記では見られない特徴でもある。

農業協同組合とは農民のための組織であって，硝子張りの経営が必要であり，経済的弱者が目的を同じくし，且つ資本的結合体としての組織を結成し，組合員の相互扶助による独立自助，自主的協同活動を行なうものであり，農協の役員達が野望をもって内部的に良く運営しようと努力しても不可能なことである。

組合員個々の経済安定と幸福を願い，経営者である役員・農業者である組合員・縁の下の力持ちである職員等の協同経営によってこそ，はじめて農協が発展・繁栄して農業者との和が保てることを強く感じた。

農協経営者の最大の任務は経営の本質を知り，経営の原則を身につけ，経営活動を社会的に流動的に結合させた経営者がプロの経営者として存在し，組織の先見力，

洞察力を身に付けなければならない。

現在的農協職員は他企業にひけをとらぬ経営手腕を発揮し，他企業以上の技能を身につけ，組合員からの日常業務の他に税務・法律などの相談にも充分応答し，信頼される職員に成長しなければならない。

農協研修センターで6ケ月間の中堅職員研修を終えて，広島市高陽町小河原・小笠原農協へ実習に入った。

実習内容は普通貯金より諸経費への振替，貸付金利息の計上，各科目の月末残高書抜確認，経営分析表の集計，電話の応対，雑用等いろいろと体験しながら，パラグァイの農協で応用出来るかを研究する。途中で再三錯覚を起こし，思い通り作業が進まないこともあったが，精神誠意一生懸命頑張った。積極的に行動し，自ら目的遂行のため，事務的な研修はともかく，農協組織運動に伴なう共同的関係構想機構を考えながら，基礎を作り，判断力・行動力を身につける努力をしました。

パラグァイ国の農協では，農民のための農協という観点から，農協組織の改善・事務能率のスピード化，そして正確性と迅速性を主体に取り入れて，応用していきたいと思います。

自分の将来のすべてを農村と農業に託して生涯の生活の場と考え，自分の決断に責任を持ち，納得できる生き方を求めて，一歩一歩確実に前進していきたいと思います。現在は世界をあげて農業の重要性が再確認され，食糧を安定的に供給するために今後の農村青少年の役割は大きい。未来を築く大きな原動力と期待される若者……。

私達の希望は生きている限り果てしなく広がり，よりその高さを求めるものですが，その終局の願いはより住みやすい地域社会の建設と安定した生活の実現にあるのではないかと思い，新しい可能性を求めて新天地へ復帰致します。

農村文化の創造・建設のために，移住地の多くの人の持つ固有の天分・能力と私達の日本での研修成果を基礎として，技術能力を発揮することにより，豊かな移住地を実現したいと思います。

最後に，未熟な私達に人間の創造力に必要な貴重な体験をさせて下さいました事業団の方々，現場職員の方々，その他関係者の皆様方に心より厚く御礼申し上げると共に，今後共ご指導，ご声援して下さる様お願い致します。長い研修期間中でご指導して頂き本当に有難とうございました。

「一カ年半を振返る」

パラグァイ国・アスンシオン市
堤　田　元　克

私は昭和３０年に家族皆とパラグァイ国へ移住した後，母国については話や本でしか知らない国となった。その母国にいつになったら訪れることが出来るだろうと考えながらいたものです。その夢は国際協力事業団の技術研修生として実現することができたのです。

ブドウ栽培の技術研修を目的とした私は，昭和４９年４月１日にパラグァイ国を出発し，３６時間の空の旅の後，日本の土地を１９年振りに踏みました。

羽田国際空港に着いたのは３日の午後６時，もう薄暗くなった空にさまざまなネオンサインが点滅していました。すぐに横浜の移住センターに移動し旅の疲れをとるため休みましたが，時差のため夜になると眼の覚める数日でした。

東京の国際協力事業団本部へ挨拶に行った時の電車の中は人で満員，また車外の風景はスモッグですっきりしない空，箱を重ねたような小さなアパートや家並，よくこんな所に住めるなとさすが狭い日本だとの実感が湧いてきました。

公園などで桜のつぼみが開き始めるのが見えましたが，私の目から見ると，この美しい花で公害などを隠そうとしているかのような感じがしました。

東京の駅や街には多くの人々が皆駆足で駅に，ビルに出入りしていますが，その様子はパラグァイののんびりした生活に育った私にはなじめないだけでなく，なぜこんなにも急いで歩かなければならないのだろうかと多少あきれた思いすらする。私の研修目的はブドウ栽培で研修先は日本でブドウの産地として有名な山梨県であった。４月８日より１年間は山梨県果樹試験場で勉強することになり，８日午後試験場に着き，場長はじめこれからお世話になる営農科の先生方，山梨県庁に挨拶に行った。

試験場ではブドウ栽培のため種々の試験・研究がなされており，組織は庶務科・営農科・育種科・病虫害科・化学科に分かれています。

翌朝８時半に通学して各科に挨拶し，場内のブドウ園や桃園を案内して頂き，これからの１年間の研修が始まった。以下各科での研修を選べると

<u>営農科</u>

ブドウと桃についての栽培管理方法の研究（基本剪定，果実管理，収穫，販売など）

育種科

ブドウの育種と新品種を作って良いものを捜す。その他ブドウの加工（ワインブドウ液，ジャムなど）

病虫害科

果樹の病虫害に対する農薬による防除，農薬の扱い方

化学科

土壌分析，肥料の施用法，木や水に含まれる養分の分析

私は毎日8時半に通学し，9時から10時までは講義を受け，その後ブドウ園での実習をしていました。

営農科の担当のブドウ園にはハウス栽培，露地栽培（山地を含む）があり，ハウスでの栽培品種は主にデラウェア，巨峰，イタリア，リザマートがあり，露地では甲州，ベリーA，デラウェア，巨峰，ピオネであった。

私は主として山地栽培を勉強したが，これにはデラウェア，ベリーA，甲州，ネオマスカット種のブドウの他に，スモモ，黄桃，リンゴもありました。

また露地ではトレンチ栽培やポットでの試験を経験しました。

研修は4月に始まったので，丁度ブドウが萌芽期に入ったところで，実習は結果母枝の誘引，芽かき，新梢の誘引などの他各品種毎の栽培管理方法でありました。

デラウェア

摘房作業は房数を葉面積や収量目的に合わせて制限するため，副房を切落し，房を出きるだけ棚の下におろし，次の作業であるジベレリン処理が行ないやすいようにする。

ジベレリン処理は二回行なう。一回目は種を抜くため二回目は果粒肥大のためである。この処理は決った日があり，一回目は開花前14日位，二回目は一回目の処理後20日前後でジベレリンの濃度は100 ppm である。

ベリーAとネオマスカットには共通点があり，まず摘房，房切り（これは房についている副房を落し，横に長いようなのは房の形を整えるため切りつめます。）また房の全長は15から17段で抑え，果粒が適当に大きくなったら間引を行なう。

甲　州

この品種は山梨県では古くから栽培されているものである。これも房切は副房だけでよいと云われています。

各種の適果が終るとそれぞれに傘かけ作業を行い，それ以降はもう収穫を待つだけである。

収穫後，元肥として肥料を施すがこれも品種によって異なることを知った。

落葉期に入った後には，１２月から２月にかけて剪定を行なった。この作業も品種によって強目或いは弱目に剪定しますが，剪定の基本的理論は同じである。これらの管理の他に，トレンチ栽培試験といって，種々の品種のブドウがどの程度の乾燥までの栽培に耐えることが出来るかの試験，またポットの試験といって，ポットに砂を入れ根の張り具合を調べることも経験した。

スモモでは摘果剤の試験（エスレル），果粒肥大調査，酸度・糖度調査の試験実習もおこなった。

このように当初は長く感じた１ケ年も短かく感じるほど，これまでの自分に積み上げのなかった経験をすることができました。

日本での栽培管理方法は私にとって大変多くの学ぶべきところがあった。しかし学んだすべての技術がパラグァイにおいて直接使えるかどうかは疑問であると思う。この点がこれからの課題となる。

昭和５０年３月３１日１年間の研修が終り，４月からの後半の研修は熊本県で受けることになった。この半年間は農家で実習する目的で，熊本県果樹試験場から照会して頂いた。下益城郡松橋町の河野博敏様の家で実習した。この農家実習ではブドウ栽培管理のほか，農家の経営のあり方から人間としての社会的立場での個人の生き方，子供の教育，家族生活などを共同生活の中から学ぶことができた。

河野さんのブドウ栽培は巨峰が１町，ベリーＡが３反の経営であった。

農家に入って感じたことは，試験場に比べ手間を少くし，良質のものを多く生産することに目的をもって栽培していることでした。

試験場の場合は良いものを作ることに力を入れ，このためには手間・経費を余り考えないような気がしましたが，農家では生活がかかっているので，経営としての栽培管理に対する努力を強く感じ，私には試験場とは別な面で，多く学ぶものがあった。

実習作業の内容はやはり４月の萌芽から芽かき，新梢の誘引，房切，間引，ジベレリン処理，袋掛け，収穫と選別，及び出荷方法など河野さんの親切な指導のもとに，順調に勉強することが出きました。

そのほか試験場ではやれなかった薬剤散布も実際に体験することが出き，栽培管理における病虫害防除の必要性と方法および扱い方の実習は良い勉強となった。

このようにして半年間の農家での実習も終り，とうとう日本での１ケ年半の研修生活も最後になった。初めは長いように感じた短かい１ケ年半であった。

これからはパラグァイに帰って，この研修で学んだことを現地の土壌・気候の中

で生かし，大いに自分の経営に，そして出来るだけ多くの人に教えてあげられるものは教えてあげ，頑張るつもりです。

「日本での技術研修を終えて」

ボリビア国・サンタクルス州
オキナワ移住地　幸地哲雄

農家実務を研修の目的とし来日して早くも1年半の日々が過ぎ，私達第4回子弟技術研修生も日本を離れ，各自出身地へ帰国することになりました。

この研修期間を通じて多くのことを学ぶことが出来心強く思っております。

初めの1ケ年は福岡県農業協同組合講習所において，主として農業協同組合組織について学びました。

後半大阪兼松江商支社において貿易関係を学び，それぞれの分野で研修を受けてきましたが，果たしてどの程度学び得たのか，またいかにこの研修の成果を発揮出来るかは，今後私に与えられた課題であり，帰国後も勉強を続けなければならないと思います。

初めの1年間の福岡農協講習所においての講義は25科目におよび，その主なものは農業経営・農業経済・経営学・経済学・経営分析・農協簿記・会計学・農協法購買事業・販売事業・共済事業・信用事業・計算実務・心理学・農村社会学等を学び，特に組合論を学ぶことによって，協同組合の思想又組織体について学ぶことができ，協同組合の先駆者ともいわれるイギリスのロッチデールの協同組合思想について知識を深めることができました。

彼らが協同組合を組織した理由としての協同体の力によって貧しさから解放し，資本主義社会に対する抵抗力とし組織されたその必然性について，根本的に理解することが出来ました。

後半の6ケ月間は兼松江商大阪支社において貿易関係を学び，主として流通機構マーケッティング・リサーチ・綿花の検品等の実務を学び得ることができました。世界的食糧需給関係の不均衡による危機が予測される今日にとって，農業こそ将来性のある職業と信じている私にとり，農業者の助け役ともいうべき組織体である農業協同組合の果たす役割は，今後増々重大なものになることと考え，この1ケ年半の研修に今後更に勉強を続け，ボリビア・オキナワ移住地農協の発展のため頑張りたいと思います。

1年半の研修期間を振り返ってみますと，いろいろなことが思い浮んできます。農協講習所での研修，研修旅行，及び大阪での実務研修などは，私にとっていずれも有意義で，貴重な研修でありました。

最後に今後共ぜひこの制度を継続して下さる様お願いすると共に，国際協力事業団，福岡県農業協同組合農協講習所，大阪兼松江商支社，又関係者の方々に心から感謝を申し上げます。

「研修成果を活かし相互親善に貢献！」

ボリビア国・サンクルス州 サンファン移住地
藤 井 恒 正

昨年の4月，美しい桜の咲く，懐かしい日本へ11年振りに足を踏み入れてから，めまぐるしく変化する日本の情勢の中で私は今，長いようで短かかった1年半の研修を終えようとしている。

大きな期待と希望それに，かすかな不安とを胸に秘めながら羽田空港に降りたった日が，なんとなく時の経過とともに懐かしく思い出されてならない。あの時の感激というのは，口では言い現わせることのできない程"魚が水を得た"時のそれよりも，はるかに大きな喜びがあったように思われる。それは，我々のように外地に長く暮らした者にしか解らないでしょう。

外地に住んでいて今日の日本の変貌振りや成長，発展振りは，雑誌，新聞，その他でそれとなく知ってはいましたが，実際に自分の目で見て，それがはっきりわかり11年前とは比較できないほどで，ただ，ただおどろくばかりでした。

それから，1ケ年半なにかアッと言う間に過ぎ去った様な気がしてならない。その過ぎ去りし日々を回想してみると，毎日毎日の生活が私にとって勉強そのものであったし，11ケ年という日本不在の空白を埋めるのに一生懸命であったように思われる。

しかし，この18ケ月間中研修先の内外で多くの人に接し種々の貴重なお話しができ，又人間関係への重要性をしったことは，この上ない収穫であったし，私の今後の人生において大変プラスになることと確信しております。

さて，私の研修は農協の経理・経営一般に関する事務で日本農協の今日までの歴史的発展と実際活動を知る事でした。それには，組合員と農協のつながり，職員の業務管理，農協のもつ本来の姿など種々でした。

研修最初の1年は福岡県立農協講習所で学んだ。ここは，県下農業協同組合の幹部職員養成所で，1ケ年に約50人程を養成して各単協の人的，質的向上に努めている。

1年間で25，6教科科目を講義すると云うハードなスケージュールで講師の先生達も大学や専門分野の方々でその講義内容は基礎的ではありますが大変むずかしく充実した内容のものでした。

久々に味わった学生気分，試験の時などは殆とんど就寝時間2，3時間くらいで，今までにない精神的疲労を感じたものでした。おかげで苦労した甲斐があり成績も

上位で卒業することができました。しかし，ここでの1ヶ年の勉強は成績に関係なく大変意義深いものでした。今まで無知であった世の中の事柄，社会の仕組，それに私がこれから実践していく協同組合運動など，この講義を通じて識ることができたことは，かけがえのない資産だと思っています。

ただ，欲を言うなら1年間という時間が短かかったことでしょう。又講習所在学中，夏冬の休暇を利用して農協実習に行き，表面的なものでしたが農協の実務を知ることができました。

実習を通じて最初に驚いたことは，農協の近代的な建物や諸設備，そして文明の力を効率的に利用し合理化され，ムラ・ムダ・ムリをなくし農協運営の健全化をはかっていたことでした。

事業についても，農協のもつ総合性を有機的に関連づけ組合員の生活安定や経済的，社会的地位の向上に努力しているようだった。

一つの残念だったことは，日本農業の実態を把握することができなかったことである。農家に住み込み農家の人々と生活し農作業を共にして，農業を肌に体験することができなかったことである。

今日の農家生活は，その生活水準も向上しているとはいえ，農業経営そのものでは，経済的にも安定した生活を営むことはできず，多くは兼業による農外収入に頼っているのが日本農業の現状のようである。

みのり多き1年であったが，3月27日講習所を卒業した。残り6ヶ月の研修期間は講習所において習った事を実践することと，日本農業協同組合中央経営監査部で研修することにした。

ここでは，各単協が行なっている商行為的事業性質はなく県下農協の経営指導，監督監査が主な事務であった。ここでの研修で多くの農協関係者に会うことができ，農協精神や協同組合運動方法を，もっと掘り下げて知ることができ，尚一層農協運動に意欲が湧いてきました。

又，この協同組合運動というものが，いかに難しい運動目標であるか改めて知ることができました。

農業協同組合というものを理解する上には，経済学・社会学・心理学・倫理学・経営学・農業技術等専門的知識が要求され，これらを共同研究することによって，運動が存続されていくのではないかと思われる。

日本で得た多くの知識を帰国後は，多くの人と分ちあい，組合員の生活安定，農業生産の安定向上と農協発展に努めたい。

しかし，18ヶ月というものがこんなに早く過ぎ去るのかと思うと，あれもこ

れもやって覚えればよかったと，まだまだやりたいことが多く残されていて，満たされない気持ちでならない。

私達，南米各国から同期として２０名の研修生が志を同じして，それぞれの目的は違うにしても日本で一時期を共に生活し，共に語り，遊び，お互いの友情をたしかめあい，助け合うことが出来たことは金では買えないかけがいのない宝でありましょう。

私も日本に来てあらためて友情の美しさを知らされました。これが一時的なものでないようにしたいものです。

研修生の皆さんは，帰国されれば日本で研修された技術を実践されることともに忙しい毎日の仕事が待っていることと思いますが，“同期の桜”を忘れることなく横の連絡をとりあいながら励げましあって，自己の経済発展，地域社会の発展やその国の発展にも寄与し，強ては南米と日本の親善に貢献しましょう。

最後にこうした研修の機会を与えて下さった国際協力事業団，終始親身にお世話下さった福岡支部の皆様を始め，各研修先の皆様には心から感謝申し上げます。

「日本での技術研修を終えて」

ボリビア国・サンタクルス州
オキナワ移住地　平良賢次

私は，今年の7月に開会された沖縄海洋博会場の前方に，静かに横たわる伊江島にて，研修の最終日を迎えることができた。

長期間のように思えた研修の日も，研修機関先での受講，実習等にまぎれ気にとめてはなかったが，その経過の早さを感じたのは最近のことである。

過去1年半の研修期間をふりかえってみると，多くの思い出が浮んでくる。1年間の農協講習所での生活，ここでは目的を同じとする若者たちと農業協同組合を知識として学び行動を共にしたこと，さらに半年間，故郷沖縄の伊江村農協にて，実際の体験をつうじて，農協運営の仕組等について学び得たことはかけがえのない貴重な研修であった。

去年の4月，日本の地を踏んだとき以来，見ること，聞くことが長年閉されていた母国意識をよみがえし“百聞は一見にしかず”ということを深く感じた。研修期間中，余暇を利用して各地の名所，旧跡を訪ね見聞を広めることもできた。また研修機関の内外で親しく語り合える多くの人々と知り会えたことも大きな収穫であった。

以前私は，身近にある協同組合をただ安易に受けとめていた。協同組合といえば農協だけを頭に浮べそれが協同組合の一種一部門にすぎないということを理解していなかった。農民が生活の向上と農業生産の拡大を自分たちの手で協同していくための組織である。という観念からすべて農業，農民，農村と農の側からばかり考えていた。しかし，協同組合を知識として学んでいくことによって多くのことを知ることができた。また農協活動と深いつながりのある農家経済のしくみについても大づかみであるが理解を深めることができた。

協同組合と私達の関係を考えてみると，意外に多くのところでつながりがあることに気がつく。農村では生産者の協同組合として農業協同組合があり，農業生産に関するほとんどのことを事業として営んでいる。また都市においても消費者の協同組合として，勤労者や大学生によって生活協同組合が組織され，消費物資の供給や住宅供給などの事業を行なっている。都市の中小生産者による事業協同組合や信用組合なども協同組合の一種である。広く世界に目を向けても，資本主義国，社会主義国，あるいは発展途上国のいずれを問わず協同組合が組織され，人々の生活や生

産に重要な役割を果している。それぞれの国で，生産者の組合が発展しているところと，消費者の組合の活動が著しいところなどの違いはあるが，いずれの協同組合も，組合員一人一人の自発的活動を基礎にして運営され組合員の生活向上につとめている。

このように，いろいろな種類の協同組合があるが，生産者の協同組合は，勤労者の生協にくらべて，運営も複雑であるが，いろいろな種類の協同組合に共通する基準として協同組合原則が定められている。協同組合をその行う事業によって大きく分けると，流通組合，加工組合，生産組合とに分けられる。流通組合は，財貨を生産者または消費者の手元までとどけることを担当するもので，信用，販売，購買などの組合がこれに属する。加工組合は，組合員の購買や販売を目的として財貨を加工する組合のことである。現在の農協や生協は，そのほとんどが流通組合で，その一部が加工組合である。流通組合も加工組合も，ともに組合は組合員の生産や生活の一部を手助けすることを目的としている。

また組合の資金のよりどころが出資によっているかどうかで出資組合と非出資組合とに分けられる。出資組合は組合員が出資金を出し合い，これを基本として事業を行ない，組合の経費は，その経済活動の結果生れた収益から支払われる。非出資組合では，経費は組合員からの賦課金によってまかなわれている。経済活動はおこなわず，経費は組合員からの賦課金により，その見返りとして，組合員への指導活動が行なわれているだけである。また組合が損失を出したり，組合の債務を返さなければならない場合，組合員がどの程度の責任を負うかによって，有限責任組合，無限責任組合，保証責任組合の三つに分けられる。

現代社会を支配しているは，大企業だといわれている。それはほとんどすべて株式会社という形式をとつている。協同組合は，その歴史からみれば，資本主義の発達の過程で，経済的に弱い立場にあつた労働者，農民，小商工業者が，富の分配が公正に行なわれる新しい社会を建設することを目的に，自ら協同の事業活動を営むために組織したものである。したがって，構成員が自ら必要な資金を出し合って協同の事業を営んでいる。そのため協同組合では，組合という事業の所有者と，事業を利用するものは同一の人間である。株式会社のばあい，株の所有者はその持分によって，より高い配当を受けることが目的であって，その会社の製品を使ったり，施設を利用したりすることが目的ではない。だから株式会社は，できるだけ利益をあげて株主に配当する。つまり利潤追求が本来の目的となる。ところが協同組合は，出資に対する配当を目的にした組織でなく，協同活動そのものが目的であるから，活動の結果生れた剰余は，組合員の共有財産であり，つぎの新しい協同活動の元手

となる。したがって資本に対する利子を制限することは協同組合原則の一つとなっている。剰余は協同組合の本旨にそった再投資にふりむけるために，その相当部分を保留するとともに，組合員の利用高に応じて配当することがもう一つの原則となっている。そうしてなによりも民主的な運営をしていくことが協同組合の目的を実現するためにはどうしても必要であり，株式会社とは本質的に違った性格を持っているのである。このような組織上，事業上の目的のちがいから，協同組合はその運営にあたって，農協にも生協にも最少限共通した原則があり協同組合原則がそれである。会社企業との違いも，この原則によって，さらにはつきりしたものになる。

今日の協同組合原則は，国際協同組合同盟が，１９６６年にウィーンで開かれた第２３回大会で採択されたもので，それは資本主義，社会主義を問わず，すべての国々の人々の共通した結論であった。その原則は，つぎの６項目からなっている。

１．組合への加入脱退の自由（自由加入の原則）この原則は，組合へ入ることも脱退することも自由だということである。組合の事業を利用したいために，組合へ加入したい人に対しては，政治的，宗教的な立場がちがうからといって，これをこばまないし，また強制的にやめさせられることもないのである。協同組合は事業を利用したい人々に広く門戸をあけているわけである。

２．組合の民主的管理（民主的運営の原則）組合の役員を選挙したり，事業方針をきめたりするにあたって，組合員はだれでも，１人１票の議決権をもっており，出資金の大きさや，男女の別によって左右されないものである。企業にあっては，株の高によって，議決はちがうが，協同組合にあっては，組合員がみな平等の権利によって，組合を民主的に運営しなければならないという考えから，この原則が採用されている。

３．出資配当に対する制限（出資配当制限の原則）協同組合では，剰余金は事業の利用高に配当するのが本筋であり，出資に対する配当は一定限度に制限するという原則である。組合の組織上，目的上の本質からいって，この原則によらない場合，本質的には協同組合ではないということができる。

４．剰余金は組合員に帰属（剰余金処分方法の原則）組合は，営利を目的とせず事業の利用によって組合員の生産や生活を高めることに目的があるわけであり，組合が事業をした結果，剰余がでたとしても，それは組合員が組合事業を利用したことによって生れたのであるから，剰余金は組合事業の利用高に比例して割戻しをするという考え方である。組合は営利を目的としていないのだから，剰余金は出さないようにすべきだ，剰余金を出すくらいなら，例えば購買品をもっと安く供給すべきだという見方もある。協同組都も経済の変動の波のなかで事業しているのであり，

はじめから，剰余金を出さないように経営をやっていくことはできない。下手をすると，欠損を出さないともかぎらない。それよりも，ある程度剰余金を出すように余裕をもった経営を行ない剰余金はあとで事業利用高に応じて配当すればよいわけである。また，協同組合も経営を行なっているわけであるから，資本の充実は何よりも必要であり，組合員に配当されたものを出資にふりかえて，資本を大きくしていくことも心掛けなければならないことである。

5．教育のための準備金の積立（教育活動促進の原則）すべての協同組合は，その組合員，役員，職員に対して，協同の原則と手法についての，経済的および民主的教育をするための準備金を用意しなければならない。つまり，組合発展のカギは，その組織である組合員自身にかかっているわけであるから，組合員の知識を高め，協同心を高める教育や，また組合の事業を実際にとりはこんでいく役職員の教育が重視され，そのための準備金を用意すべきだというわけである。

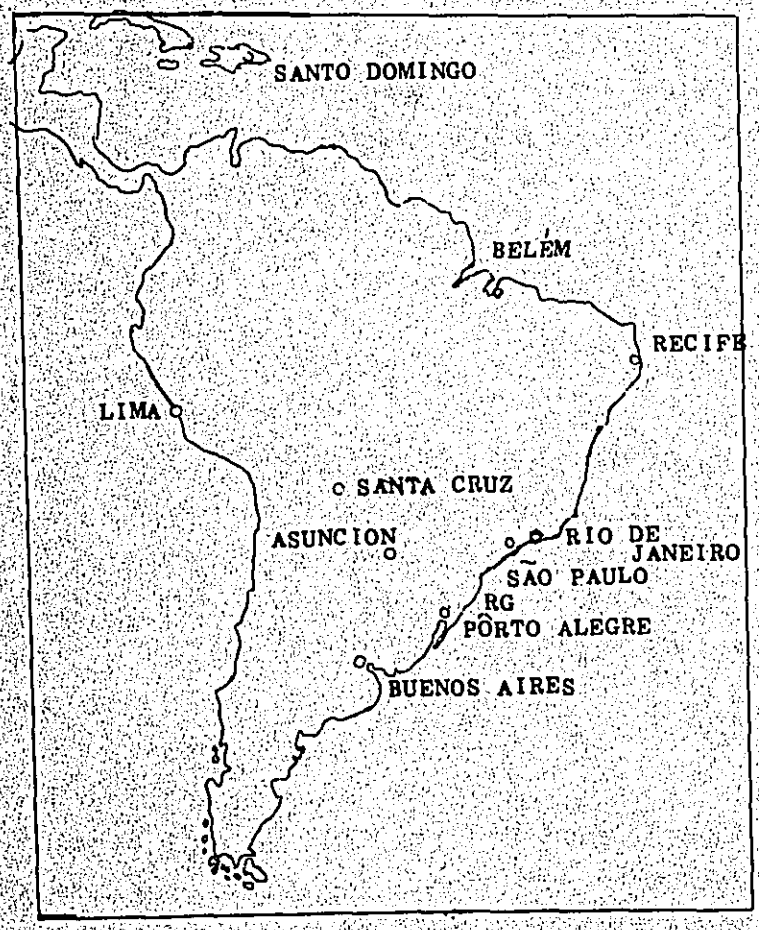
6．協同組合相互間の協同の原則。すべての協同組合組織は，その組合員ならびにその共同体の利益に，もっともよく奉仕するために，地方的，全国的ならびに国際的の各段階において，あらゆる可能な方法で，他の協同組合と積極的に協同すべきで，協同組合は単位組合のみでは，よくその目的を達成することができない。よりひろく，協同組合相互間の協同をつよくし，連合組織を発展させ，他種協同組合との協同をはかり，国際的にも協同をはわるべきであるというのがこの原則の意味するものである。

これまで研修の経過および研修対象である協同組合のことについて概略してまとめてみたが，いままで習得できた協同組合運動の一端を帰国後さらに理解を深めることにつとめ，明るい豊かな暮しをめざす移住地の農協に従事し，協同組合運動の標語「一人は万人のために，万人は一人のために」手をにぎろうと呼びかけ合いたい。

日本での技術研修を終えるにあたり，貴重な研修の機会を与えて下さった国際協力事業団および福岡県農業講習所，伊江村農業協同組合の関係者の方々の温い御指導に心から感謝申し上げます。

先輩からの便り

帰国後の実践活動



「日本での技術研修を終えて」

ドミニカ国・ラベーガー州・ハラバコア
福　永　正　彦

私の1年半にわたる日本での研修の体験を発表します。日本に昭和49年4月3日に着いて，一週間ほど横浜の移住センターでの研修を終えて佐賀に向いました。

佐賀に着くと，国際協力事業団のお世話で佐賀県農業研修学園に入所出来るようになりました。学園に着いた時には，なんとなくなじめず，淋しい毎日でした。でも1ケ月位いで，沢山の友達も出来ました。本学園では，作物科，花卉科，そ菜と色々とありました。その中の作物科を，私は選びました。ここ佐賀県では苗盤整備，機械導入，薬剤の研究等大変進んだ技術水準をもって，将来の米生産の基地をめざして，水稲栽培の方法が検討されています。本学園入学間もなくして，私はまだ学園でも2年前から取りくんだばかりと言う，歴史の浅い乾田直播栽培に取りくみました。ロータリーシーダー機利用による耕うん播種作業の効果と除草剤の効果的使い方を学ぶべく取り組みました。

水田区画長方形70a（100m×70m）の土地に，次のように経過をたどりました。栽培経過と主な作業内容・品種はツクシバレ，肥料は10aにN 15.8kg，P 9.6kg，K 13.4kg 入れました。

結果として6月から9月までの間に草丈と茎数を計り，生育状況を調べ次表のような結果が得られました。

生育初期は天候不良の為，茎も軟弱で，丈も伸びすぎの傾向でしたが，その後順調に良い生育ぶりを見ました。

収量については苗立本数150本数え，生育も順調だったため，10a当り精玄米564kgの収量を上げる事ができました。しかし，周囲の水田の収量と比べるとまだ60kg以上も少く，まだまだ努力をはらわなければと思われます。ロータリーシーダー機はクボタ26PS5条シーダーの幅1.5メートルを使用し，作業時間は10アール当り枕地を含んで性能から約1～1.5時間ですむと言う事でしたが，操作不慣れの為に2時間かかりました。

5kgの播種量で80％出芽し，発芽苗立は良好でした。今までの人力にたよっていた時代に比べ，耕うん，播種，鎮圧をすべて一行程の中ですましてしまう為，ひじょうに小人数で，しかも短時間ですましてしまう為，ひじょうにはかどります。又シーダー機利用による問題点として　念した発芽苗立も，ひじょうに良好で10

日間で約８０％近く発芽しており，播種量も１０アール当り５kgで充分と思われる成果をあげました。除草のやり方は県の基準では播種直後と入水期の２回となっていましたが，これまでの記録と本水田が前年雑草が多かったことを考え，３回行ないました。しかし，これでも雑草の発生が，いくらかみられ，手取り作業をしなければなりませんでしたが，これは水田の均平に問題があり除草剤のそのものの効果は高かったと思います。

ただ農薬代の高くつくのには驚きました。このレポートは私の日記から選んで書きました。日本での技術研修を終えて１年半を振り返って見ると，農業技術だけでなく農民根性，研修心への心掛けのほか，色々なことに本当に役立ち，意義のある研修だったと感じました。

この研修制度はこれからもどんどん継続して頂きたいと思います。

最後に，この一年半の研修の間，何の不自由も無く楽しく研修生活を過す事が出来た事に対して，国際協力事業団はじめ，学園の先生，関係者の皆様に心からお礼申し上げます。この事はいつまでも私の胸に残ることでしょう。

「帰国後の私」

ブラジル国・サンパウロ州・グァタパラ移住地
第1回生　　脇山昭治

リベロン・プレット郡のグァタパラ移住地，傾斜のなだらかな青々と美しい桑園の中を州道より5分，移住地の南端の低地（稲）を一望に見わたせる地点に僕の家（養鶏場）はあります。現在，成鶏2万8千羽育成鶏8千羽を家族5人使用人7人で飼育しています。現在ブラジルの養鶏も他の先進諸外国の歩みと同様に，その形式も大型化し企業的養鶏へと変わりつつあります。施設の機械化は勿論，飼育羽数はどんどん増大の一路をたどり大規模の養鶏場が各地に続々と出現し，更に計画中のものも多くあります。

昔の養鶏は終日を鶏糞にまみれて身体を粉にして働いた技術と労力を本位とした養鶏でした。それが頭の働きと回転によって儲ける「経営的能力を多分に必要とする養鶏に変わりつつある」のが今日のブラジル養鶏のあり方です。

僕は日本に行く前までは，養鶏経営の事についてほとんどと云っていい程知らなかった。

日本に研修に行き養鶏経営の基礎から専門的なことまで研修し，今ブラジルで養鶏経営にたずさわっている。

日本研修のどんな事が自分に役立ったか，そしてブラジルでどんな事に生かし，又これからの方針他について書いてみる。

今はまだ十分に生かしているとは云えないが，飼育面においては育雛時の飼養管理・強制換羽・鶏の衛生・制限給餌を徹底的に実行している。鶏舎設備や機械化の面では，自動給餌器が3台入っているだけで，ほかは全部自分達の手で給餌している。

機械化と云っても飼料を作る機械だけで他に機械化しているところはない。日本の研修でどんなことが役立ったかについては，養鶏経営やその他の基礎を覚えたこと。何をやるにも基礎が一番大切だと思う。

養鶏の場合の例をあげると，鶏舎設計をする場合，1.舎内環境を良くする。2.経済的でなければならない。3.労働効率を大にする。4.鶏の安全性を確保する。その他，又日本で研修したことに対し常に責任を感じ，研究心を持つ様になり，自分自身人間的にわづかではあるが成長しているように思う。

これからの方針については，今年中には総羽数5万羽に鶏を増す計画である。又，給餌に一番重労働がかかるので鶏舎に1つ1つ自動給餌器を取付け，重労働をなくし労働効率を大にする様にしていきたい。

これからの計画として，前にグアタパラ養鶏青年部というのがあったが，今，自然解滅になっているので，この養鶏青年グループを今年度中に僕が先頭に立って再建しなければならないと思っている。

最後に，この研修制度を今後も南米に住む多くの若者達の為に末長く続けていただく事を強く希望いたします。

僕自身もこれからもっともっと日本での研修成果がブラジルであがる様勉強していきたいと思っています。

「帰国後の私」

ドミニカ共和国・ベラピア県バニー地区
第2回生　　藤川　　求

1年半の日本での研修を終えて，10月というのに真夏の様な中米の陽光を浴びたドミニカ空港に降りたったのは，ほんのきのうの様な気がする。それからもう1年，第2回移住者子弟技術研修生として不安を抱いて，出発したことが懐しく感じられる近頃である。

研修帰国後は，焦せる気持ちをおさえて1ケ月ぐらい首都サントドミンゴを始め，方々の整備工場の見学を行ない，研修を終えた目で当国の実情調査を兼ね，自分を活せるところを求めた毎日だった。

結局のところは，出発前働いていた現地人経営の整備工場に落ち着いた。その工場は，日本の自動車をはじめ農機具，発電機（小型）を販売，修理する会社である。

社主が直接自宅まで来ての熱心な勧誘と自分にとっては多種にわたる仕事内容の為に，他の部分の経験が積める利点があってここに決めた。そのことは自分で独立経営するための基礎になるからとも判断したわけである。

その様な工場の性格や自分の希望とから，仕事内容は自動車を中心にトラックター，発電機などのエンジン部門はもちろん，シャーシ，ボディーその他アタチメント全てに及ぶ広範囲なものである。

ここでは，日本での研修の過程で多くの経験を積んだことと，その間に培われた基本的な技術が大きく物を言っている。

例えば，整備の依頼を受けると決って部品の1部交換を必要とするか，それに近い状態のものが多い。そんなとき，都合よく間に合うことの方が珍らしい仕事場の環境である。というのはボルト1本から座金1枚まで輸入に頼っている国柄だからである。常に，自分の欲しい物に代わる物を探さねばならない。このことは，簡単な様だが経験と基本的な技術とがなければ解決できない1つの側面である。

中古品や代用品のない場合は，自分で作る仕事がある。そうなると整備工でなく機械工に早変わりしてしまはねばならない。

日本の様に豊富な部品に囲まれ，機械に恵まれた環境をうらやましく思うことがあるが，それを考えたときは自分の負けであると自分に言いきかせる。「何んとかしょう。」「何んとかしてあげよう。」という気力と研修に結果得た自信とが支えとなっている，といっても過言ではない。

そして，もう1つ「ムーチャスグラシャス」とお客から握手されたその力強い感触とが支えになっている。

この3ケ月にチェーン店から技術指導を依頼されてふたりの技能工の面倒を各1ケ月みた。

当地の技能者は経験はあるが，仕組みなどの基本的な理論を持たないので，勝手に当り散らし不必要な部分も分解して役に立たない様にする。言いかえれば，よくするのでなく壊すのである。それを指摘すると，自分の我を通して聞き入れる耳を持たない。又，言われたこと以外には手を出さない　一気が利かない一　その様だから応用力は欠け，技術指導しても積極さがなく，こちらの方がいらいらする。自分も日本へ着いた当時，こうだったかもしれないが，1年半の研修で日本人の生活を経験し，知ったからこんなことが言えるのかもしれない。

冬の寒さの中のそうじ，マラソン，夏の運動場での朝会，草とりなどを疑ったときもあったが今にして思えば，これは精神の充実に十分役立ったと確信するのである。

この様な仕事面の毎日とともに，昨年度から発足したドミニカ日本青年文化会の一員として，日系社会の地位の向上に努力している。

ドミニカ日本青年会は，9月1日から国際協力事業団から当国唯一の自治体と認められた。

私達青年は，自分達のこともそうだが，後輩の指導もしなければならない責任をも負っている。

これからの私は，まず自分の毎日を仕事の上で充実し，数年後には自立の経営をと，考えている。その為にも修業が現在で，毎日毎日を大切にしょうと思っている。そしてより多くの現地人から，日系社会から信頼され，その上でそれらの人々に多くのお返えしをしたいと思っている。

「日本での想い出を胸にいだきながら」

ブラジル国・パラ州 サンタレン
第3回生　　千　葉　京　子

毎年，国際協力事業団が行っている移住者子弟技術研修に，昭和48年度の第3回生として参加させていただきました。

昭和48年4月4日，雨の朝，私は両親，兄弟，サンタレンの方達に見送られ，サンタレンの飛行場を飛立ちました。それは私にとつて，その日から新しい生活へのスタートでありました。

私にとって，日本は故郷です。しかし幼い時，両親につれられて，ブラジルへ移住したわけですので，日本は初めての国のようでした。日本に足を踏み入れてから，見るものすべてが驚くことばかりでした。

最初の研修は，宮城県立上沼農校実習部に於いて，日本語や日常生活について勉強をし，後期には，清水市にある清水市農業協同組合の加工部技術課研究室にて果汁の加工について勉強をしました。又同じ農協内の総務部経理課では，コンピュータのプログラム・パンチャーについて学びました。この1年半の研修期間もあっと云う間に過ぎ去ってしまい，想い出の数々が脳裏にやきついています。

一生涯の想い出として東宮御所に於いて，皇太子殿下・美智子妃殿下とのご接見であり，この日の感激は深く胸に刻みこまれています。

研修旅行にも各地へおもむき，日本の四季，伝統，情緒にふれることができ，想い出の1ページを飾ってくれました。

そんな中で私は日本語で一番美しい言葉「ありがとう」を教えられました。「ありがとう」は美しく，やさしく，心よく響かせる言葉です。

この1年半の月日，思いきり研修が出来たのも，事業団本部の皆様方始め，ベレン支部，マナウス支所，仙台支部，横浜支部，静岡駐在員の皆様のおかげです。心からお礼申し上げるとともに，この1年半の日本でお研修をいかして，いつまでも心豊かな人間でありたいと思っております。ありがとうございました。

子弟研修生一覧表

移住者子弟技術研修生の会会則

第１回（昭和４６年度）移住者子弟技術研修生一覧表

国名	（推せん支部）	氏名	生年月日 年令	学歴（日本） 現地	本籍地または父親出身地	研修機関	研修内容
ドミニカ	（サントドミンゴ） コンスタンサ	村田　千秋	昭和 23. 3. 14 ２３才	（小３中退） 中　卒	鹿児島県 川内市	鹿児島県 農村センター 高等部園芸科	そ菜培，午前中講義受講，午後除草，消毒，出荷等実習。研修旅行（ヤンマー長浜研習所で３日間農業用エンジン分解・組立実習，長野県営伝中央農場，京都タキイ種苗見学）。
ブラジル	（ベレン） 第２トメアス	武藤　義博	17. 4. 7 ２９才	（小　卒） 中　卒	福島県 会津若松市	福島県立 農業短期大学 協同組合科	農業経済，農業簿記，農協原論，農協経営論，農業法規，農業機械等講義受講。 研修旅行（静岡県三ケ日農協他２ケ所）。県内湯野農協等で実習。
	（レシーフェ） クピチェック	岡本　耕次	25. 6. 14 ２１才	（小４中退） 高　卒	愛媛県 東宇和郡 城内町	愛媛県 果樹試験場南 予分場	講義～落葉果樹，病虫害防除，土壌肥料，柑橘長培等。 実習～夏柑採果，除草，薬剤散布，落果調査等。 落葉果樹研修。
	（リオデジャネイロ） フンシャール	池田　秀広	27. 7. 5 １９才	（なし）２世 中　卒	広島県 深安郡市村	広島県立　西条 農業高等学校 広島県　食品工 業試験場	果物の成分検査，イチゴジャム，ママレードの加工実習，トラクター運転実習，工場見学（三島食品）7/26～8/31 県食品工業試験場で研修（農産物加工製造技術および同分析法の課程終了）
	（サンパウロ） グァタパラ	脇山　昭治	25. 10. 28 ２０才	（小６中退） 工業学校SENAI (職業訓練コース)卒	佐賀県 唐津市	佐賀県 養鶏試験場	養鶏経営（衛生，繁殖，育種等）を中心とした講義受講。解体，飼料配合等の実習。全販連佐賀種鶏場における新開発，育雛舎，病理解体等の場外実習。
	（サンパウロ） ビニャール	山田　豊	23. 10. 6 ２２才	（中　卒） 小２修了	福井県 武生市	福井県 農業後継者センター 本科畜産専攻	乳牛飼育について午前中講義，午後実習。5/24から１ケ月間農家実習（乳牛） 7/19～24　第２回全国農村青少年研修交換大会（於　八ケ岳）に参加。
ボリビア	（サンタクルス） サンファン	仁田原　豊	23. 9. 4 ２３才	（小３中退） 高１中退	福岡県 八女郡黒木町	福岡県 種鶏場	衛生面を主体に育雛管理，防疫，解剖等の実習，飼料，設備，交配等専門的分野の講義受講。９月より２ケ月間民間養鶏場で実習（飼育管理の実際，販売流通システム等）。
パラグアイ	（アスンシオン） エンカルナシオン	安田　孝	12. 4. 3 ３４才	（大２中退） な　し	秋田県 仙北郡 協和村	秋田県立 金足農業高等 学校 農協専攻科	農協法，農業経済，簿記等講義受講。7/23～29 県経済連で各支部実習。 金浦農協等県内農協で実習。8/10～13　埼玉県川口市内で農業研修。
アルゼンチン	（ブエノスアイレス） ブエノスアイレス州 クァルテル・クァルト・モレノ	榎本　一郎	27. 3. 26 １９才	（なし）２才 渡航時 中　卒	和歌山県 田辺市	和歌山県 農業大学校 園芸科 花卉部門	農業経営，果樹，作物，畜産，農業機械等講義受講。 サルビア，マリーゴールド，ペゴニア等の育苗，定植その他の花卉実習。

第２回（昭和４７年度）移住者子弟研修生一覧表

移先住国	地区	氏名	生年月日（年令）	渡航年月日	学歴（日本）現地	本籍地または父親出身地	研修機関	主な研修内容
ブラジル	オオ・デ・ジャネイロ市 パブカイヤ地区	横山　覚	S. 29. 5. 16 (18)	2世	(－) 中卒	(父)福島	福島県立 小高農業高等学校	そ菜・園芸・農学一般
	サン・パウロ州 ジャカレイ移住地	山上とし子	26. 1. 26 (21)	S.40. 8	(中3中退) 中1中退	愛媛	堺市 養鶏農業協同組合	畜産(ブロイラ養鶏)
	サン・パウロ州 桜植民地	佐藤　良洋	25. 5. 26 (22)	38. 1	(中1中退) (－)	北海道	神奈川県立 農業大学校別科	花卉・果樹
	アマゾナス州 マナウス市	石沢　力雄	22. 8. 9 (25)	29. 4	(－) 商高卒	山形	座王ハム有限会社	畜産加工(ハム・ソーセージ)
	ペルナンブーコ州 リオ・ボニート入植地	森村　正隆	17. 10. 11 (29)	31. 7	(中2中退)	群馬	群馬県畜産試験場	そ菜・畜産
	サンタ・カリーナ州 ラーモス移住地	日浦　秀雄	20. 10. 19 (26)	37.10	(中退)	北海道	長野県園芸試験場	果樹(リンゴ)
パグラアイ	イタプア県 フラム移住地	久岡　寛	16. 6. 19 (31)	33. 7	(高一修了) 小4修了	高知	群馬県立 農業大学校蚕業学校	養蚕
ボリビア	サンタ・クルース県オキナワ 第3移住地	久高　将行	24. 8. 3 (24)	36.	(小6中退) 高卒	沖縄	三井物産㈱大阪支店 原錦糸織物部綿花課	① 綿花事情 ② 綿花格付士資格取得（アメリカ）
ドミニカ	ベラピア県 バニー地区	藤川　求	22. 12. 13 (23)	32.10	(小4中退) 高2在中	愛媛	雇用促進事業団 愛媛総合高等職業訓練校	農業機械修理

第3回移住者子弟技術研修生一覧表

国名	地区名	氏名	年令	性別	渡航月日	渡航時年令	本籍地	研修科目	研修先	
ブラジル国	ノボ・フリブルゴ	野口忠義	24	男	昭和32年 3月	8才	北海道	花卉	神奈川県立農業大学校 （篤農家） 大沢春吉	（48.4～49.3） （49. 4～49. 9.）
同上	ガタバラ	設楽新作	23	男	〃 38年 7月	13〃	茨城	養蚕	群馬県蚕業試験場	（48. 4～49. 9.）
同上	日光	佐々木哲朗	23	男	〃 34年 2月	8〃	愛媛	養蚕	同上	
同上	ノボ・ムンド	大塚寛	22	男	〃 32年 8月	6〃	徳島	農協 〃 貿易	徳島県農協中堅職員養成所 徳島県石井町農業協同組合 大洋漁業㈱ 貿易第2部	（48. 4～48. 7.） （48. 8～48.11.） （48.12～49. 9.）
同上	第2トメアスー	西田清	21	男	〃 41年 2月	14〃	宮崎	農業機械	農林省農業技術研修館 茨城イセキ販売 ㈱ほか	（48. 4～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
同上	サンタレン	千葉京子	23	女	〃 29年12月	5〃	宮城	農産加工	宮城県立上沼農校実習部 清水市農業協同組合	（48. 4～48.11.） （48.12～49. 3.）
同上	クビチエック	東春好	20	男	〃 35年 3月	7〃	長崎	花卉	長崎県総合農林センター 長崎県大村果樹試験場	（48. 4～48. 9.） （48.10～49. 9.）
同上	イボチ	三輪新太郎	22	男	〃 29年11月	3〃	静岡	果樹	山梨県果樹試験場 （篤農家） 内田金之助	（48. 4～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
パラグアイ国	アルト・パラナ	永井儀昭	28	男	〃 36年 4月	16〃	愛媛	畜産	農林省十勝種畜牧場 群馬県畜産試験場	（48. 4～48.11.） （48.12～49. 9.）
同上	イグアス	渡辺準一	20	男	〃 42年 6月	14〃	福岡	畜産	農林省十勝種畜牧場 埼玉種畜牧場	（48. 4～48.11.） （48.12～49. 9.）
同上	アマンバイ	岡本儀彦	25	男	〃 33年 8月	10〃	兵庫	農協	兵庫専修職業訓練校 兵庫県姫路農業協同組合	（48. 4～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
アルゼンチン国	ガルアペー	小野達朗	24	男	〃 36年 4月	12〃	宮崎	果樹	宮崎県立農業大学 長崎県大村果樹試験場 農林省園芸試験場，興津支場	（48. 4～48.10.） （48.11～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
ボリビア国	オキナワ第1	根間玄真	25	男	〃 29年 7月	6〃	沖縄	農協 貿易	宮崎県立農協講習所 兼松江商 ㈱	（48. 4～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
同上	サンフアン	長谷研詞	22	男	〃 30年 5月	4〃	長崎	農業機械	農林省農業技術研修館 イセキ・カワサキサービス販売㈱	（48. 4～49. 3.） （49. 4～49. 9.）
ドミニカ国	ビセンテ・ノーブレ	鈴木雅	23	男	〃 33年 5月	9〃	愛知	果樹	愛知県農業総合試験場	（48. 4～49. 9.）

第4回移住者子弟技術研修生一覧表

国名	地区名	氏名	生年月日（年令）	性別	渡航月日	本籍地	研修科目	研修機関
ブラジル国	イタグアイ	岡崎ソニア・マリア	S.22.10. 7(28才)	女	2世	高知	花卉	(株)赤塚植物園（49.4～50.3） 東山園芸株式会社（50.4～50.9）
同上	グアタパラ	渡辺一寛	S.23. 4.23(27才)	男	S.39.4	山形	養鶏 柑橘	茨城県養鶏試験場（49.4～50.3） 農林省果樹試験場興津支場（50.4～50.9）
同上	日光	中村弘	S.21. 6.10(29才)	男	S.32.6	三重	養蚕	群馬県蚕業試験場（49.4～50.9）
同上	ビニヤール	深沢岩夫	S.25. 3. 7(23才)	男	S.39.	静岡	果樹	山梨県果樹試験場（49.4～50.3） 長野県園芸試験場（50.4～50.9）
同上	パルゼア・アレグレ	西山立美	S.28. 8.14(22才)	男	S.34.5	山口	農産加工	山口県経済農業協同組合連合会山口加工場（　　） 福岡県園芸試験場豊前分場（　　）
同上	モンテ・アレグレ	高谷和夫	S.22. 9.23(28才) 2	男	S.30.	長崎	牧畜	福岡県種畜場（49.4～50.3） 熊本県畜産開発公社西原公共育成牧場（50.4～50.5） 群馬県浅間家畜育成牧場（50.6～50.7） 農林省十勝種畜牧場　（50.8～50.9）
同上	マナウス	出田洋次	S.24. 5. 5(26才)	男	S.37.1	熊本	自動車整備	熊本県専修職業訓練校（49.4～50.3） ホンダSF九州熊本南工場（50.4～50.9）
同上	アカラ	細越卓美	S.27. 6. 8(23才)	男	S.31.	山形	自動車整備	東京都江戸川高等職業訓練校（49.4～50.3） 東京トヨタディゼル株式会社（50.4～50.9）
同上	クビチェック	竹並明弘	S.28. 1. 4(23才)	男	S.28.7	福岡	柑橘 農業機械	福岡県園芸試験場（49.4～50.3） 田中農業機械工場（50.4～50.9）
同上	クビチェック	神田晃	S.30. 6.27(20才)	男	S.35.2	長崎	柑橘	福岡県園芸試験場（49.4～50.3） 長崎県果樹試験場（50.4～50.9）
同上	イタチ	宮崎信輔	S.21. 1. 1(30才)	男	S.35.6	熊本	果樹 柑橘	熊本県果樹試験場（49.4～50.9）
パラグアイ国	フラム	渡辺保夫	S.25. 7. 1(25才)	男	S.34.4	広島	農協 〃	広島県農業協同組合研修センター（49.4～50.3） 小河原農業協同組合（50.4～50.9）
同上	アマンバイ	原本功	S.22. 7.31(28才)	男	S.33.3	高知	農協	高知県大方農業協同組合（49.4～50.9）
同上	アスンシオン	堤田元克	S.26. 2. 6(25才)	男	S.30.	熊本	果樹	山梨県果樹試験場（49.4～50.3） 農家　河野博敏（50.3～50.9）
アルゼンチン国	アンデス	米槙也	S.27. 9.13(23才) 3	男	S.33.9	山形	果樹	山梨県果樹試験場（49.4～50.3） 農家　今井親輔（50.4～50.9）
同上	ガルアペー	槙松吉巻	S.24. 5.14(26才)	男	S.34.8	長野	果樹	農林省果樹試験場興津支場（49.4～50.9）
ボリビア国	オキナワ	平良賢次	S.21. 6. 7(29才)	男	S.32.10	沖縄	農協	福岡県農業協同組合講習所（49.4～50.3） 伊江村農業協同組合（50.4～50.9）
同上	オキナワ	幸地香雄	S.26. 1.21(23才)	男	S.29. 〃	沖縄	農協 綿花	福岡県農業協同組合講習所（49.4～50.3） 兼松江商株式会社大阪支社（50.4～50.9）
同上	サンフアン	藤井恒正	S.22. 9. 8(28才)	男	S.38.6	熊本	農協	福岡県農業協同組合講習所（49.4～50.3） 福岡県農協中央会　（50.4～50.9）
ドミニカ国	ハラバコア	福永正彦	S.22. 7.30(28才)	男	S.32.	鹿児島	農業機械	佐賀県農業研修学園（49.4～50.9）

移住者子弟技術研修生の会々則

1. 設　立　主　旨

われわれは，日本国に於ける技術研修期間終了後も，さらに友情を深め，各々の技術向上，人格練磨をはかり，移住地の礎となり，模範を示し活動する。

互いに強靭な絆によって結ばれ，本会の伸展に寄与し，末長く繁栄することを切望する。

同時に，各移住地発展のための研究，討議の機をつくることを設立の主旨とする。

2. 会　　則

第1条　（目　的）

本会は，会員相互の親睦を図り，会員各自の研修技術及びそれに関連する情報交換のために設立した。

第2条　（運　営）

本会は，その目的達成のため，次に掲げる事業を行うものとする。

1. 機関紙の発行　　2. 親睦会の開催　　3. その他

第3条　（会　員）

本会の会員は，南米等諸国より，日本国に留学した，国際協力事業団による移住者子弟技術研修生，及び修了生を以って，正会員とする。

第4条　（役　員）　〔細則5〕

1. 本会には下記の役員を置く。

(1)会長1名，(2)副会長1名，(3)支部長1名，(4)監事3名（但し監事は第3期生，第4期生，第5期生より各10名選出する。）

2. 支部長は，各支部の互選とし，会長，副会長，監事は総会によって選出する。

第3期生以後各期生の代表を選出する。

3. 役員の任期　〔細則5〕

10年とする。

3. 細　　則

＜前文＞

1972年9月27日。

南米第一，二回移住者子弟技術研修生全員，東京での会合を機に設立主旨の要望があり，全員協議の上，本会の設立に至ったものである。

以下，会則の施行について，現会員合議の上，下記条項を決定した。

細則 1.　機関紙の件

(1)　会員からの情報及び移住地のニュース等を掲載し，会員相互のコミュニケーションの場であると同時に，広く移住地の人のみならず，海外移住並びに移住地に関心をもつ全ての人のために役立てるものとする。

(2)　発行回数と発行時期

1年　1回

毎年4月30日発行

発行回数は，広域からの情報の編集期間を1ケ年として，新年度研修生の研修開始の時期までとする。

(3)　編集は，各支部に於いて，集められた情報，ニュース等を整理し，必要な編集及び誤字の訂正等を行って，本部に送付し，本部に於て最終的な仕上げを行って印刷にまわす。

(4)　機関紙は無償配布を原則とし，原稿料は出さず，自主的な，面白く，読みごたえのあるものを育てる。

(5)　機関紙第一号発行を1973年4月30日とし，名称は南十字星とする。

(6)　会長は，機関紙発行に際し，各支部及び各方面に広く原稿の依頼をしなければならない。また会員はよく協力しなければならない。

(7)　機関紙発行費は会費によりまかない，経費明細は紙上で報告する。

細則 2.　親睦会の開催の件

(1)　親睦会の開催は，単に同期生が会うということだけではなく，先輩とも同等の立場で，第一回生の研修修了並びに本会結成の日を記念して，本会の10年記記念を第一回目の親睦の会開催日とする。

(2)　第一回親睦の会開催日

○10年記念1982年9月27日

○開催場所　イグアスの滝（ブラジル領）

○その他（農場，移住地視察）　　○リクレーション

細則 3.　会費及び会計の件

(1)　会費は会員一人，年に＄2（暫定）とし，支部毎に集める。（送金日は，9月27日を原則とする）支部では，支部長が会計を兼ねる。但し，会員の増加に伴う，副支部長，並びに会計の設置は，各支部会員の過半数の賛成をもって認められる。各支部に於ける役員，会計等変更あったときは，直ちに本部に報告しなければならない。

(2) 本部に於ける会計は，本会結成の時点に於て，会長兼務とする。但し，本部地区に会員が居る場合には別に会計をおくことができる。

結成時点本部会費　Ｙ１１,１６０.００

(3) 会計報告は，年一回機関紙々上で報告する。

細則 4. 会員の件

(1) 正会員以外の会員を準会員とする。

(2) 本会結成時点で，会員は別紙①会員名簿の１８名である。

(3) 本会々員は，本部役員，支部役員及び一般会員並びに準会員により構成される。

細則 5. 役員の件

(1) 本会は，結成の時点において，ブラジルを５地区に区分し，５支部とし他の諸国は，各一支部設置する。（役員氏名別紙②の通り）

(2) 各支部長を以って，本部役員とし，役員の任期は１０年とする。但し，現役員が病気その他の事由により役務継続不可能のときはこの限りでない

細則 6. 会長権限の件

(1) 会長住所を暫定的に本部住所とする。

(2) 細則の変更

役員にはかり，多数決をもって会長権限で決定する。

(3) 事務局の設置。

会長は本部に於ける機関紙の編集等の執務に関し，予算を立てて使用可能な経費の範囲で，事務局を措く権限を有する。

(4) 会長は，役員会開催の急務発生したときは，直ちに各役員に通知し「紙面役員会」を行い，会長権限で事項を決定することができる。

※ 「紙面役員会」とは，書面に議案を刷り，その賛否を問う形式を原則とする。

＜終結＞ 本会は，毎年度一年半研修修了の時点で，新期生に申し送りをし，全員の入会を奨め，その期の長が，本部へ報告しなければならない。

編集後記

桜が舞う日本の土を踏み入れ，不安と希望に入りまじりながら迎えたこの１年半の研修が夢の様に過ぎ去ったかと思われます。

第４回移住者子弟技術研修生に選ばれ，はるばる南米の地から訪れた陰には，ご家族・地域の方々の暖かい支援があったと思います。

この１年半の研修は決して長い期間ではなく充分に研修するにはまだまだ心残りがあったかと思いますが，この与えられた期間が各自の技術に新たに大きくプラスされ，今後の移住地・地域社会の発展に必ず実践され貢献しうると確信しております。

又，この研修期間での体験が各自の人生の過程に於いて美しい想い出となって心の中に花を咲かせると思うのです。この花を心の宝として一生大切に育て，心豊かな人間になって欲しいものです。

この冊子〝ゆうかり〟は１年半の研修レポートとしてまとめたものですが〝初心忘れるべからず〟今後の活躍の〝励み〟となるばかりでなく，皆さんの絆を深めるきっかけとなっていただければ幸いです。

毎年発行するこの〝ゆうかり〟作成にあたり，各研修生の皆さんからの報告・便り等を待っております。

無事一人一人が帰国の途につくのを，懐しさと，これからの活躍を期待し，健闘を心からお祈り申し上げます。

（M.S，Y.Y）